

192
36
55

武家名目抄
職名下
卷一



塙檢校保巳一編



武家名目抄



武家名目抄一目次

第一册職名部一上

征夷大將軍上

第二册職名部一下

征夷大將軍下

第三册職名部二上

將軍

大將軍

副將軍

權副將軍

持節大將軍

前將軍

中將軍

後將軍

上將軍

騎兵大將軍

左將軍

右將軍

檢校兵庫將軍

一
一〇

一九

二一

二二

二三

二五

二五

二六

二七

二七

二七

二八

第四册職名部二下

鎮西將軍

征準人大將軍

征西大將軍

鎮東將軍

征東大將軍

征蝦夷將軍 又稱征狄將軍

鎮狄將軍

鎮守府將軍

鎮守府大將軍

第五册職名部三

大將

總大將

副大將 又稱副將

脇大將

侍大將

足輕大將

武者大將

軍大將

船大將

二九
二九
三〇
三二
三二
三二
三六
三七
三七

三六

三六

三七

三七

四二

四五

四六

四六

四六

四七

四七

五〇

五三

五四

五四

| | |
|-------------|----|
| 第六冊職名部四之一 | 五六 |
| 執權 | |
| 第七冊職名部四之二 | 五六 |
| 連署又連判又加判又合判 | |
| 第八冊職名部四之三 | 六四 |
| 管領 | |
| 管領代 | 七二 |
| 第九冊職名部四之四 | 七九 |
| 關東管領又稱鎌倉管領 | |
| 第十冊職名部五上 | 八一 |
| 評定衆 | 九一 |
| 式評定衆 | 九五 |
| 寄合衆 | 九七 |
| 第十一冊職名部五下 | |
| 引付頭又稱内談頭人 | 九八 |
| 引付衆又稱内談衆 | 九八 |

武家名目抄第一冊

職名部

○征夷大將軍
職名抄云征夷大將軍一人征夷者始於日本武尊每有兵事遣將帥也粗見書記云置鎮守已往東征人或爲按察使或爲鎮守將軍又爲綿丸以來有征夷將軍之號云云其後征夷將軍以中納言義仲朝臣京上暫執兵權之日任征夷將軍云々其後又權大納言右近大將源賴朝朝辭兩職歸東國之後有勅被任征夷大將軍爾來連綿賴家朝臣自少將之時兼之又實朝公自兵衛佐之時至大臣兼之彼流斷絶之後藤原賴經卿下向元服已後即任之其子賴朝卿又任之中務卿宗尊親王下向以後四代親王任之元弘一統之初兵部卿護良親王暫任之其後上野太守成良親王令兼之給建武二年二月被止其號畢凡賴朝卿補之後依重征夷之任不並任鎮守元弘以來被並任一畢建久以來未任副將軍於三軍盛軍曹者時々請任云々

○按奈其朝始めて按察使を置かれしは監察の用に於て征伐の爲めにあらず鎮守將軍を設けたるは鎮守の備へにして非常をいましむるにありこの故に無事の時にいへども猶これを補任せらるしるに本書共に以て征討の時より又征夷將軍の職は鎮守將軍より以前既に其任

職名部一上

ありいはゆる養老四年多治比羅守これに補するに始まり次に大伴乙麻呂坂上田村麻呂を経て後弘仁二年文室綿麻呂更に征夷將軍に補せられたり其始末は下に引ける國史の文に明なり

○續日本紀云養老四年九月丁丑陸奥國奏言蝦夷反亂殺按察使正五位上上毛野朝臣廣人戊寅以播磨按察使正四位上多治比真人縣守爲持節征夷將軍左京亮從五位下下毛野朝臣石代爲副將軍軍監二人軍曹二人即日授節刀

又云延曆十年正月己卯遣正五位上上毛野王俊從五位下坂上大宿禰田村麻呂於東海道從五位上藤原朝臣眞鸞於東山道簡關軍士兼檢戎具爲征蝦夷也七月壬申從四位下大伴宿禰弟麻呂爲征夷大使正五位上上毛野王俊從五位上多治比真人瀨成從五位下坂上大宿禰田村麻呂從五位下巨勢朝臣野足並爲副使

日本紀畧云延曆十年七月壬申從四位下大伴弟麻呂爲征夷大使十一年閏十一月己酉征東大使大伴乙麻呂辭見類聚國史云延曆十二年二月丙寅改征東使爲征夷使庚午征夷副使近衛少將坂上田村麻呂辭見

○按是よりさき養老朝職を征夷使といひ實應天應の頃に至ては必ず征東使と稱せり延暦の始めも猶其例によりしに同十年大伴弟麻呂更に征夷使とよばれたり然れども東の號は久しく傳はれる名なれば全く其號を止めて征夷使とのみふにもあらざりしを爰に至て正しく征夷使に改め稱せられしなり

又云十三年正月乙亥朔賜征夷大將軍大伴弟麻呂節刀六月甲寅副將軍坂上大宿禰田村麻呂以下征蝦夷二十四年正

月戊戌征夷大將軍大伴麻呂朝見進節刀十六年十一月
丙戌以從四位下坂上大宿禰田村麻呂爲征夷大將軍
有副將軍等十九年十一月庚子遣征夷大將軍近衛權中
將陸奥出羽按察使從四位上兼行陸奥守鎮守府將軍坂上大
宿禰田村麻呂檢校諸國夷俘

日本紀略云延曆二十年二月丙午征夷大將軍坂上田村麻呂
賜節刀九月丙戌征夷大將軍坂上大宿禰田村麻呂等言云
々討伏夷賊十月丁巳征夷大將軍坂上田村麻呂進節刀
十一月乙丑詔曰云々陸奥國乃蝦夷等歷代涉時天侵亂
邊境殺戮百姓是以從四位上坂上田村麻呂大宿禰等乎
遣天伐平掃治之乎云々田村麻呂授從三位爲非參議已
下授位

日本後紀云延曆廿三年正月甲辰刑部卿陸奥出羽按察使從
三位坂上大宿禰田村麻呂爲征夷大將軍正五位下百濟王
敕雲從五位下佐伯宿禰社屋從五位下道島宿禰御橋爲副
軍監八人軍曹廿四人

公卿補任云從三位坂上田村九征夷將軍近衛中將陸奥出羽
按察使延曆廿四年六月廿三日任參議兼官如故廿五年
四月十八日任中納言廿三日中衛大將征夷大將軍按察使
陸奥守勳二等大同二年四月二十二日改中衛大將爲右

谷且盡頭且究終止不得幸利因茲正四位上室朝臣綿
麻呂等乎遣而其便獲勢乘且伐平掃治之乎副將軍等各同心
戮力忘殉心以且不惜身命勤仕奉利幽遠久薄伐巢穴乎破
覆之遂其種族乎絶且復一二乃遺毛無邊戎乎解却轉餉乎停廢部
量其功勞波上治賜賜足止奈御念須故是以其仕奉狀乃重輕
乃隨冠冕上賜比治賜久宣天皇御命乎衆聞食止宣正四位上文

室朝臣綿麻呂授從三位從五位下佐伯宿禰耳麻呂正五位
下從五位下大伴宿禰今人坂上大宿禰藤養從五位上外從五
位下物部直理連足繼外從五位上閏十二月辛丑征夷將軍參
議從三位行大藏卿兼陸奥出羽按察使文室朝臣綿麻呂奏言

今官軍一舉寇賊無遺事須悉廢鎮兵永安百姓而城
柵等所納器仗軍糧其數不少迄于遷納不可廢衛伏
望置一千人充其守衛其志波城近于河濱屢被水害
須去其處遷立便地伏望置一千人整充其守衛遷
其城訖則留一千人永爲鎮戍自余悉從解却又兵士之
設爲備非常既無遺寇何置兵士但邊國之守不可卒
停伏望置一千人其餘解除又自寶龜五年至于當年

據卅八歲邊寇屢動警々無絕丁壯老弱或疲於征伐或倦
於轉運百姓窮弊未得休息伏望給復四年殊休疲弊其
鎮兵者以次差點輪轉復免者並許之

○按蝦夷の反亂代を歴て
やまず故に時々將軍をたつ

近衛大將八月十四日兼侍從十一月十六日兼兵部卿
右大將將軍如元四年三月廿九日叙正三位征夷大將軍
如元弘仁元年九月十日任大納言兵部卿侍從如元

日本後紀云弘仁二年四月庚辰正四位上室朝臣綿麻呂
爲征夷將軍從五位下大伴宿禰今人佐伯宿禰耳麻呂坂上
大宿禰藤養爲副壬午勅征夷將軍等曰夷狄于紀爲日
已久雖加征伐未盡誅劔今依來請今將出兵其軍
監軍曹等且備用具奏上但犯軍法禁身請裁隊長已下
依法決斷國之安危在此一舉將軍勉之五月壬子敕征
夷將軍正四位上兼陸奥出羽按察使文室朝臣綿麻呂等曰
(中略)檢去延曆十三年例征軍十萬軍監十六人軍曹五十
八人廿年征軍四萬軍監五人軍曹卅二人今將軍等准承前
例所定四十七人權用十五人者今所與征軍一萬九千五
百餘人然則四萬之日軍吏不滿五十今日二萬何超六
十仍折衷所定軍監十人軍曹廿人宜精選選堪戰者充用
言上十二月甲戌詔曰天皇詔旨止敕命乎衆聞食止宣陸奥
國乃蝦夷等歷代涉時侵亂邊境殺戮百姓是以持畏
柏原朝廷乃御時實故從三位大伴宿禰弟麻呂等乎遣且伐平
給比而餘燼猶遺且鎮守未息又故大納言坂上大宿禰田村麻
呂等乎遣且伐平之給不遠開伊村乎極而畧掃除且之可逃隱山

守將軍ひより其要なりしに此後ちたて征夷使を拜せし
ことあれば陸奥出羽等の國司を備し官兵を興してこれを征するこ
れりこれ時に制ありてきためしこに
はあらず時世の勢によれるなるへし

帝王編年記云元曆元年正月十日伊豫守義仲兼征夷大將
軍云々○按百餘抄源平盛衰記十日十一日と玉海十四日とす且玉海
へさも吾妻鏡にいへる所詳なるに
似たればはらうこれにしたがふ

吾妻鏡云元曆元年正月十日庚子伊豫守義仲兼征夷大將
軍云々粗勸先規於鎮守府宣下者坂上田村麻呂中興以後
至藤原範季安元二離及七十度至征夷使者爲兩度
歎所謂桓武天皇御宇延曆十六年丁丑十一月五日被補
按察使兼陸奥守坂上田村麻呂卿朱雀院御宇天慶三年庚

子正月十八日被補參議右衛門督藤原忠文朝臣等也爾
以降皇家廿二代歲曆二百四十五年絕而不補此職之處
今始例於三輩可謂希代朝恩歎云云○按忠文は征夷大將
は帶せず本許及び公卿補任等に征夷大將軍といへるは非なり既征夷將軍
の條にあり又田村麻呂を以て征夷使の始めとするも誤なり其よしは卷首
の下の記せり

康富記文安六年三月廿一日下云征夷將軍宣旨事或除目或
宣下也雖爲宣下一多分外記方奉三行之木會義仲補之時
爲官方宣旨其後又度々爲外記方之沙汰云々

將軍次第云前右大將源朝臣賴朝卿下野守義朝朝臣位下

從四

行左馬頭兼攝 三男母尾張熱田大宮司散位季範女保元三年二月三日任皇后宮權少進同四年改平正月廿九日兼右近將監同二月十三日補上西門院藏人同十二月十四日任右兵衛權佐同日叙爵同廿八日解官永曆元年三月十一日配流伊豆國北條治承四年七月可追討平家一類之由被後白河院宣高倉宮令旨八月十一日誅和泉判官兼隆是合戰始也壽永二年十月九日復本位從五位下同三年改元三月廿七日叙正四位下追討前伊豫守義仲賞元曆二年改元四月廿七日叙從二位召進前內大臣宗盛賞文治五年正月五日叙正二位建久元年十一月九日任大納言不歷參議中納言直任例同廿四日兼右近衛大將同十二月四日辭退兩職同三年七月十二日爲征夷大將軍同十年改元正月十一日依病出家同十三日薨五十五

吾妻鏡云元曆元年四月十日戊寅源九郎義經使者自京都參着去月廿七日有除目武衛朝叙正四位下給之由申之是義仲追討賞也持參彼聞書此事藤原秀郷朝臣天慶三年三月九日自六位昇從下四位也武衛御本位者從下五位也被准依忠文治民之例可有征夷將軍宣下歟之由有其沙汰而越階事者彼時准據可然於將軍事者賜節刀被任軍監軍曹之時被行除目歟被

載今度除目之條似始置其官無左右難被宣下之由依有諸卿群議先叙位云々

又云文治元年十一月十二日辛卯因幡前司廣元申云世已澆季鼻惡者尤得秋也天下有反逆輩之條更不可斷絕而於東海道之內者依爲御居所雖令靜謐奸濫定起於他方歟爲相鎖之每度被發遣東土者人々煩也國費也以此次諸國交御沙汰每國衙莊園被補守護地頭者強不可有所怖早可令申請給云々二品殊甘心以此儀治定本末相應忠言之所令然也廿八日丙午補任諸國平均守護地頭不論權門勢家莊公可充課兵糶米段別之由今夜北條殿謁申藤原房卿中納言云々二年三月一日己卯諸國被補總追補使并地頭○按追補使といふくはしくは總追補使の條に註せり

又云建久三年七月廿日庚寅大理保飛脚參着去十二日任征夷大將軍給其除書差敕使欲被進之由被申送廿五日丙申敕使廳官肥後介中原景良同康定等參着所持參征夷大將軍除書也兩人衣冠任例列立子鶴岡廟庭以使者可進除書之由申之被遣三浦義澄義澄相具比企右衛門尉能員和田三郎宗實并郎從十人各甲詣宮寺請取彼狀則歸參幕下御東豫出御西廊除書云征夷使大

將軍源賴朝云々將軍事本自難被懸御意于今不令達之給而法皇崩御之後朝政初度殊有沙汰被任之間故以及勅使云々

將軍次第云左衛門督源朝臣賴家卿賴朝嫡男母遠江守平時政女從二位建久八年十二月十五日叙從五位上同日任右近衛權少將同九年十一月十一日叙正五位下同十年改元正月廿日轉左近衛權中將同廿六日可令奉行諸國守護之由被宣下正治二年正月五日叙從四位上同十月廿六日叙從三位同日任左衛門督建仁二年正月廿三日叙正三位同七月廿三日叙從二位同日爲征夷大將軍同三年七月廿七日受病同八月廿七日讓跡於長子一萬公六才母比木同九月七日出家同廿六日籠居伊豆國元久元年七月十八日於伊豆國修禪寺被誅了

吾妻鏡云正治元年二月六日戊辰羽林殿下去月廿日轉左中將給同廿六日宣下云續前征夷將軍源朝臣遺跡宣令彼家人郎從等如舊奉行諸國守護者

又云建仁三年八月廿七日壬戌將軍家御不例緯危急之間有御讓補沙汰以關西二十八個國地頭職被奉讓舍弟千幡朝君十歲以關東二十八個國地頭并總守護職被充御長子一幡君六歲○按此地頭職守護職をゆつるさいへるはそれれを進退與するの權をさしていふみづから其職

保曆間記云建仁三年七月廿一日賴家病ヲ受キ病氣次第ニ難儀ノ間八月廿七日遺跡ヲ長子御前讓リ坂ヨリ西三十八个國舍弟千幡朝君被讓畢矣比企判官藤原能員一萬御遠江守時政前外祖ヲ打天下ノ世務ヲ一人シテ相計ハントスル此コト聞エテ九月二日能員ヲ時政ノ宿所ヘタハカリ寄テ差殺シ畢同六日一萬御前并能員子息宗朝以下小御所ニ簡テ合戦ス數萬騎ノ軍勢ヲ差遣シテ能員一族悉ク打畢アマツサヘ一萬御前サヘ御所ニ火ヲ懸ケレハ燒死シ給フ將軍次第云右大臣源朝臣實朝公賴朝卿二男母同前建仁三年九月七日補征夷大將軍同日叙從五位下十月廿四日任右兵衛佐元久元年正月五日叙從五位上三月六日任右近衛少將同二年正月五日叙正五位下同廿九日轉右近衛權中將同三年改元二月二十二日叙從四位下建永二年改元正月五日叙從四位上承元二年十二月九日叙正四位下同三年四月十日叙從三位五月廿六日更任右中將建曆元年正月五日叙正三位同二年十二月十日叙從二位中將如元同三年改元二月廿七日叙正二位建保四年六月廿日任權中納言右近衛中將如元同七月廿日轉左中將同六年正月十三日任權大納言同三月

六日兼左近衛大將同日爲左馬寮御監 同十月九日任
 内大臣左大將如元十二月二日轉右大臣大將如元同
 七年改承正月廿七日戊戌爲拜賀參詣鶴岡八幡宮之
 時於社壇爲若宮別當公曉阿闍利頼家被害了
 太平記云武家頼朝ノ長男左衛門督頼家次男右大臣實朝
 公相隨テ皆征夷將軍ノ武將ニ備ル是ヲ號ニ二代將軍
 保曆間記云二代將軍ノ跡サテ有ヘキニモナケレハ二位殿
 頼家實朝母儀時頼家實朝母儀時并義時關東ノ侍トモ申語ラヒテ將軍ノ定ア
 政女親政子一其比光明峯寺入道道家關白ノ三男頼朝頼朝の子時ト申ハ聊
 先將軍ノ縁類ニテ御座ケレハ此人ヲ將軍ニ定メテ公家へ
 申ス同六月二十五日請シ下シ奉ル嘉祿元年七月十一日二
 位家六十九ニテ薨セラレケリ實朝天亡以後大方天下ノコ
 トヲ口入セラレケリ
 將軍執權次第云平政子建保六年四月十四日叙從三位同
 十一月十三日叙從二位頼家實朝母儀也但不蒙將軍宣
 旨頼經卿年少之間爲彼代官所成敗也
 將軍次第云大納言藤原朝臣頼經卿光明峯寺入道前攝政左
 大臣道家三男母太政大臣公經公女承久元年六月廿五日出
 京同七月十九日下着關東嘉祿元年正月廿七日補征夷
 將軍同日任右近衛少將即叙正五位下寛喜三年二月
 四位上建長元年正月廿二日叙正四位下六月十四日依
 左近衛中將同三年六月廿七日叙從三位中將如元同四
 年三月廿日入御越後守時盛佐介亭四月三日進發十八日
 入洛建長八年改八月廿四日卒八

五日叙從四位上少將如元三月十五日轉左近衛中
 將四月八日叙正四位下貞永元年二月廿七日叙從三
 位左中將如元天福元年正月廿八日任權中納言左中將
 如元二年十二月廿一日叙正三位同日辭權中納言文
 曆二年十月八日補按察使十一月十九日叙從二位嘉禎
 二年七月廿日叙正二位十一月十二日任民部卿去按
 察使同四年改二月廿三日還任中納言同日兼左衛門
 督同十六日補檢非違使別當三月七日辭左衛門督別當
 轉任權大納言四月十八日辭寬元二年四月廿八日讓跡
 長子頼嗣同三年八月五日出家法名行智同四年七月五
 日進發同廿七日入洛着祇園中路建長八年八月十一日
 卒九
 保曆間記云寬元二年四月二十一日將軍ノ若君元服シ給ヒ
 頼嗣ト申ス同月廿八日征夷將軍同日任左少將同三年七
 月五日頼經將軍出家シタマヒケルコレヲ入道將軍ト申ス
 頼嗣幼穉ノ間出家ノ後モ政ヲハ開給ヒケリ
 將軍次第云三位中將藤原朝臣頼嗣卿頼經卿一男母大納言
 宗親卿女寬元二年四月廿八日補征夷大將軍同日任左
 近衛少將即叙從五位下八月廿五日叙正五位下同四
 年十一月廿二日叙從四位下寶治二年八月廿五日叙從
 五位上建長元年正月廿二日叙正四位下六月十四日依
 左近衛中將同三年六月廿七日叙從三位中將如元同四
 年三月廿日入御越後守時盛佐介亭四月三日進發十八日
 入洛建長八年改八月廿四日卒八

又云一品親王宗尊後睦院第二皇子母准后平棟子木工權頭
棟子女
○按親王實は後醍醐帝第一の皇子にて御深草帝より數月の兄なりしけれ
ども其母いやしき故に儲君たることを得ざりしなりこゝに第二子とせ
るはいはれあるこゝなるへし保曆間記四宮と
いへるはこゝによりこゝなるなきひのこなり 寬元二年正月廿八日
 爲親王建長四年三月十九日出京四月一日補征夷大將
 軍同日叙三品同日鎌倉入相摸守時頼館入御十一
 月十一日渡御新造御所文永二年九月十七日任中務卿
 叙三品同三年七月四日入御時盛私屋同八日上洛同廿
 日入京十月九日入御土御門御所花山
 増鏡云内野のさても院後の第一のみこ宗は右中辨平のむ
 ねのりのぬしのむすめ四條院に兵衛内侍とてさふらひし
 か劍璽につきてわたりまわれりしをしのひく御覽しけ
 るほどにその御腹にいてもしたまへりしかと當代生れ
 させたまひにし後はおしけたれておはしますにまた建長
 元年后子はらに二のみや山さへさしつゝきひかりいてた
 まへれはいよくいまは思ひたえぬる御ちきりのほどを
 わたくしものいとおはれに思ひきこえさせ給源氏にや

なしたてまつらましなどおほすになほあかねはたみこ
 にてあつまのあるしになしきこえてんと思して建長四年
 正月八日院の御まへにて御かうふりし給御門の御元服に
 もほどとおとらすくらつかさなにくれきよらをつくし
 給やかて三品の加階たまはり給御とし十一なるへし中務
 卿むねたか親王と申めりおなしき三月十九日都をいて給
 其日將軍の宣旨かうふり給かゝるためしはいまた侍らぬ
 にや上下めつらしくおもしろきことにいひさわくへし御
 むかへにあつまの武士どもあまたのほり六波羅よりも名
 あるもの十人御おくりを下る上達部殿上人女房などあま
 たまゐるも院中の奉公にひとしかるへしかしこにさふら
 ふどもかきりあらんつかさかうふりなどはさはりあるま
 しとそ仰せられける何事もた、人からによるとみえたり
 きはことによそほしけなり誠に大やけとなり給はずはこ
 れよりまさること何事かあらんにはははしく花やかさは
 ならふかたなし院のうへもまのひて粟田口のはどりに御
 車たてて御覽しおくりけるこそあはれにかたしけなく侍
 れきひはにうつくしけにてはるはるとおはしますを御母
 のないしもあはれにかたしけなしと思ひきこゆへしか、
 れはもその將軍よりつくの三位中將はその四月に都への

はり給ぬいとをしけにを見え給ひけるさて今くたり給へるをもてあかめたてまつるさまいはん方なしみやの内のまつらひ御まうけの事などかきりあはれせんけん天のまゆめうのまやうこんもかくやとを覺えける○按本書及五代帝の母は右中辨棟範の女と記したれ平戸記菅葉鏡等を考ふるに將軍次第に木工頭棟基の女といへるをよしむす

將軍執權次第云惟康宗尊親王御子御母攝政兼經公女文永三年七月廿四日從四位下即爲將軍七年十二月廿日左中將從三位今日賜源姓云々九年正月五日從二位中將如元弘安二年二月五日正二位十年六月五日任中納言兼右大將正應二年九月十三日御上洛廿二月六日御出家

帝王編年記云征夷大將軍二品惟康親王弘安十年十月四日爲三品親王

保曆間記云正應二年九月十四日將軍惟康親王御上洛有ケリ同十月廿五日式部卿親王久明後深草院宮御下向有テ征夷將軍ニ成給フ御息所ニハ先將軍ノ御女成セ給ケリ

將軍執權次第云久明親王正應二年十月一日立親王同十日自仙洞渡御六波羅北方同日御出京同廿五日入鎌倉十一月九日爲將軍永仁五年十二月十七日式部卿延慶元年七月九日子尅佐介谷出御同十九日御上洛

有聖斷被成征夷將軍官旨依之宮ノ御憤モ散シケルニヤ六月十七日志貴ヲ御立八幡ニ七日御逗留有テ同二十三日御入洛アリ

保曆間記云先帝後鳥羽攝津國西ノ宮迄御上有リ同六月四日東寺へ入セ給テ同五日ニ威儀ヲ調テ則内裏へ入セ給テ重祚有キ爰ニ諸人賞ヲ行ハル而ルニ尊氏昇殿官途ハ成タリケレ共指ル恩賞モナシ其故ハ大塔宮還俗御座テ宮將軍ト申ケルガサ、へ申サセ給ケリ尊氏兵權ヲ取テハ昔ノ頼朝ニ不可替此此ニ誅罰セラルベシト申サレケルヲ帝サシモノ軍忠ノ仁也トテ無ニ其儀一彼宮種々ノ計事ヲ廻テ便宜アラバ尊氏ヲ打ントセラレケレ共東國ノ武士多ハ尊氏方也ケル上ニ譜代ノ武勇ナレバ輒モ打レヌ將軍ニサヘナサルベシト聞ユ宮ハツカサシ給キ二品兵部卿護良親王ト申ス征夷將軍ニナラヌ事ヲ辭憤シテトカク思計給ケル程ニ東國ノ武士多ハ出羽陸奥ヲ領シテ其力モアリ是ヲ取放サント議シテ當今ノ宮一所其義可奉下トテ國司ニハ土御門ノ入道大納言親房ノ息男顯家卿ヲナシテ父子共ニ下サル誠ニ關東ノ侍モ多付テゾ下リケル彼兩國ハ日本半國ナント申國ナレバ如此計給ケルモ謂アリ同十二月主上ノ宮成良親王ト申ニ尊氏舍弟左馬頭直義朝臣相副テ關東八

保曆間記云德治三年延慶八月當將軍久明親王御上洛アリ同廿七日彼親王ノ御子守邦即母惟康親王御女征夷將軍ニ成タマヒケリ

皇胤紹運錄云守邦親王二品征夷大將軍元弘三五廿二出家關東滅亡故也

太平記云公家一統同年元弘六月三日大塔宮其義志貴ノ毗沙門堂ニ御坐有ト聞エシカハ畿内近國ノ勢ハ不レ及申京中遠國ノ兵ヲテモ人ヨリ先ニト馳參リケル主上右大辨宰相清忠ヲ勅使ニテ被仰ケルハ天下已ニ鎮テ偃ニ七德之余威ニ成九功之大化ニ處ニ猶動干戈被集士卒之條其要何事乎宮清忠ヲ御前近ク被召勅答申サセ給ヒケルハ今四海一時ニ定テ萬民誇ニ無事化ニ依ニ陛下休明德由ニ微臣籌策功ニ矣而ルニ足利治部大輔高氏僅ニ以一戰功ニ欲立ニ其志於萬人之上今若乘ニ其勢微ニ不討之取ニ高時法師逆惡加ニ高氏威勢上者ナルヘシ是故に舉兵備武全非ニ臣罪云々清忠卿歸參シテ此由ヲ奏聞シケレハ主上具ニ被聞食居大樹位全武備守ケニモ爲朝家似忘人嘲高氏誅罰ノ事彼不忠何事乎太平ノ後天下ノ士卒大抱恐懼心若無罪行罰諸卒豈成安堵思哉余ハ於大樹任不可有子細至高氏誅罰事堅ク可留其企

ケ國爲ニ守護下向アリ鎌倉ノ將軍トゾ申ケルサレドモ出羽奥州ヲ取放サル、問東國ノ武士多ハ奥州へ下ル間古ノ關東ノ面影モ無リケリ○按鎌倉亡びて後護良親王征夷將軍に任じしを儀に兵部卿になして將軍をさしめ給ひしことはおもふに親王足利家を滅さんか意深かりければ勅許なければ密に謀りたまふ事ありしを帝あしざまに聞なしたまひて其權をおささんとして兵部卿になしたまへるなり

太平記云中前代今元弘天下ニ統一統ニ歸シテ寰中雖無事朝敵ノ餘黨東國ニ在ヌベケレバ鎌倉ニ探題ヲ一人オカデハ惡カリヌベシトテ當今第八ノ宮ヲ征夷將軍ニナシ奉テ鎌倉ニゾ置進セラレケル○按本文のいへる所は成良親王まづ將軍に補せられたるに補せられしなり

神皇正統記云同元弘十二月左馬頭源直義の朝臣相摸守を兼して下向す是も四品上野の太守成良親王をともなひ奉る此親王後にまばらく征夷大將軍を兼させたまふ直義は高氏か弟なり(中略)建武乙亥二の秋のころはひ高時が餘類行謀叛をおこして鎌倉にいりの直義は成良の親王を引つれて參河國迄のかれに○按成良親王は建武三年二月に征夷將軍の職原抄に見たり

異本皇胤紹運錄云以護良成良等二號三南朝二代將軍

武家名目抄第二册

職名部 一下

○征夷大將軍

足利家官位記云等持院尊氏始 元應元年十月十日從五位下 今日任治部大輔元無官號 同二年九月五日去大輔正 慶元年六月八日叙從五位上 元弘三年五月五日爲鎮守 府將軍今日總內昇殿 同六月十二日叙從四位下 今日 任左兵法督 同八月五日叙從三位今日以高爲尊 同四年正月五 日叙正三位 建武元年九月十四日任參議 左兵衛督如 元同二年八月九日爲征夷大將軍元鎮守府將軍 同月三十日叙從 二位勳功 同十一月廿六日解官依勳也 按尊氏卿の征夷將軍に 應元年八月のこにて建武二年より後四年にありたるは征夷將軍の されしを關東下向の後私に征夷將軍と稱せしなり然るを本書その自稱の 非を置ふてかく書なせるは足利家にてなりたる物なれ ばなり論次々に引たる太平記正統記等を照し見るべし

同三年十一月廿五日任權大納言不任中 同五年元 八月 十一日叙正二位追討 同日爲征夷大將軍 康永元年十 二月廿三日服解 同二年三月七日復任辭申之由被仰申之 征夷大將軍不被辭申之 同廿五日聞食之由被仰申之 勅 答 延文三年四月卅日薨前權大納言征夷大將軍 正二位五十四歳 同六月三日贈左

罷下テ朝敵ヲ退治仕ルヘキニテ候若此兩條勅許ヲ蒙スン ハ關東征伐ノ事可被仰付他人一候トソ被申ケル此兩 條ハ天下治亂ノ端ナレハ君モ能ク御思案アルヘカリケル ヲ申請ル旨ニ任テ無左右勅許有ケルコソ始終如何トハ 覺エケレ但征夷將軍ノ事ハ關東靜謐ノ忠ニ可依東八箇 國ノ管領ノ事ハ先不可有子細トテ則繪旨ヲ被成下ケル 是ノミナラス添モ天子ノ御諱ノ字ヲ被下テ高ノ字 ヲ改テ尊ノ字ニソ被成ケル尊氏卿東八箇國ヲ管領シ テ所望輒ク道行テ征夷將軍ノ事ハ今度ノ忠節ニ可依ト 勅約有ケレハ時日ヲ不關東ヘ被下向ケケリ 神皇正統記云尊氏は申うけて東國に向けるか征夷將軍な らひに諸國の惣追捕使を望みければ征夷將軍になされて ことくはゆるされす程なく東國は静まりぬ尊氏望む ところ達せずして謀叛をおこすよし聞えける○按此記及職 原抄はとも 北島准后の述作なるを獨り世の知所なり然るに被抄を考るに建武三年二 月までは成良親王征夷將軍の職に居られし由を注せられ此記にはこの時 尊氏卿に征夷の號を授け給ひしことをのせたり幸儀の記といふし今吉 野御事案保原間記源氏系圖等によりて考るに此時被仰を征夷將軍に なされしなりされ此記も原は征夷將軍ありつらんを足利家の人の手 に加へて改めしものさみなり足利家官位記には征夷とありて太平記に は足利征夷將軍と自稱せられし事を記せるなき思ひあはせてさるるへき なり後醍醐帝吉野に行幸ありて光明帝御即位の後にこそはじめて征夷の號 をはしなれ

太平記云尊氏義貞 足利宰相尊氏卿ハ相模次郎時行ヲ退治

大臣從一位康正三年四月廿八日贈太政大臣

保曆間記云建武二年七月ニ高時ノ息勝長壽丸相模二信 郎時行 濃國ノ勢ヲ語テ鎌倉ヘ責上ル同廿八日相模次郎鎌倉ヘ打 入關東ノ侍并在國ノ輩ハ皆鎌倉ヘ付テ天下又打飯シテ見 エケル程ニ京都ノ騷動不斜其時尊氏可罷向一由仰ラレ 直義打負テ落ル上ハ申請テ可罷向一由存候但頼朝カ例ニ 任セ征夷將軍ノ官旨ヲ蒙ラント申ス處ニ不叶シテ征東 將軍ノ官ヲ送ラル無念ニ存既ニ尊氏ハ發向シケリ○按 征東 案等によりてこれを改む案圖御事案は征夷將軍の所に引たり 太平記云足利殿東 諸卿議奏行テ急足利宰相高氏卿ヲ討手ニ 可被下ニ定リケリ則勅使ヲ以テ此由ヲ被仰下ケレハ 相公勅使ニ對シテ被申ケルハ去ヌル元弘ノ亂ノ始高氏御 方ニ參セシニ依テ天下ノ士卒皆官軍ニ屬シテ勝事ヲ一時 ニ決シ候キ然ハ今一統ノ御代偏ニ高氏カ武功ト可云抑 征夷將軍ノ任ハ代々源平ノ輩功ニ依テ其位ニ居スル例 不可勝計一此一事殊ニ爲朝爲家望ニ深キ所也次ニハ 亂ヲ鎮メ治ヲ致スニ以謀士卒有レ功時節ニ賞ヲ行ニシク ハナシ若註進ヲ經テ軍勢ノ忠否ヲ奏聞セハ舉達道遠シテ 忠戰ノ輩勇ヲ不可成然ハ暫東八箇國ノ管領ヲ被許直 二軍勢ノ恩賞ヲ執行フ様ニ勅裁ヲ被成下ニ夜ヲ日ニ繼テ

シテ東國懸テ靜謐シヌレハ勅約ノ上ハ何ノ仔細カ有ヘキ トテイマタ宣旨ヲ下サレサルニ押テ足利征夷將軍トソ申 ケル東八箇國管領ノ事ハ勅許有シ事ナレハトテ今に宮根 相模河ニテ合戰ノ時忠アル輩ニ恩賞ヲ行ハル先立テ新田 一族共拜領シタル東國ノ所領共ヲ悉ク闕所ニ成シテ給人 ヲソ附ラレケル 又云本朝將軍補任 兄弟無其例條 十一月五日元 除目ニ足利宰相尊氏卿上 首十一人ヲ越テ位正三位ニアカリ官大納言ニ選テ征夷將 軍ノ武將ニ備リ給フ舍弟左馬頭直義朝臣ハ五人ヲ越テ位 四品ニ叙シ官宰相ニ任シテ日本ノ副將軍ニ成給フ○按本文 下 予て誤おほし官位記いふ所公卿補任にかはなはたは其實を得たりとす 又直義朝臣の副將軍たりしことは諸卿のいはさる所にして其妄説なるは 事さしり論をまたす思ふに當時その勢の將軍家に次けるを以て世に副將 軍といひげんを其まゝにのける成へし天正本直義に征夷將軍の官旨を下 されけるを考あらためた るは殊に極たる妄説なり 同天正本云今般ノ除目ニ尊氏卿上首十一人ヲ越テ正二位 征夷大將軍ノ武將ニ備ハリ給ヘハ直義從上四品ニ叙シ左 兵衛督兼相模守征東將軍ノ官旨ヲソ下サレケル 三内口決云凡將軍ハ有朝敵ノ時爲追討一旦被補之 尊氏依前忠永代可爲將軍家之由被仰出候後他人 之競望無之候者也副將軍ハ建久以後無其沙汰一況於當 時者依被重將軍家彌近代不及沙汰候

職名部 一下

太平記云征夷吉野ノ將軍ノ宮與ト申ハ故兵部卿親王眞御子御母ハ北畠准后房ノ御妹ニテ御座ケル御幼稚ノ時ヨリ文武二道何レモ達シテ見エサセ給ヒシカハ此宮ヲ誠ニ四海ノ逆浪ヲモ靜メラレテ舊主先帝後醍醐ノ御追念ヲモ休メ進ラセラルヘキ御器量ニテ御座トテ吉野ノ新帝後村登極ノ後則被宣下征夷將軍ニ成シ進ラセラル中略今紀伊國ノ合戰ニ四條中納言打負テ阿瀬河ヘ落給ヌ和田楠モ津々山ノ敵陣ニ被攻テ機渡ヌト見エケレハ今ハイソヲカ可レ期可レ然兵共ヲ被相副候ヘ自出向テ合戰ヲ致候ハント宮類ニ被仰ケル間ケニモトテ此三四年兄弟不利ノ事有テ吉野ヘ被參タリケル赤松彈正少弼氏範ニ吉野十八郷ノ兵ヲ差副テ宮ノ御方ヘソ進セラレケル宮此勢ヲ付順ヘサセ給テ後何ナル物狂ハシキ御心ヤ着ケンサラハ此時分ニ吉野ノ新帝ヲ亡シ奉テ武家ノ爲ニ忠ヲ致シテ吉野十八郷ヲ一圓ニ管領セハヤト思召ケルコソ不思議ナレ密ニ御使ヲ以テ事ノ由ヲ義詮朝臣ノ方ヘ被牒テ四月廿五日宮ノ御勢二百餘騎野伏三千人ヲ召具シテ賀名生ノ奥ニ銀嵩ト云山ニ打上リ御旗ヲ被揚宮ノ御謀叛事已急也ト奏聞シケレハ懸其翌ノ日二條前關白殿ヲ大將軍トシテ和泉大和宇多宇智郡ノ勢千餘騎ヲ向ラル三日夜相戰テ氏範

數箇所ノ疵ヲ被テケレハ今ハ叶ハシトテ宮ハ南都ノ方ヘ落サセ給ヘハ氏範ハ降人ニ成テ又本國播州ヘ立返ル不思議ナリシ御謀叛也○按本文將軍宮といへるは隆良親王の御子與良親職原抄にのせられざるは被抄なりし後のことなればなり其宣下の年月今考ふる所なし思ふに正平の初にや有けん阿蘇宮文書に正平四年四月征夷大將軍宮の氣色によりて勤解由次官某の執達の状態あるは此の宮のことなるへし本文にいへる所は正平十五年の事なり此宮吉野を去給ひし後程ありて南朝又此職を置れしと見えて阿蘇宮文書に建徳三年三月征夷大將軍宮の仰に依テ左少將胤房執達の状態ありされ此宮は隆も詳ならず上に何帝の皇子といふことしまたかならざればこゝにはもちせり

卅日補征夷大將軍同六年十一月廿五日任參議同日兼左中將叙從四位下勳功永和元年十一月廿日叙從三位同四年三月廿四日任權大納言同八月廿七日兼右大將同四年十二月十三日叙從二位同五年正月六日御監康曆二年正月五日叙從一位永德元年四月廿九日補家司同七月廿三日任內大臣大將如元同二年正月廿六日轉左大臣大將如元同閏正月十九日補藏人所別當同三月廿八日聽牛車同四月廿一日爲院別當同三年正月十四日爲源氏長者同十六日爲辨學院淳和院等別當同六月廿六日准三宮至德元年三月十日辭大將嘉慶二年五月廿六日辭左大臣明德三年十二月廿六日還任左大臣應永元年十二月十七日辭征夷大將軍讓任御息同廿五日任太政大臣同二年六月三日辭相國同廿日御落飾同十五年五月六日御圓寂五十

足利家官位記云寶篋院殿建武二年四月七日叙從五位下康永三年三月十六日叙正五位下同月十八日任左馬頭貞和三年四月廿二日叙從四位下觀應元年八月廿二日任參議兼左中將延文元年八月廿八日叙從三位同三年十二月八日補征夷大將軍貞治二年正月廿八日任權大納言不經中征夷大將軍如元同七月廿九日叙從二位同六年正月五日叙正二位同十二月七日前權大納言征夷大將軍同月卅日贈左大臣從一位征夷大將軍後恩味記云貞治二年正月卅日辛未開書披露大樹任權大納言征夷將軍不經中納言故尊氏卿例也足利家官位記云鹿苑院殿貞治五年十二月七日叙從五位下同六年十一月廿五日寶篋院殿讓與繁務事同十二月三日叙正五位下同月七日任左馬頭應安元年十二月二年六月三日叙從四位下同三年四月廿日叙正四位下同九月十二日任參議左中將如元同四年正月五日叙從三位同三月廿九日任權中納言同五年正月五日叙正三位同七年正月五日叙從二位同八年三月廿四日任權大納言同九年正月六日叙正二位同十一月十九日叙從一位同十三年八月十七日兼右大將同十四年正月五日御監同十六年七月廿三日任內大臣大將如元同十九年五月廿九日辭大將同月日爲院執事同年八月七日兵仗宣下同十月廿二日爲辨學院淳和院等別當同十三日爲源氏長者同廿六年八月廿九日辭內大臣同卅年三月十八日以征夷大將軍讓任御息同四月廿五日御出家同卅五年正月十八日正長御圓寂四十同廿二日贈太政大臣又云長得院殿應永四年十二月朔日叙正五位下同日任右近衛中將禁色宣下同月十三日昇殿同卅年三月十八日任征夷大將軍受父同卅一年正月十二日叙從四位下同月十月十三日任參議同卅二年二月廿七日十九贈左大臣從一位又云普廣院殿義宣后應永卅五年三月十二日任左馬頭今日先從五位下今日御同年四月十四日叙從四位下左馬頭叙留永享元年三月九日禁色宣下同月十五日任參議今朝

和氣氏法名といふには鹿苑院殿天山道有法皇と注し將軍家譜の一説にも天子勅贈法皇號と見えたり後高倉院御難難の後太政大臣の號を奉られし例なき思ひ合するに鹿苑院も入道なれば法皇號を贈るといへる其謂あるに似たり

足利家官位記云勝定院殿持應永元年十二月十七日叙正五位下今日任左中將禁色昇殿補征夷大將軍同

名爲征夷大將軍二月廿九日任權大納言今日從三位同八月四日兼右大將同十二月十三日叙從二位同二年正月六日御監同十月十七日叙從一位同四年七月廿五日任內大臣大將如元同八月廿八日轉左大臣大將如元同十二月九日補辨學院淳和院等別當即爲源氏長者同日聽牛車同五年八月九日辭大將同九年十月十日兵仗宣下同十年九月四日辭左大臣嘉吉元年六月廿四日御生害四十八歲同年廿九日贈太政大臣

又云慶雲院殿嘉吉元年八月十九日叙從五位下同二年十一月十七日叙正五位下任左近衛中將任征夷大將軍禁色宣下聽昇殿同三年正月五日叙從四位下同七月廿一日薨五十八歲同二十三日贈左大臣從一位

又云慈照院殿義成後文安三年十二月十五日叙從五位上同四年二月七日叙正五位下同日侍從同五年十二月廿六日任左馬頭同六年四月廿九日爲征夷大將軍同日禁色宣下寶德元年八月廿七日任參議兼左中將同日叙從四位下同二年正月五日叙從三位同三月廿九日任權大納言同六月廿七日叙從二位享德二年三月廿六日叙從一位同六月十三日御改名政同十二月廿九日爲源氏長者同日補辨學院淳和院等別當康正元年八月廿七日叙從三位同九年正月六日叙正三位同十一年正月五日叙從二位同十二年三月廿九日任權大納言同十五年三月廿三日叙從一位同十六年十二月廿三日爲源氏長者同日補辨學院淳和院等別當同十七年八月廿八日任右大將同十八年正月五日右馬寮御監長享二年月日御改名義同九月十七日任內大臣大將如元同三年延壽三月廿六日薨五十五歲法名道同廿七日贈太政大臣

又云惠林院殿義始長享元年八月廿九日從五位下任左馬頭延德二年七月五日爲征夷大將軍禁色昇殿同日叙從四位下任參議右中將給同三年八月廿七日爲江東對治御出陣義成明應元年十二月十四日御歸洛同二年二月十五日南征同四月廿五日河內御陣敗破同五月二日御入洛同六月廿九日北國御下向同六年七月日自越前國有御歸洛之企同十一月日着御比叙山東坂本兵敗潛御下向周防國同十年月日辭征夷大將軍改名義永正五年四月廿七日自防州和泉堺着同六月八日御歸洛同七月一日任權大納言同日叙從三位同日爲征夷大將軍同十二月廿七日叙從二位同十年月日改名義同十六年九月廿七日爲源氏長者補淳和辨學兩院別當給同十八年大永三月七日夜密令出京都給御

日兼右大將同二年正月六日御監長祿二年四月十六日補家司同七月廿五日任內大臣大將如元同四年八月廿七日轉左大臣給大將如元同十二月十五日聽牛車寬正二年八月九日辭大將同五年七月十九日爲院執事同八月九日兵仗宣下同十一月廿八日准三宮應仁元年九月二日辭左大臣給文明五年十二月十九日辭征夷大將軍讓任御息同十七年六月十五日御落飾道法名道慶延德二年正月七日薨五十八歲同三月十七日贈太政大臣

大内問答云攝家清花御座候時御酌いか様の人躰か仕候哉御酌の儀於御前は大形相定候攝家にては殿上人清花にては諸大夫御取候事の次に申候文明の頃後成恩寺殿一條殿御事伊勢物語の御講釋の時諸大名も御參候て度々一献候ひし時杉原伊賀守賢盛に御酌とらせられしに被仰候つるは將軍家准后にならひ給ひ候間近臣の面々は殿上人の位たるへき間御酌可仕のよし被仰を我等致伺公慥に承候

足利家官位記云常徳院殿義尚文明五年十二月十九日叙正五位下同日任左中將聽禁色昇殿補征夷大將軍同六年六月十九日叙從四位下同七年四月十九日叙正四位下同九月十七日任參議左中將如元同八年正月九日於阿州撫養五十八歲

又云法住院殿義源又義高后改義澄義源院置太明應二年四月廿八日叙從五位下御名字義選同六月六日御改名義高同三年十一月廿四日叙正五位下同廿七日任征夷大將軍同日任左馬頭文龜二年七月十二日叙從四位下任參議兼左中將同廿一日御改名義澄同三年正月十四日叙從三位永正五年四月十六日御出奔同八年八月十四日於江州義高岳山義高數年之後永正十八年八月日贈左大臣從一位舟岡記云三好高島カオコリノ餘リ諸人ニ無禮シケレハ内々澄元ヲ背申族アマタアリ中ニモ京ニハ奈良修理亮元吉攝州ニハ伊丹兵庫助元扶丹波ニハ内藤備前守貞正等一味同心シテ九條殿ニ其好アリシカハ細川民部少輔高國ヲト立中國ノ義材公へ申通逆心ヲ起シ諸國半服シケレハ永正五年卯月九日已ニ打立トキコエシカハ右京大夫澄元三好高島散々ニ成テ落行ケル義澄御所モ不叶シテ同月十六日近江國朽木へ落サセ玉フ京ニハ高國ヲ右京大夫ニツツシ管領ノ職ニスエ同月廿七日義材公方御上洛アリ先和泉ノ堺へ御着アルコ、ニテ義尹ト御改名アリ後ニハ義植トモ申ケリ同年七月朔日征夷將軍ニ還任アル先公方ハ解

官アリテ當御所本位ニ復シ玉フ帝玉ニハ重祚ノ御例アリ
 トイヘトモ本朝ニハ公方ノ還任ハ是初ト聞エシ
 足利家官位記云萬松院殿義隆大永元年七月廿
 八日叙爵同十一月廿五日叙正五位下給今日被定御名
 字同日任左馬頭同日任征夷大將軍同日
 禁色昇殿同二年二月廿七日叙從四位下同日任參議左
 中將享祿三年正月廿日任權大納言同日叙從三位天
 文十五年十二月廿日任右大將同日讓大將軍於御息義
 藤朝臣同十九年五月四日於江州坂本穴太四十四同七日
 贈左大臣從一位

又云光源院殿義隆天文十五年七月廿七日叙爵同十一月
 十九日叙正五位下同日任左馬頭同十二月廿日任征
 夷大將軍同日叙從四位下同日任禁色昇殿同十六年二
 月十七日參議同日兼左中將同日任二年二月十二日改名
義隆永祿八年五月十九日依三好左京大夫義繼松永彈正少
義隆弼久秀反逆御傷害三十同六月七日贈左大臣從一位
 同追加云義隆義隆永祿九年十二月廿八日叙爵同十一年
 二月八日左馬頭任征夷大將軍同日任禁色昇殿同九月忠
 腫物○按義隆は足利家代々の數に列せし其其つひらたつひ
 久米田軍記云永祿八年阿波御所様義隆三好三人衆松永篠原

山城守ヲ類ニ御頼アリテ御上洛ノ御望アリ先年ヨリ類ニ
 此事アリケレトモ長慶存生ノ中ハ當公方様義隆御馳走申テ
 更ニ御請ナカリケル今長慶一期ノ後子息幼稚ナレハ一族
 衆ヲ一偏ニ御頼アリケレハ皆阿波御所へ御一味申ケリ
 又云去年永祿ヨリ阿波御所御上洛ノ御催シアリシ故三好
 衆ヲ御頼アリテ光源院様御生害アリ其後京都未タ靜マラ
 サレハ御延引アリケルカ今度永祿御上洛可有トテ六月中
 旬淡路ノシチト云所へ御出張アリ同十二月七日義隆富田
 ノ庄普門寺へ御勸座アリ

御湯殿上日記云永祿十年正月五日あはの武家より左馬頭
 の事申さる、勅許せうそく宣下たいの例よきとなり
 同十一年二月八日とんたの武家將軍せん下あり
 久米田軍記云一乘院殿義隆モ兄ノ公方義隆ノ御生害ノ事且ハ
 歎キ被思召且ハ口惜ト思召ケレトモ少モ御氣色ニ不
 被出シテ時刻ヲ送リ玉ヒケルニ内々松永打手ヲ參ラセ
 御生害アルヘキト沙汰アリケレハ伺候ノ輩ニ甲賀ノ侍ア
 リテ細川藤孝ニ申合御當家再興ノ事密ニ進メ奉リ頓テ忍
 ヒ出サヒ給ヒ即和田和泉カ亭マテ出シ奉リテ夫ヨリ江州
 中郡矢島ニ御逗留アリ爰ニ御長髮アリ御啟退治有テ將
 軍家御相續可有ト諸國へ相催サル

義秋公方記云一乘院御門跡義隆様去ル永祿八年八月江州八
 島へ御勸座アリテ同十年マテ諸國ヲ相催シ三好ヲ御退治
 有度ト謀ヲ廻ラサル、間方々ヨリ馳參ル同十年九月朔日
 朝倉太郎左衛門尉義景ヲ御頼アリケレハ義景畏テ無武
 尊敬シ奉リ安養寺へ入奉ル爰ニテ義景モテナシ奉リテ一
 乘ノ谷ニ於テ御元服アリケル御諱義秋ト號シ奉リ後ニ又
 義昭トモ御改名アリケリ十一年七月廿五日信長御迎ヲ進
 上アリケレハ美濃國西庄立政寺被移御座九月義隆モ
 腫物ヲ憂玉ヒテ逝去アレハ叶マシトヤ思ケン十月朔日細
 川讚州息男三好彦二郎ハ富田普門寺ニアリシヲ阿波國へ
 落シタテマツリテ長房義隆モ越水城布引瀧山城ヲ明テ
 落行ケレハ新將軍義昭公越水城へ移ラセタマヒ信長ハ芥
 川城へ入城アリ攝川上下郡共ニ平均ナリ同十月廿二日御
 參内アリ征夷將軍ニ御補任アリケリ
 御湯殿上日記云永祿十一年十月六日一乘院の武家あくと
 川に御陣すゑられ候とてこの御所よりめてたきとの御使
 參られ候十八日將軍宣下あり傳奏までこのうちとの
 足利家官位記追加云義昭元義秋左馬頭永祿十一年十月十
 八日從四位下同日參議左中將征夷大將軍禁色昇殿同十二
 年六月廿二日從三位同日權大納言

豊臣家譜云天文十三年三月秀吉任内大臣叙正二位秀
 吉欲爲征夷大將軍謂權大納言源義昭曰公其可養
 我我爲將軍矣公若養我則公安富尊榮不疑焉義昭
 遂不從於是秀吉與菊亭右大臣晴季相議晴季曰關白者
 人臣之高爵士民之景仰貴於將軍遠矣公其可任關白
 秀吉悅七月十一日秀吉任關白
 公卿補任云天文十六年權大納言從三位源義昭征夷大將
 月十三日落髮同日准三宮宣下法名道慶號昌山慶長二八
 月薨六十一歲號靈陽院
 慶長年錄云慶長八年二月内府家康公頼朝尊氏之例にて將
 軍補任可被成由にて兩御奏衆勸修寺殿廣橋殿伏見へ下
 向被成御内意御相談之間吳服四重黃金六まい兩人へ被
 遣三月十二日御補任あり征夷大將軍は頼朝以來武軍の
 任に候へは室町殿代々御補任にて他家より望申事不叶
 信長秀吉天下を打取此任を御所望候へとも昌山存生之間
 此職を渡進候事不叶叶押して生害有て補任可被成由御
 申之間無是非直に公家にならんとて皆大臣に至り關白
 まで極られけり日本にてはいかに威勢ありとも自由に補
 任不叶攝政には執柄家よりなり天子には王孫より位に
 つき將軍には公方家町室とて定まり恣に脇より不任例な

りこれに依り信長秀吉天下を取給へとも本朝の掟にまかせ終に不任然て室町昌山公宰人之後御子もなし家康公大和にて御扶助御介抱被成八ヶ年以前御果の時分室町代々の重寶とも家康公へ御讓彼成何卒此號御相續被成候様に願申由遺言被成御果し後室町代々の例にまかせ贈官并盤號靈陽院殿と申候て衣笠の等持寺にて御追善あり加様に何も御望の號不叶して自然に内府公へ渡り無左右御補任目出度と申はかりなし

按將軍の稱號古今一にあらす征東征西征蝦夷征隼人の類猶數多あり是皆常に設置る、ものにあらず事あれば任せられ事平けはと、めらる唯陸奥出羽は京師をさる事遠遠にして夷狄雜居の地なれば奈良朝廷始て鎮守將軍を拜し守衛に備へてより世々才撰を以て將軍とす然れども蝦夷大に亂れて鎮めやすからざる時は別に追討の將軍を命す征東使征夷使等是なり抑征夷將軍の號は多治比縣守に始り大伴弟麻呂坂上田村麻呂文屋綿麻呂等相續て或は將軍とよはれ或は大將軍と稱し皆出て蝦夷を征す綿麻呂遺類を平定してよりひとり鎮守府將軍をもて非常の警衛とし又征夷使を補することなし遙に程ありて壽永年中源義仲奏請して征夷大將軍に補せられす授くるに征東將軍を以てす光明帝の即位に及て更に足利殿を此職に任し給ひしより子孫相傳て補任せらる、事を得たり世に所謂室町將軍是なり爰に至て公家の獎褒いにしへに陪せりされは清和源氏の流にあらすして征夷將軍に補せられし者なし猶天位の皇統に於る攝關の藤氏に於るか如し織田豊臣の兩家專兵權を取といへとも皆此職に居られさりしは此いはれなるへし凡古今將軍の號二十餘員あり其建置征夷使より先なるものも又少からず然れども皆第三第四の冊に載すこれ先後の次第によるにあらず征夷の號他の將軍に混しかた

く且武家の稱呼全く爰にかゝれる故なり

れしは征夷の名義にかゝるに非ず將軍の名を假て天下の兵權を專にせんか爲なりされ共其業とくる事あたはずして敗死せり文治中鎌倉右大將家此職に拜し諸國に總追捕使を置事をゆるされ幕府を東國にトしてより天下兵馬の權併其掌握に歸す義仲の本意轉して右大將家に達することを得たりといふへし古の征夷使は蝦夷を征するを任とせしかと爰に至りてはおのつから四夷を叙するの職となれり是より後朝廷また鎮守府將軍を置る、事なし且は將軍の名を重し且は海内の鎮護の一職にたれるか故なり征夷の稱古今同じといへとも尊卑輕重の大に異なること爰に於て見つへし右大將家父子三代業を傳へて後藤原氏及親王家この職に居るものはみな北條氏の立る所にて政務己よりいです徒に揚名の任を擔ふといへとも兵馬の權は悉く關東に歸せり右大將家以後親王將軍にいたるまでをすへて世に鎌倉將軍といふ元弘一統の後護良成良興良等の親王相つきてこれに拜す此時に當て或は鎮守將軍を置或は征西征東等の將軍を補す然れともなほ征夷の號を重しとす是右大將家以來の例を追はる、か故成へしされは北條時行の亂に足利殿征夷の職を奏請すといへともなほゆるさ

武家名目抄第三冊

職名部二上

○將軍

日本書紀云神武天皇戊午年二月丁未皇師遂東六月丁巳軍至名草邑進至熊野荒坂津既而皇師欲越中洲而山中險絕無復可行之路乃接遠不知其所跋涉時夜夢天照大神訓于天皇曰朕今遣頭八咫鳥宜以爲鄉導者果有頭八咫鳥自空翔降天皇曰此鳥之來自叶祥夢大哉赫矣我皇祖天照大神欲以助成基業乎是時大伴氏之遠祖日臣命帥大來目督將元戎踏山啓行乃尋鳥所向仰視而追之遂達于菟田下縣于時勅日臣命曰汝忠而且勇加能有導之功是以改汝名爲道臣○按將軍の稱なしといへども昔將元戎といへるか其職にかなへる故に爰にひけり又云崇神天皇十年九月甲午以大彥命遣北陸武渟川別遣東海吉備津彥遣西道丹波道主命遣丹波因以詔之曰若有不受教者乃舉兵伐之既而共授印授爲將軍十月丙子將軍等共發路十一年四月己卯四道將軍以平戎夷之狀上奏焉

又云垂仁天皇五年十月己卯朔命上毛野君遠祖八綱田令擊狹穗彥時狹穗彥與師距之忽積稻作城其堅不可破此謂稻城也隨月不降天皇更益軍衆悉圍其城(中略)則將軍八綱田放火焚其城

古事記云仲夏天皇長帶日賣命於倭還上之時因疑人心一具喪船御子應載其喪船先令言漏之御子既崩如

此上幸之時香坂王忍熊王聞而思將待取進出斗賀野爲字氣比猶也爾香坂王騰坐歷木而是大怒猶出堀其歷木即昨食其香坂王其弟忍熊王不長其能與軍待

向之時赴喪船將攻空船爾自其喪船下軍相戰此時忍熊王以難波吉師部之祖伊佐比宿禰爲將軍太子御

方者以丸瀨臣之祖難波根子建振熊命爲將軍故追退到山代之時還立各不退相戰爾建振熊命權而令云思

長帶日賣命者既崩故無可更戰即絕弓絃欺陽歸服於是其將軍既信詐弭弓絃兵爾自頂髮中探出設弦更

張追擊故逃退逢坂對立亦戰爾追迫敗於沙々那美悉斬其軍於是其忍熊王與伊佐比宿禰共被追迫乘船浮海

即入海共死

日本書紀云推古天皇十年二月己酉朔來自皇子爲擊新羅將軍授諸神部及國伴造等并軍衆二萬五千人

獻せり是より皇朝の制やうやく異朝に效ふものありされは雄略紀欽明紀等に見えたる大將軍は既に其稱あり

しなるへし兩紀の文は大寶より以後は各職掌を冠らしめて或は征東將軍と稱し或は征狄征倭人などいふ類必其

稱號を加へられければひとへに將軍大將軍とのみいふことは絶えたり大條に引る續日本紀に天平十二年九月丁亥廣瀨

起兵反叛以從四位上大野朝臣東人爲大將軍云々と見えたる廣瀨は太宰少貳にて公家然るに征東征倭人の官人なれば夷狄の例には准しかりし

類は皆是臨時の任にしてひとり鎮守將軍のみ永續の職となれるか故に弘仁中其職員を定められしより夷狄追

捕のこと等大概鎮守府の任となれりされは其頃より後常に將軍とのみ稱すれば鎮守將軍をいふ事にて有しを

建久以來征夷使連綿して鎮守の任を廢せられしかは其後打任せて將軍と稱するは征夷使をいふことなれり

○大將軍

○副將軍

日本書紀云雄略天皇九年三月天皇欲親伐新羅神戒天皇

皇曰無往也天皇由是不果行勅紀小弓宿禰蘇我韓子宿禰大伴談連小鹿火宿禰等曰以汝四卿拜爲大將宜

以王師薄伐天爵興行於是紀小弓宿禰使大伴室屋大連愛陳於天皇曰臣雖拙弱敬奉勅矣即入新羅行屠

又云天武天皇元年七月辛卯近江將軍羽田公矢國其子大人等率已族來降因授斧鉞拜將軍即北入越戊戌東道將軍紀臣阿閉麻呂等聞倭京將軍大伴連吹負爲近江所敗則分軍以遣置始連苑率千餘騎而急馳倭京

續日本紀云養老五年十二月辛丑太政官奏授刀寮及五衛府別設鉦鼓各一面便作將軍之號令以爲兵士之耳目節進退動靜奏可之

又云天平實字八年九月甲寅討賊將軍從五位下藤原朝臣藏下麻呂等凱旋獻捷

按將軍の職掌は已に神代に權與すといへとも幽玄の世の事なれば今妄に論しかたし神代將軍の任にあたる人は武靈命これ其人なり人王

に至りて道臣命始て其任にあたり然れどももとより將軍の號あることなし其名目の國史に見えしは崇神紀

なる四道の將軍を始めとす古事記にも此事は見えなから將軍といひしことなきをおもへは當時いまた此名稱

なかりしを全く異朝の書に習ひ潤色してか、れし物と見えたり日本紀の体裁なへ垂仁紀なる將軍も此例なること推して知るへし古事記には仲哀の記に始めて將軍の

稱みえたれと是又うけかたし神功皇后三韓を威服し給ひ彼國朝貢を致すに及びて或は經典を奉り或は博士を

傍郡五月天皇勅大連曰大將軍紀小弓宿禰龍騰虎視旁眺八維掩討逆節折衝四海云々

又云欽明天皇二十三年七月遣大將軍紀男麻呂宿禰將兵出修磨副將河邊臣瓊岳出居會山而欲問新羅攻

任那之狀遂到任那云々八月天皇遣大將軍大伴連狄手彥領兵數萬伐于高麗狄手彥乃用百濟計打破高麗

又云崇峻天皇四年十二月壬午差紀男麻呂宿禰巨勢臣比良夫狹臣大伴嚙連葛城烏奈良臣爲大將軍率氏々臣連

爲裨將部隊領二萬餘軍出居筑紫遣吉士盤金於新羅遣吉士木蓮子於任那問任那事

又云推古天皇八年二月新羅與任那相攻天皇欲救任那是歲命境部臣爲大將軍以穗積臣爲副將軍則

將萬餘衆爲任那擊新羅

續日本紀云天平十二年九月丁亥廣嗣遂起兵反勅以從四位上大野朝臣東人爲大將軍從五位上紀朝臣飯麻呂爲

副將軍軍監軍曹各四人徵發東海東山山陰山陽南海五道軍一萬七千人委東人等持節討之

軍防令云凡將帥出征兵滿一萬人以上將軍一人副將軍二人軍監二人軍曹四人錄事四人五千人以上減副將軍軍監

人軍監二人軍曹四人錄事四人五千人以上減副將軍軍監

人軍監二人軍曹四人錄事四人五千人以上減副將軍軍監

人軍監二人軍曹四人錄事四人五千人以上減副將軍軍監

各一人録事二人三千人以上減軍費二人各爲一軍每
 總三軍大將軍一人凡大將出征臨軍對寇大毅以下不
 從軍令及有稽違闕乏軍事死罪以下並聽大將斟酌
 專決還日具狀申太政官若未臨寇賊不用此令
 平家物語云源河福原には今日もせいのかぬ先にいそ
 き討手を下さるへしと公卿せんきあつて大將軍には小松
 の權のすけ少將これもりの卿の副將軍には薩摩の守た、
 三萬よき云々（按是より下五條は將軍の官ありて補任せられしに
 はあらざれども皆公家の令する所にて全く私の稱呼に
 もあらざるが故
 にここに附せり）

吾妻鏡云承久三年六月十四日丁卯武川越河不_二相戰_一者
 難_レ敗官軍由相計(中略)武州著岸之後武藏相模之輩誠
 攻戰大將軍二位兵衛督有雅卿宰相中將範成卿安達源三左
 衛門尉親長等失防戰之術遁去筑後六郎左衛門尉知尙佐
 々木太郎右衛門尉野次郎左衛門尉等以_二右衛門佐朝俊_一
 爲大將軍殘留于宇治河邊相戰皆悉亡命云々八月一
 日壬子坊門大納言信自遠江國舞澤歸京是依_レ爲今度合
 戰大將軍千葉介胤綱預_レ之下向而妹西八條禪尼者右府將
 軍後室也彼好申_二品禪尼之間所_レ有也
 太平記云新田足利急_レ討手ヲ可_レ被_レ下トテ一宮中務卿親

へし稱呼にて全く其職に任しられしにあらすといへど
 も是亦朝廷の命に出たる將帥にして其名稱も同きか故
 にこゝに贅せり鎌倉右大將よりあなたにも武家の輩私に大將副
 將なごさかへしとありければ公家にて將軍拜任
 のこと願絶せし故なり殊更右大將家以來は朝廷の命令を
 待して大將副將なさいへること然のなりひさなり又公卿補任
 に大伴旅人和銅二年正月六日爲大將軍と見え續日本
 書に和銅七年五月丁亥朔大納言兼大將軍正三位大伴宿
 禰安麻呂薨とあれど此二卿出征討討の事所見なしおも
 ふに大伴氏は道臣命より世々武功名譽の家なれば事な
 さともかねて此職に補せられしにも有へし

○權副將軍

續日本紀云寶龜七年五月戊子出羽國志波村賊叛逆與國
 相戰官軍不利云々戊戌以_二近江介從五位上佐伯宿禰久良
 麻呂_一爲兼陸奥鎮守權副將軍八年十二月辛卯初陸奥鎮
 守將軍紀朝臣廣純言志波村賊結肆毒出羽國軍與_レ之相
 戰敗退於是_二近江介從五位上佐伯宿禰久良麻呂_一爲鎮
 守權副將軍令_レ鎮出羽國

又云延曆元年六月戊辰春宮大夫從三位大伴宿禰家持爲_二
 兼陸奥按察使鎮守將軍外從五位下安倍媛島臣墨繩爲_二權
 副將軍四年五月甲寅從五位下百濟王英孫爲_二陸奥鎮守副
 將軍

王_眞ヲ東國ノ御管領ニ成シ奉リ新田左兵衛督義貞ヲ大將
 軍ニ定テ國々ノ大名共ヲソ被_レ添ケル

又云矢野總大將義貞副將軍義助七千餘騎ニテ香象ノ浪ヲ
 踏テ大海ヲ渡ラン勢ノ如ク閑ニ馬ヲ步マセ餘ヲ雙テ進ミ
 ケル

又云山門先一番ニ中書王_眞ノ副將軍ニ被_レ憑タリケル千種
 宰相中將忠顯卿坊門少將正忠三百餘騎ニテ被_レ防ケル

又云青野原一千餘騎沙々タル青野原ニ打出テ敵ヲ西北ニ
 請テヒカヘタリ是ニハ奥州ノ國司鎮守府將軍顯家卿副將
 軍春日少將顯信出羽奥州ノ勢六萬餘騎ヲ率シテ相向フ

按大將の稱は始めて雄略紀に見へ副將は欽明紀に出た
 り往古は官軍出て征することあれば必大將軍副將軍を
 任せられて節刀軍令等を給はする式ありしに中古以來
 は其式も大かた略儀に従ひもし事ある時は武士の其器
 に堪たる者に命して征伐を致さしむ是を呼て征討使追
 討吏など稱すること常のならひとなりぬ然りしより後
 大將軍副將軍の職を授くることはおのつから絶てひと
 へに一軍の首將をよひて大將軍と稱し次將を副將軍と
 いふこと、なれり爰に引る平家物語以下にみえたるも
 の是なりされは大將軍副將軍といへるも皆俗言にとな

按軍防令に凡將帥出征兵備一萬人以上將軍一人副
 將軍二人と注せるによれば副將軍の内一人は權副將軍
 ともいふへけれど其名目他に所見なければ只鎮守府に
 のみ權副將軍といふ稱ありしことしるへしされど是は
 た邂逅の事にして多くは聞えず後弘仁に至りて鎮守府
 の官員を定められし時將軍一員になされたればその後
 は更らに權官を置る、ことは廢絶せしなり

○持節大將軍

續日本紀云養老四年三月丙辰以_二中納言正四位下大伴宿
 禰旅人_一爲_二征隼人持節大將軍六月戊戌詔曰(中略)今西
 隅等賊怙亂逆化屢害良民因遣_二持節將軍正四位下中
 納言兼中務卿大伴宿禰旅人_一誅_二討其罪_一盡_二彼巢窟_一治_二兵
 率_二衆勇_一掃_二兇徒_一云々九月丁丑陸奥國奏言蝦夷反亂戊寅
 以_二播磨按察使正四位下多治比真人縣守_一爲_二持節征夷將
 軍左京亮從五位下下毛野朝臣石代爲_二副將軍即日授_二節
 刀

又云神龜元年四月丙申以_二式部卿正四位上藤原朝臣宇合_一
 爲_二持節大將軍宮内大輔從五位上高橋朝臣安麻呂爲_二副
 將軍判官八人主典八人爲_二征海道蝦夷_一也十月辛未遣_二
 內舍人於近江國_一慰_二勞持節大使藤原朝臣宇合_一十一月乙

西征夷持節大使正四位上藤原朝臣宇合鎮秋將軍從五位上
小野朝臣牛養等來歸

又云天平九年三月戊午遣陸奥持節大使從三位藤原朝臣
麻呂等言以去二月十九日到陸奥多賀郡與鎮守府將
軍從四位上大野朝臣東人共平章遣常陸上總下總武藏上
野下野等六國騎兵總一千人開山海兩道云々

又云寶龜十一年三月丁亥陸奥國上治郡大領外從五位下伊
治公些麻呂反癸巳以中納言從三位藤原朝臣繼繩爲征
東大使正五位上大伴宿禰益立從五位上紀朝臣古佐美爲
副將判官主典各四人六月辛酉勅陸奥持節副將軍大伴宿
禰益立等一將軍等去五月八日奏書云且備兵糧且伺賊

機云々九月甲申授從四位上藤原朝臣小黒麻呂正四位
下爲持節征東大使○按これより後も持節征東將軍といへるもの
こゝには
いしに

按節は符節なり凡將軍たる人は節力を給はりて軍中に
令するが故に持節將軍の稱あり軍防令に凡大將出征皆
授節刀之義解に凡節者以髦牛尾爲之使者所擁也今
以三刀劍代之故曰節刀雖名實相異其所用者一也
と注さる是なりされと上古にはそれと定まれる器もな
ければ節といふ名のなかりしは元よりさるいはれなれ
返し奉る舊式なり朱雀帝の御代まではその式を行はれ

し故に天慶亂に征東使藤原忠文節刀を給はり歸京の時
返上せしこと日本紀略外記日記北山抄等に見えたり村
上帝の御宇天徳の内裏焼亡に節刀も焼たりしを更に勅
ありて備前の鍛冶白根安生をして改作せられしか其
後度々の炎上にこの劍もまた焼失せり中右記裏書
に見えたり故に康
和中平正盛か源義親追討の命を蒙りし時も治承中平維
盛か東國發向の時も只驛鈴のみを賜はりしなり源平盛衰
記朝敵追
討條にさて鎌倉右大將家を征夷將軍に任せられしより
征伐軍旅の事は一向關東に委ね給ひければ朝廷には出
軍の式も絶たりしを承久の變に後鳥羽上皇より十人の
大將に錦御旗を賜はりて官軍の標とせられたりこれ
いにしへの節刀にも准すへきにや承久記の裏
本にみゆ後醍醐帝も
亦其例を追はれしことほみえて官軍の大將には必錦御
旗を授けらるこれより以來天子の御旗を呼て節度とい
ふこといきてきたり太平記節度使下向條に朝田左兵衛督義貞朝臣朝
敵追討の宣旨を下し給て兵を召具し參内せらる
中儀の節會行はれて節度を下さる治承四年に權亮三位中將維盛を頼朝
追討の爲に下さる時給計給はりたりしは不吉の例なればさて今度は
天慶承平の例をそ追れける義貞節度賜はりて二條河原へ打出其後一
宮中務親王は百餘騎にて三條河原へ打出させ給ひたるに内裏より下
されたる錦の御旗を委擧たるに俄に風烈く吹て金銀にて打て附たる右
月の御紋されて地に墜たりけるこそ不思議なれ云々あり又湯川彦右
衛門督に禁中より湯川に下されし物の内に節頭と云ありてその注
に三社託宣の旗あり幅八寸に長さ一尺三寸あり是旗なりと記せり太

と景行帝の御宇皇子日本武尊に命して東夷を征せしめ
給ひし時比々羅木の八尋矛を授け給ひしを節を授けら
れし濫賜ともいふへし崇神帝四道の將軍を遣はさるし時授け印
ははは例の筆者の作意にし實に印を授けられしことありと見えたり
又當時將軍といふ名物もなかりし由は卷首なる將軍の條下にのへたり
合せみさて令にいふ所の節刀を造り出されしは何れの
時にや詳ならされとも思ふに文武帝の朝には制度をも
改定ありて何事も異朝にならひし御代なれば節刀も此
時に作らせ給ひしなるへし中右記裏書に引たる職人信經記に
よし見えたる 續日本紀和銅二年紀に三月千戌陸奥越後二
國蝦夷野心難馴屢害良民於是是以左大辨正四位下
巨勢朝臣麻呂爲陸奥鎮東將軍民部大輔正五位下佐
伯宿禰石湯爲征越後蝦夷將軍出自兩道征伐因授
節刀及軍令と見えたりこれ節刀のものに見えし始な
りさて養老神龜の際めつらかに持節の名を將軍に負せ
しも其近も世に節刀といふもの、出來し故なるへしも
し古代より傳はりて必將軍の持しことならんにはこゝ
に至りて殊さらに持節と稱することはいあらんやはさ
てこそ文武帝の御代に作り出されしものとも思合せら
る、なれ其劍には北斗并四神を彫て名を破敵といふ
中右記裏書に引たり本將軍發遣の日これを給はり凱旋の時
文は節刀に引たり

はりし御旗は節度と云ふことなるへし然れども後には
たすら承久建武の制にならひ永享嘉吉の亂及長祿中足
利成氏を攻られし時又延徳中佐々木氏を伐れし時も昔
將軍家より奏請して錦御旗を給はれり其物は同しか
らされども賜はず旨の一なればこれをも節とよはれ
し事いはれなしとすへからすされは錦御旗給はりた
らん人はいにしへの持節將軍の遺意ありといふへし
但天子より賜はれる御旗にしなくありて其制一様ならず本承久記
には院の御旗赤地の錦にひれにこんかうれうをゆいつけて中には不動
明王四天王をあらはし奉りたる旗十なれを十人に給はりけり私の家
々の御旗に差そへけりあり前の注に引たる太平記には金銀にて日
月の御紋をつけたる由みえ湯川覺吉には三社託宣を寄きたる事あり又
永享記に足利持氏追討の爲に將軍家より奏請して御旗を給はりし所に
御旗には赤と帝御詠歌を遊ばさる釋振海中雲之幡之手に東の塵を拂ふ
秋風云々見えたり小田原記に上杉憲政越後へ赴き長尾景虎を養子に
し家傳の重寶を譲る所に上杉景元重代の御所作の太刀天子の御旗等
景虎に譲らる御旗は錦にて一本は御門の御自筆に釋振海中雲之幡之手
に東塵を拂ふ秋風又二本には一本は龍あり天子旌旗如飛作活龍高
擡三頭角處雲目八坂從一本には虎あり六龍並爪傳三昇昇牙金剛羅
四山白骨風未嘯先この二本并に飛雲の標を下さる事あり筑後の五條家
には南朝より給はりたる御旗二流今にあり二流には金鳥の紋あり一流
には玉兔の紋ありこれを日月の御旗といふこれらをも以て制作の一なら
ざるをしるへし思ふにいつれも時に臨みて新意を以てつくり出されし
ものなるへし小田原記なる釋振云々の書きたるは永享記に見えたる持
氏追討の時給はりし旗なり又龍虎の御旗は成氏征我の時に下されしも
のさみゆいづれも上杉家の重寶
として傳々せしを譲與へしなり

○前將軍

○中將軍

○後將軍

日本書紀天智天皇紀云皇祖母尊明即天皇位七年七月丁巳崩八月遣前將軍大華下阿曇比邊夫連小華下河邊百枝臣等後將軍大華下阿部引田比邊夫臣大山上物部連熊大山上守君大石等救於百濟

又云二年三月遣前將軍上毛野君稚子間人連大蓋中將軍巨勢神前臣譯語三輪君根麻呂後將軍阿部引田臣比邊夫大宅臣鎌柄率二萬七千人一打新羅

續日本紀云延曆八年六月甲戌征東將軍奏副將軍外從五位下入間宿禰廣成左中軍別將從五位下池田朝臣眞枚與前軍別軍外從五位下安倍履島臣墨繩等議三軍同謀并力渡河討賊約期已畢由是抽出中後軍各二千人同共渡云々

按前將軍後將軍とはは先陣大將後陣大將といふかことし中將軍とは中軍の將と云意なり續紀に前軍別將中軍別將とのせられしは征東大使にむかへて別の字を加へられしものと見えたり但南無寺舊記に貞治三年二月足利義隆名權大納言御判とありて中將軍と稱せり風ふにこの三字は當時寺僧の注加する所にして後世の加筆にはあるへからずさていかなれば中將軍とせしむやといふに持統院將軍在職の間は義隆世子として久しく左近中將たり依て旗下の將士私に稱して中將軍と申せしなるべし此時義隆既に征東將軍に任せらるるといへども俗間尙もこのさなにならひ中將軍といひける故に寺僧も俗語になつて此三字を注加せしとみえたりこの一事本文なる中將軍とは同義にあらざれども其稱同きを以て爰に注して差置に備ふ

○上將軍

尊良親王に此號を授け給ひしをその起源といふへし善鏡に建長五年十一月廿五日建長寺供養なり此作善旨通上祈皇帝萬歲將軍家及皇臣千秋天下太平下助三代上將二位家并御一門過去數聖後御云々とみえたりこれ三代將軍といふべきを筆者の思ふに此頃作意にて三代上將と記せしものは取つたしのならひ一軍の首將をは官位高下のしなをいはず世に大將軍と呼ならはしければそれによかへして上將軍と稱せられしとみえたり是元より朝廷の命する所といへとも征夷使征東使等のごく補任の宣旨下されしにはあられて一旦しか稱せられしのみなるへし又恒良親王を上將軍と稱せしは全く天子の命令より出たるにあらざれどもこれは官軍の稱せる所なれば必しも私の稱呼とはいふへからず故にこゝに贅せり但これは太平記に見えたるのみなれば尊良親王の例には准すへからず是より後上將軍の命ありしこと又聞えず太平記尊良親王の願にのせたる願文に上將軍越前下從軍篠村共在子瑞繼之影云々見ゆこの上將軍は千種頭中將忠顯をいふなり又同書鎌倉合戰條に堀口三郎貞満を上將軍とし大島領政守守之を將將軍とすといふこゝに見えたり此二條に云ふ所全く筆者の文章にて當時其稱ありしならは爰にもしり

○騎兵大將軍

續日本紀云慶雲二年十一月己丑徵發諸國騎兵爲迎新羅使也以正五位上紀朝臣古麻呂爲騎兵大將軍又云天平十二年十月丙子任次第司以從四位上鹽燒王

神皇正統記云高氏望む所達せずして謀叛をおこす由聞えける十一月十日餘りにや義貞を追討すへきよし奏狀を奉るすなはち打てのほりければ京中騷動す追討の爲に中務卿尊良親王を上將軍といひてさるへき人々もあまた遣はさる武家には義貞の朝臣を始めて多くの兵を下されし保曆間記云京都ヨリ敕使源具光ヲ以テ尊氏ヲ召ルレトモ尊氏上洛セス其時ニサレハヨソ謀叛ノ志有由重テ讒シ申ニ依テ討手ヲ下サレケリ上將ハ中務卿親王公卿殿上人其敵ヲ知ヌ武士ニハ義貞ヲ大將軍トシテサルヘキ侍在京ノ武士西國畿内勢數萬騎發向ス

太平記云主上自合條テハヤカテ大將ヲ差上セテ赤松入道ニカヲ合セ六波羅ヲ可攻トテ六條少將忠顯朝臣ヲ頭中將ニ成シ山陽山陰兩道ノ兵ノ大將トシテ京都へ被指指向中略又第六ノ若宮ハ元弘ノ亂ノ始武家ニ被囚サセ給テ但馬國へ被流サセ給ヒタリシヲ其國ノ守護太田三郎左衛門尉取立奉テ近江ノ勢ヲ相催シ即丹波ノ篠村へ參會ス大將頭中將不斜悅テ即錦ノ御旗ヲ立テ此宮ヲ上將軍ト仰キ奉テ軍勢催促ノ旨ヲ被成下ケリ○按第六若宮は後醍醐天皇の弟なり

按上將軍といふ稱は古代に見る所なければ建武帝皇子爲御前長官從四位下石川王爲御後長官正五位下藤原朝臣仲麻呂爲前騎兵大將軍正五位下紀朝臣麻路爲後騎兵大將軍徵發騎兵東西史都奏忌寸等總四百人壬午行幸伊勢國

又云天平神護元年十月辛未行幸紀伊國正四位下藤原朝臣細麻呂爲御前騎兵將軍正五位上阿倍朝臣毛人爲副將軍從三位百濟王敬福爲御後騎兵將軍從五位下大藏忌寸麻呂爲副將軍各軍監三人軍曹三人

按騎兵大將軍は天子の行幸もしくは外藩の使人入朝の時騎兵を率てこれか警衛をなすものなりもとより臨時の職にして常におかる、つかさにあらずこの將軍は節刀を給はる職にはあらざりしなり尙次なる左右將軍條を合せみるへし

○左將軍

○右將軍

續日本紀云和銅三年正月壬子朔天皇御大極殿受朝準人蝦夷等亦在列左將軍正五位上大伴宿禰旅人副將軍從五位下穗積朝臣老右將軍正五位下佐伯宿禰石湯副將軍從五位下小野朝臣馬養等於皇城門外朱雀路東西分頭陳列騎兵引軍人蝦夷等而進七年十一月乙未新羅國遣重

河倉金元靜等二十余人朝貢差發畿内七道騎兵合九百九十爲擬入朝儀衛也已亥遣使迎新羅使於筑紫庚戌從四位下大伴宿禰旅人爲左將軍從五位上多治比真人廣成從五位下久米朝臣麻呂爲副將軍從四位下石上朝臣豐庭爲右將軍從五位上上毛野朝臣廣人從五位下栗田朝臣人爲副將軍十二月己卯新羅使入京遣從六位下布勢朝臣人正七位上大野朝臣東人率騎兵一百七十迎三橋又云寶龜十年四月庚子唐客入京將軍等率騎兵二百蝦夷二十人迎接於京城門外三橋

按左右將軍は外藩使人の警衛をつかさどる職にて即騎兵將軍のことなり慶雲に新羅入朝の時は一人を補せられて騎兵大將軍と稱せしを和銅三年に二人となされしより左右將軍の號はいてきしなり但これは其初に御せし御ありし後は又此將軍を任せらるる事は斷絶せり太平記鎌倉合戰條に一方には大館三郎宗氏を左將軍として江田三郎行義を右將軍とすと見え又矢矧坂關條に義貞の左將軍堀口桃井山名里見右將軍大島額田龍澤岩松とあるは左備の將右備の將といふべきを筆者の文雅にせしものにて當時まさしくの稱ありしならねはこにもらせり

○檢校兵庫將軍

武家名目抄第四册

職名部二下

○鎮西將軍

善隣國寶記云海外國記曰天智天皇三年四月大唐客來朝大使朝散大夫上柱國郭務悰等三十余人百濟佐平稱軍等百餘人到對馬島遣大山中采女連信侶僧智辨等來喚客於別館於是智辨問曰有表書并獻物以不使人答曰有將軍牒書一函并獻物乃授牒書一函於智辨等而奉上但獻物檢看而不將也九月大山中津守連吉祥大乙中伊岐史博德僧智辨等稱筑紫太宰辭勅旨告客等今見客等來狀者非是天子使人百濟鎮將私使亦復所齋文牒送上執事私辭是以使人不得入國書亦不上朝廷故客等自事者略以言辭奏上耳十二月博德授客等牒書一函函上著鎮西將軍日本鎮西筑紫大將軍牒在百濟國大唐行軍總管使人朝散大夫郭務悰等至披覽來牒尋看意趣既非天子使又無天子書唯是總管使乃爲執事牒是私意唯須口奏人非公使不合入京云々此亦師安廣忠信俊師遠廣宗五人同所勘也

續日本紀云和銅四年九月丙子勅頒開諸國役民勞於造都一

齊亡猶多雖禁不止今宮垣未成防守不備宜權立軍營禁守兵庫因以從四位下石上朝臣豐庭從五位下紀朝臣男入粟田朝臣必登等爲將軍又云神護景雲二年十一月己亥以正三位月削御淨朝臣清人爲檢校兵庫將軍從四位下藤原朝臣雄田麻呂爲副將軍從五位下紀朝臣船守從五位下池田朝臣眞枚並爲軍監六位軍監二人軍曹四人

按兵庫將軍は兵庫を檢校し不虞を守るの職たること續紀に見えたるか如しものとこれ臨時に設けらるるものに於て常日聯綿の職にあらざるか故に國史に於て見る所多からず然るにひかり兵庫寮の所司神護景雲に將軍副將軍及軍監軍曹までを設置れて兵庫將軍の官員備はれり思ふに當時道鏡内寵を得て國柄を掌握し政務を恣せし時は京師變を生せんことを恐れ是等の官職を設けて己か爲に備へしものなるへし然るに幾程なく帝崩御あり道鏡貶謫せられて令外の官は大概停廢せられければ其時に此將軍も停められしこと、みゆそれより後は又これを置るることなく兵庫寮の所司のみ兵庫の事を統領せしなり

續日本紀云天平十四年正月辛亥廢太宰府十五年十二月辛卯始置筑紫鎮西府以從四位下石川朝臣加美爲將軍外從五位下大伴宿禰百世爲副將軍判官二人主典二人十六年正月戊午太政官奏鎮西府將軍准從五位官判官准從六位官主典准從七位官倍給二季祿及月料留應入京調庸物相折通融隨時便給又特賜公麻田將軍十町副將八町判官六町主典四町奏可之十七年六月辛卯復置太宰府

按筑紫の諸國は外藩にさしむかひて邊要の地なりければ上世より太宰府を置れて筑紫總領を補任し九國二島の鎮將たらしむ後太宰帥と云は、たまく異朝に答ふる書牘の上にてはこの總領を鎮西將軍とも署せることありされどこれ一時の唱へにしてひたぶるによはれし名稱にはあらずさて天平のときにいたりてまばらく太宰府の名をと、められてこれを鎮西府と稱し將軍を補せられしかど幾程なくて太宰府を復せしかはまた鎮西將軍をおかれざる事となれり

○征軍人大將軍

續日本紀云大寶二年八月丙申薩摩多嶺隔化逆命於是發兵征討遂校戸置史焉九月戊寅討薩摩軍人軍士授

動各有差

又云和銅六年七月丙寅詔曰授以勳級本據有功者不優異何以勳獎今討準賊將軍并士卒等戰陣有功者一千二百八十人並宜隨勞授勳焉

又云養老四年三月丙辰以中納言正四位下大伴宿禰旅人為征軍人持節大將軍授刀助從五位下笠朝臣御室民部少輔從五位下巨勢朝臣真人為副將軍六月戊戌詔曰蠻夷為害自古有之漢命五將矯胡臣服周勞再駕荒俗來王今西隅等賊怙亂逆化賦害良民因遣持節將軍正四位下中納言兼中務卿大伴宿禰旅人一誅罰其罪盡彼巢居治兵率乘剪掃兇徒會帥面縛請命下吏寇黨叩頭爭靡致風然將軍暴露原野久延旬月時屬盛熱豈無艱苦使使慰問宜念忠勤五年七月壬子征軍人副將軍從五位下笠朝臣御室從五位下巨勢朝臣真人等還歸斬首獲虜合千四百人六年四月丙戌征討陸奧蝦夷大隅薩摩

軍人等將軍已下及有功蝦夷并譯語人授勳位各有差政事要略云石清水放舊記云養老四年豐前守宇奴首男人將軍且大御神奉請且大隅日向國在拒軍人等伐殺大神託宜吾此軍人多殺部報每年放生會奉仕之今伴放生會與自宇佐宮尊其行事會日讀緣起文講最勝妙

々官軍急速應催促可被參洛恩賞賞罰等事併所被委將軍御成敗也存其旨殊可令致忠節者天氣如此悉之以狀九月十八日阿蘇大宮司殿右中辨判

太平記云因遣勳先ツ北國ニアル脇屋刑部卿義助朝臣ノ方へ繪旨ヲ成レ先帝御遺勅他ニ異ナル上ハ故義貞ノ例ニ易ラズ官軍恩賞以下ノ事相計ヒテ奏聞ヲ經ヘキノ由宣下セラル其外筑紫ノ征西將軍宮遠江井伊城ニ御座アル妙法院宮大州新國司顯信卿ノ方ヘモ舊主遺勅ニ任セテ殊ニ忠戰ヲ致サルベキノ由繪旨ヲ下サレケル

又云山名伊豆守筑紫ニハ去ヌル七月正平初ニ征西將軍宮新田ノ一族二千余騎菊池肥後守武光三千余騎博多ニ打テ出テ香椎ニ陣ヲ取

菊池武朝申狀云今度勅使如被申將軍宮成者當家之忠功者不可過元弘忠士一歎因茲難被閣群黨懇云々謹檢當家忠貞之案内中關白道隆四代後胤太祖大夫將監則隆後三條院御宇延久年中始而從下向菊池郡以降至武朝十七代不與凶徒奉仕朝家者也(中略)興國以後者武光奉成故大王入御最初於八代城自令對治一色入道道獻父子之後申沙汰大小籌策令服大友少

典云々○按男人將軍たること國史に見ゆ思ふに豐前守にて任職にありし内平人の亂あるによりて將軍をたすけて準人をうちしなる

按準人は大隅薩摩のわたりに住る夷の稱にて東北の邊地なるを蝦夷といふの類なり準人よみてはやと、す其夷走ることときが故に稱とせり漸く皇威に服して朝貢を致すといへども大寶以來や、もすれば叛亂のことあるに依て將軍をつかはして征伐せられしかど養老より後は再び歸順してそむくことなかりしかば又此職を任する事もなくなりしなり

征西大將軍

續日本紀云養老四年七月甲寅賜征西將軍己下至子抄士物各有差○按こにいへる征西將軍は征軍人日本紀略云天慶四年五月十九日戊寅征南海賊使小野好古飛驒言賊徒虜掠太宰府内仍以參議右衛門督藤原朝臣忠文任征西大將軍又任副將軍軍監以下

阿蘇宮文書云朝敵追討事四方官軍等不一揆或先驅而失其利或城守而似怠慢就中九州士卒等雖非無功績各爭雄而及參洛之運引云々依之凶徒猶不退帝都沙旬月之條國家之弊庶民之憂宸襟無聊故為進官軍勳軍陣無品親王為征西大將軍所有御下向也方

武等於御方廿余年之陣鎮西一統之大功者也武政者令相承彼忠功致度々合戰運種々計略時分令早世之間武朝自十二歲之時令參勤筑州大王御陣守父祖行跡從令荷擔鎮西御大事以來者文中之比了俊寄來肥後之時數月勵防戰之武略於水島陣成了俊追落之功鎮西致兩年靜謐訖其尅武朝奉屬將軍宮令在陣肥前國府運諸方計策之處今川仲秋相率松浦以下之凶徒打出博多之間指遣肥後國守護代武國致大綱合戰追散仲秋畢又大內義弘豐前豐後兩國之凶徒相共罷出之間於總打陣致合戰武光舍弟武義入道自關并武安令討死畢然而後了俊一類大友少貳大内兄弟數千騎寄肥後國之間於託摩原天授四年九月武朝十六歲之時雖為無勢馳入多勢陣抽戰伐之勇力一族以下銳卒數十人令討死自身被疵攻戰最中將軍宮有出陣而被馳向了俊及御合戰之間散在之官軍少々依馳參御旗下凶徒令退散畢弘和二年之比者武朝守御旨奉仕將軍宮之間一族以下扶持人等受彼朋黨語稱籠分領守山之要害擬馳武朝之條弗廻時日自馳向各令追落畢是則雖為私計策獨所存公平也且度々勅使被見知者也然則就忠之淺深可有御成敗者何被閣當家代々三

百餘歲忠義被賞近年奉公阿黨之所望乎亦任理非可有御沙汰者將軍宮御事被受正平之勅裁爲故大王御代官年來被積勞功御理運無相違上者勅裁豈可巨餘儀乎云々○按本書に故大王といへるは實親王にて將軍宮其成親王なり阿蘇宮文書に或は將軍宮なり其征四將軍或は宮なり稱せしは皆山御事なり阿蘇宮文書云忠節次第尤以神妙自今以後殊所被憑思食也仍豐前二雲二郎跡同國別府稱口跡事爲料所可被知行之由依將軍宮仰執達如件弘和三年七月十三日阿蘇大宮司殿左中將判判

又云豐前國今任莊事被寄進阿蘇社之由依征西將軍宮仰執達如件元中元年十一月廿一日阿蘇大宮司殿侍從判
又云九州再興事所被憑思食也此時分學義兵者豐後日向兩國守護職并肥後國八代莊河尻一跡三船一跡海東一跡并豐田莊等事可被知行由依征西大將軍宮仰執達如件元中十年二月九日阿蘇大宮司殿左中將判○按元中十年四年なり前年南北講和ありしか國々は雖平治せざりければ年號もまらにて定まらざりしなり
按和銅養老の頃華人反亂の事あるによりて征軍人將軍をつかはして征伐せられきその大將次將をなべては征西將軍とも呼ばれしかどそれは一時の稱呼にて正しき

美爲副使判官主典各四人六月辛酉勅陸奥持節副將軍大伴宿禰益立等去五月八日奏書云且備兵糧且伺賊機云々九月甲申授從四位上藤原朝臣小黒麻呂正四位下爲持節征東大使各十月己未勅征東使省今月二十日奏狀知使等延遲既失時宜將軍發起久經日月所集步騎數萬餘人加以入賊地一期上奏多廢計已發入平殄狂賊而今奏今年不可征討者夏稱草茂冬言禎乏縱橫巧言遂成稽留整兵設糧將軍所爲而集兵之前不加辨備還云未儲城中之糧者然則何月日誅賊復城方今將軍爲賊被欺所以緩急致此逗留又未及建子足以舉兵而乖勅旨尙不肯入人馬悉瘦何以對敵良將之策豈如此乎宜加教諭存意征討若以今月不入賊地宜多製玉造等城能加防禦兼練戰術又云天應元年六月戊子朔勅參議持節征東大使兵部卿正四位下兼陸奥按察使常陸守藤原朝臣小黒麻呂等曰得去五月廿四日奏狀具知消息但彼夷俘之爲性也蜂屯蟻聚首如亂階攻則奔逃山藪放則侵掠城寨而伊佐西古諸絞八十島乙代等賊中之首以當千竄迹山野窺機伺隙畏我軍威未敢縱毒今將軍等未斬一級先解軍士事已行訖無如之何但見先後奏狀賊衆四千餘人其所

職名にはあらず全く征西大將軍を補せられしは天慶を始とするこの時藤原純友西國にありて亂をなすによりて藤原忠文をこの職に居らしめしかと程なく平きしかは下向に及ばずしてやみぬ夫れより絶て置れし事なし延元に及で懷良親王にこの職を授けられ正平に良成親王を拜せられしはこれみな吉野の詔命にて西國の敵をうたしめんかためなり

○鎮東將軍
續日本紀云和銅二年三月壬戌陸奥越後二國蝦夷野心難馴屢害良民於是左大辨正四位下巨勢朝臣麻呂爲陸奥鎮東將軍民部大輔正五位下佐伯宿禰石湯爲征越後蝦夷將軍云々出自兩道征伐因授節刀并軍令
按鎮東將軍は東部の蝦夷を征伐する職なり養老以後は此職を征夷使征東使など稱せられたれば鎮東の號絶て聞ゆることなし

○征東大將軍
續日本紀云寶龜十一年三月丁亥陸奥國上治郡大領外從五位下伊治公些麻呂反率徒衆殺按察使參議從四位下紀臣廣純於伊治城癸巳以中納言從三位藤原朝臣繼繩朝爲征東大使正五位上大伴宿禰益立從五位上紀朝臣古佐爲斬首級僅七十餘人則遺衆猶多何須先獻凱旋早請向京縱有舊例朕不取焉宜副使內藏忌寸金成多朝臣大養等一人乘驛入京先申軍中委曲其餘者待後處分九月辛巳初征東副使大伴宿禰益立臨發授從四位下而益立至軍數愆征期逗留不進空費軍糧延引日月由是更遣大使藤原朝臣小黒麻呂到即進軍復所亡諸塞於是詔資益立之不進奪其從四位下
又云延曆二年十一月乙酉從五位上大伴宿禰弟麻呂爲征東副將軍三年二月己丑從三位大伴宿禰家持爲持節征東將軍從五位上文室真人與企爲副將軍七年三月己巳從五位上多治比真人濱成從五位下紀朝臣真人佐伯宿禰葛城外從五位下入間宿禰廣成並爲征東副使七月辛亥以參議左大辨正四位下兼春宮大夫中衛中將紀朝臣古佐美爲征東大使十二月庚辰征東大將軍紀朝臣古佐美辭見詔召昇殿上賜節刀因賜勅書曰夫擇日拜將良由繪言雅毅分圖專任將軍如聞承前別將等不愼軍令匿闕猶多尋其所由方在輕法宜副將軍有犯死罪禁身奏上軍監以下依法斷決坂東安危在此一舉將軍宜勉之八年五月丁卯詔贈征東副將軍民部少輔兼下野守從五位下勳八等佐伯宿禰葛城正五位下葛城率軍入征中途而

卒故有^二此贈^一也六月甲戌征東將軍奏副將軍外從五位下入
 間宿禰廣成左中軍別將從五位下池田朝臣眞枝與^二前軍別
 將外從五位下安倍蝦蟇嶋臣墨繩等^一議^三軍同謀并^レ力渡^レ河
 討^レ賊期已畢由^レ是抽^二出中後軍各二千人^一同共渡比^レ至^三
 賊師^二夷阿豆流爲^レ之君^一有^二賊徒三百許人^一迎逢相戰官軍
 勢強賊衆引遁官軍且戰且燒至^二巢伏村將^レ與^二前軍^一合^レ勢
 而前軍爲^レ賊被^レ拒不得^レ進渡^二於是賊衆八百許人更來拒
 戰其力太強官軍稍退賊徒直衝更有^二賊四百許人^一出^レ自^二東
 山^一絕^二官軍後^一前後受^レ敵賊衆奮擊官軍披排別將丈部善理
 進士高田道成會津壯麻呂安宿戶吉足大伴五百繼等並戰死
 燒^レ亡^二賊居十四村宅八百許烟^一器械雜物如^レ別官軍戰死
 廿五人中^レ矢二百四十五人投^レ河溺死一千卅六人裸身游來
 一千二百五十七人別將出雲諸上道島御楯等引^レ餘衆^二還來
 於^レ是勅^二征東將軍^一曰云々九月丁未持節征東大將軍紀朝
 臣古佐美自^二陸奥^一進^レ節刀^一
 日本紀略云延曆十年七月壬申從四位下大伴弟麻呂爲^二征
 夷大使^一二十一年閏十一月己酉征東大使大伴乙麻呂辭見十
 二年二月丙寅改^二征東使^一爲^二征夷使^一
○按乙麻呂征夷使に任じ
 たりは此時定て征夷使になされしは正平七年の事な
 しなり已に征夷將軍の條に註せり
 職原抄云平將門叛亂時參議右衛門督藤原忠文朝臣補^二征

東大將軍^二其弟忠舒源經基爲^レ副將軍^一發^レ向^二○按公補補任扶桑
國等忠文征夷大將軍に任ずとす今日本紀等神皇
 正統記北山抄等によるに征東に作るを是とす
 日本紀略云天慶二年正月十八日乙酉勅以^二參議修理大夫
 藤原朝臣忠文^一任^二右衛門督^一爲^二征東大將軍^一二月八日甲
 辰天皇御^二南殿^一發^二遣征東大將軍參議右衛門督藤原朝臣
 忠文^一賜^二節刀^一五月十五日庚辰征東大將軍參議右衛門督
 藤原朝臣忠文入洛返^二上節刀^一
 保曆間記云相摸次郎^時鎌倉へ打入關東ノ侍并在國ノ輩ハ
 皆鎌倉ニ付テ天下又打飯シテ見エケル程ニ京都ノ騷動
 不^レ斜其時尊氏可^レ罷向^一由仰ラル直義打負テ落ル上ハ申
 請テ可^レ罷向^一由存候但頼朝ガ例ニ任セ征夷將軍ノ宣旨ヲ
 蒙ラント申ス處ニ不^レ叶シテ征東將軍ノ官ヲ送ラル無念
 ニ存^レ存既^二尊氏ハ發向シケリ^一
 源氏系圖云尊氏卿元弘四正五位下^レ時左衛門督同年
 九四參議武衛如^レ元建武二八九征東將軍^元府將軍^守同月卅日
 從^二二位^一
○按功同同年十一月廿六解官
 吉野御事書案云先朝^後運數に應じ神威をおこして天下
 一統せられ祖皇の御いきとほりを休めたまふ時いたりし
 かば掌をかへすごとくなり建武の征東將軍^氏彼ときをば
 かりて御方に參じて功を立られし實に理運なり隨て朝獎
 とて寄海祝を四方の海のなかにもわきてまつかなれわか
 をさむべき浦の波かせ
 按征東の號は藤原繼繩にはじまり藤原小黒麻呂大伴家
 持紀古佐美等相繼てこれに補して東夷を征せり延曆中
 征東使を改て征夷使とせられしより其號ひさしく絶た
 り承平亂に藤原忠文征東將軍に拜せられし後又絶て補
 することなし源平盛衰記平家東國發向條に征東大將軍
 左兵衛督知盛卿中宮亮通盛朝臣左少將清經薩摩守忠度
 侍には尾張守實康伊勢守景綱以下三千餘騎にて東國へ
 發向す云々とあり然れども知盛の征東將軍に拜せしと
 公卿補仕以下實錄諸書に見る所なし且此文勢征東將軍
 の稱知盛以下の四人にかゝれるに似たりさらば東國追
 討の大將といふべきを記者の作意にてかく書なせしと
 見ゆ元より將軍の宣旨有しにはあらざるへし故にとら
 す<sup>是のみならず盛衰記に承平よりはるかにほとありて元弘
 はこのるわいさどし</sup>
 一統の後北條時行の亂に足利殿この職に拜せられしか
 といくほどもなく解官ありき正平中南朝の宣旨にて宗
 良親王この任に居たまひしか其後はまたこれをおかれ
 しこと聞えず太平記天正本に等持院殿征夷將軍に任せ
 られしとき舍弟直義は征東將軍になる、由をのせた

比類なかりしかども諸軍勢のすゝめによりて忽ち天下
 をうはひ申され先朝御怨念を散せずして世をむなくし
 たまひし其亂を思ふに開闢以來いまだこれをきかず
 新葉集云あつまのかたに久しくさふらひてひたすらもの
 のふの道にのみたつさはりつ、征東將軍の宣旨なごた
 されしも^七正平^思ひのほかなるやうに覺えてよみ侍りし中
 務卿宗良親王おもひきや手もふれさりし梓弓おきふし
 我か身馴れん物とはおなし頃武藏國へ打越てこてさし
 原といふ所におりゐて手分などし侍りし時いさみあるへ
 きよしつはもの共にめしおほせ侍りしついでに思つ、け
 侍りし君のため世のため何かをしからん捨ててかひあ
 る命なりせば<sup>○按宗良親王を征東將軍になされしは正平七年の事な
 り李花集には征東を征夷につくれりされど此時與良親
 王現に征夷將軍たれば征
 東に作るを得たりとす</sup>
 李花集云遠國に久しく住み侍て今は都の手ふりもわすれ
 はてぬるのみならずひたすら弓馬の道にのみ携り侍りて
 征夷將軍の宣旨なごたまはりしも我なからふしきにおほ
 え侍りければ歌よみ侍し次に思ひきや手もふれざりし梓
 弓おきふし我身なれんものとは
 又云東夷を征すへき將軍の宣旨を下されて東山東海のほ
 とりに籌策をめぐらし侍るひまに題をさくりて歌よみ侍

とて寄海祝を四方の海のなかにもわきてまつかなれわか
 をさむべき浦の波かせ
 按征東の號は藤原繼繩にはじまり藤原小黒麻呂大伴家
 持紀古佐美等相繼てこれに補して東夷を征せり延曆中
 征東使を改て征夷使とせられしより其號ひさしく絶た
 り承平亂に藤原忠文征東將軍に拜せられし後又絶て補
 することなし源平盛衰記平家東國發向條に征東大將軍
 左兵衛督知盛卿中宮亮通盛朝臣左少將清經薩摩守忠度
 侍には尾張守實康伊勢守景綱以下三千餘騎にて東國へ
 發向す云々とあり然れども知盛の征東將軍に拜せしと
 公卿補仕以下實錄諸書に見る所なし且此文勢征東將軍
 の稱知盛以下の四人にかゝれるに似たりさらば東國追
 討の大將といふべきを記者の作意にてかく書なせしと
 見ゆ元より將軍の宣旨有しにはあらざるへし故にとら
 す<sup>是のみならず盛衰記に承平よりはるかにほとありて元弘
 はこのるわいさどし</sup>
 一統の後北條時行の亂に足利殿この職に拜せられしか
 といくほどもなく解官ありき正平中南朝の宣旨にて宗
 良親王この任に居たまひしか其後はまたこれをおかれ
 しこと聞えず太平記天正本に等持院殿征夷將軍に任せ
 られしとき舍弟直義は征東將軍になる、由をのせた

副將軍 七月戊申是日夕中衛舍人從八位上上道臣斐太都告內相云今日未時備前國前守小野東人喚斐太都謂云(中略)陸奧將軍大伴古麻呂今向任所行至美濃關云々四年正月丙寅詔曰昔先帝數降明詔造雄勝城其事難成前將既因然今陸奧國按察使兼鎮守將軍正五位下藤原惠美朝臣朝獵等致導荒夷馴從皇化不勞一戰造成既畢又於陸奧國杜鹿郡跨大河之峻嶺一作桃生柵奪賊肝膽睿言惟續理應哀昇宜擢朝獵特授從四位下陸奧介兼鎮守副將軍從五位上自濟朝臣足人云々並進一階

又云神護景雲元年十月辛卯諸軍軍殺已上及諸國軍士蝦夷俘囚等臨事有効應叙位者鎮守將軍並宜隨勞簡定等第一奏聞上

又云寶龜四年七月甲午以正四位下大伴宿禰駿河麻呂為陸奧國鎮守將軍按察使及守如故七年五月戊子出羽國志波村賊叛逆與國相戰官軍不利云々戊戌以近江介從五位上佐伯宿禰久良麻呂為兼陸奧鎮守權副將軍八年十二月辛卯初陸奧鎮守將軍紀朝臣廣純言志波村賊蟻結肆毒出羽國軍與之相戰敗退於是近江介從五位上佐伯宿禰久良麻呂為鎮守權副將軍令鎮守出羽國

又云延曆元年六月戊辰春宮大夫從三位大伴宿禰家持為兼陸奧按察使鎮守將軍外從五位下入間宿禰廣成爲介外從五位下安倍媛島臣墨繩爲權副將軍

日本後紀云延曆十五年十月己卯近衛少輔從四位下坂上大宿禰田村麻呂爲兼鎮守將軍

日本紀略云延曆廿一年正月丙寅遣從三位坂上大宿禰田村麻呂造陸奧國膽澤城戊辰勅官軍薄伐關地賊遠官發駿河甲斐相模武藏上總下總常陸信濃上野下野等國浪人四千人配陸奧國膽澤城

○按大野東人多賀城築於此彼發にいたりてこの膽澤城を定めて鎮守すす弘仁以後鎮守府と稱するものはこれなり和名抄に鎮守府在膽澤郡と見えたり吾妻鏡に田村麻呂を鎮守將軍の中興といへるも此鎮守府を造れるを以てなり

日本後紀云大同三年七月甲申勅夫鎮守將之任寄功邊成不虞之護不可暫闕今開鎮守將軍從五位下兼陸奧介百濟王教俊遠離鎮所常在國府儻有非常何濟機要邊將之道登合如此自今以後莫令更然

又云弘仁二年三月甲寅勅陸奧出羽按察使正四位上文室朝臣綿麻呂(中略)鎮守將軍從五位下佐伯宿禰耳麻呂副將軍外從五位下物部臣瑗連足繼等曰去二月五日奏備請發陸奧出羽兩國兵合二萬六千人征爾薩體幣伊二村者云云三年二月己亥從五位上物部臣瑗連足繼爲鎮守將軍四

月己丑定鎮守官員將軍一員軍監一員軍曹二員醫師醫師各一員也

類聚三代格云太政官符定鎮守府官員事將軍一員軍監一員軍曹二員醫師醫師各一員右被右大臣宣備奉勅鎮兵之數減定已訖其鎮官員數宜依前件弘仁三年四月二日○按鎮守府は正員の外に副將軍を拜し或は權副將軍を任すに至りて將軍一員に定む自後副官權宜等絶て任す事なし

又云太政官符加減備仗員事陸奧出羽按察使四人元三人今加一人鎮守將軍二人定二人右被右大臣宣備奉勅備仗之數依前件加減弘仁三年四月七日

續日本後紀云承和七年三月壬寅勅符陸奧守正五位下良峯朝臣木連前鎮守將軍外從五位下臣瑗宿禰末守等省今月十八日奏知發援兵二千人云々

三代實錄云貞觀元年正月十六日癸酉從五位下行陸奧介坂上大宿禰商道爲鎮守府將軍七年正月二十七日己酉從五位下行陸奧介文室朝臣甘樂麻呂爲鎮守府將軍

又云元慶二年三月廿九日乙丑出羽國守正五位下藤原朝臣與世飛騨上奏夷俘叛亂云々六月八日壬申散位從五位下小野朝臣春風爲鎮守府將軍詔令春風與陸奧權介從五位下坂上大宿禰好蔭星火進發先入陸奧各將精兵五百人奔赴救之賜春風好蔭甲冑各一具九日癸酉勅曰從五

位下小野朝臣春風今月八日任陸奧鎮守將軍須依格分付受領而率將軍兵向出羽國宣令前將軍從五位下安倍朝臣比高準見任例暫行府政

類聚符宣抄云太政官符陸奧國司并鎮守府從五位下藤原朝臣文脩右今月三日任彼府將軍畢國府承知至即任用符到奉行永延二年十月五日

陸奧話記云朝廷有議擇追討將軍乘議所歸獨在源朝臣賴義賴義者河內守賴信朝臣子也性沈毅多武略最爲將師之器忽應朝選專征伐將帥之任拜爲陸奧守兼鎮守府將軍令討賴良入境着任之初俄有天下大赦賴良大喜改名稱賴時同太守名有委身歸服境內肅清一任無事任終之年爲行府務入鎮守府數十日經廻之間賴時傾首給仕云々

吾妻鏡云壽永三年正月十日庚子伊豫守義仲兼征夷大將軍云々粗勘先規於鎮守府宣下者坂上中興以後至藤原範季安元三年三月雖及七十度至征夷使者爲兩度歟

源氏系圖云尊氏卿正慶元六八從五上元弘三六五鎮守府將軍同十二日從四下同日任佐兵衛督同四正五正三位同年九四參議武衛如元建武二八九征東將軍元鎮守府將軍

公卿補任云建武二年參議從二位源顯家右中將陸奥權守十一月十二日爲鎮守府將軍

建武年間記云請被加三將軍號狀右謹考故實陸奥國者遠當邊境之至要鎮備蝦夷之不虞依之弘仁三年殊下勅符建立鎮守府擇主帥之器授將軍之號自置件職以降以從五位上階爲彼相當而多爲當國刺史兼之或爲隣州牧宰任之愛顯家官昇八座位至二品依別勅在常州剩以勳功賞兼鎮守府雖似洪恩之重疊位高而官卑頗可謂違先格所請者自今以後三位以上任此職日加大字以爲永格凡因時制義者歷代之規範也親王任刺史之日號曰太守蓋此謂乎抑又無功賞者無創業之途當任而奏請者後輩由此望請天裁早被加大字知公卿之貴者顯家誠惶誠恐謹言建武三年二月日參議從二位行左衛門督兼鎮守府將軍源顯家位按加大字了の按本文弘仁三年建立鎮守府といへるは非なり是彼年府の官員を定められしに據りて誤るなり三島社文書云寄進三島社伊豆國安久郷事右爲天下泰平所願成就奉寄進之狀如件延元三年正月七日權中納言兼陸奥大介鎮守大將軍源朝臣家顯押神皇正統記云戊寅元の春二月鎮守大將軍顯家卿又親王をさきたて申かさねて打る上海道の國々ことごとくたひ

又云さてしもやむへきならずとて陸奥の御子後村又東へむかはしめ給ふへき定あり左少將顯信朝臣中將に轉し從三位に叙し陸奥鎮守將軍をかねてつかはさる東國の官軍ことごとく彼節度にしたかふへきよしをおほせらる

○按建武の制三位以上の將軍に補すれば必ず大の字此加ふ然れば顯信また大將軍たること押しして知るへし太平記云自持り院宣條左兵衛督入道慧源直ハ師直ガ西國へ下ラントシケル比ホヒ潜ニ殺シ可奉企有ト聞エシカハ爲遁其死忍テ先大和國へ落テ越智伊賀守ヲ憑マレタリ(中略)石堂右馬頭頼房以下少々志ヲ存ル舊好ノ人々馳参リケレハ早隠レタル氣色モナシ何様天氣ナラテハ私ノ本意ヲ難達トテ先京都へ人ヲ上セ院宣ヲ伺申サレケレハ無子細應テ被宣下剩不望鎮守府將軍に被補其詞云被院宣傳班鳩宮誅守屋朱雀院之戮將門是豈非捨惡持善之聖猷哉爰退治凶徒欲息父叔兩將直之爵念敬威甚不少仍補鎮守府將軍被任左兵衛督畢早率九國二島并五畿七道之軍勢企上洛可令守護天下者依院宣執達如件觀應元年十月廿五日足利左兵衛督直殿權中納言國俊奉たまへるにあらす其ゆゑは直冬は源氏の男にて直冬をいへり此時直冬既に父叔兩將之職をなすは直冬に給りたることと論なまし

たすして知へし且直冬は是よりさき所應元年左兵衛督に任し康永三年に出家入道せしかは爰に至てさらに左兵衛督に任すへきいはれなれし直冬たること益明なりまた九國二島云々の文あるも當時直冬九州にあるを以てなり依て國太府太平記等を參考して事勢を推すにこの時足利氏の執事高直直權柄をとりて君主を蔑如し直冬を殺さんす直冬逃れて大和にいたり直冬に通して師直を誅せんことをはかる故に先院宣を申給りて直冬を鎮守府將軍左兵衛督になして兵を擧ぐ欲するなり本文にひたすら直冬にたまふものさするはひかこなり

慶長年録云慶長十六年三月六日大御所様御上洛駿府迄御出同十七日御入洛同廿二日大御所様御所望にて當家之御先祖新田義重贈官あり鎮守府將軍廣忠公に贈官權大○按又松原自將軍納言休手録に見ゆ按鎮守將軍は陸奥の鎮將なり弘仁以後多くは鎮守府將軍と稱すはしめ奈良朝に此將軍を陸奥の鎮所に居らしめて蝦夷を鎮衛してより代々武略ある人を撰てこれに補す夷狄叛亂のことあれば征夷使と共に征伐の事をつとめしむ副將軍權副將軍に至ては時に從て一定なし大方事あるに臨みて是を任するか故なり延曆中坂上田村麿に命して膽澤城を築かしめこれを鎮守府とし弘仁中府の官員を定めし時將軍一員となされて更に副官權官を置れすそれより後七十餘人相繼て任せられしかと文中治中鎮倉殿を征夷大將軍になされてより後は將軍の號を重せらる、か故にさらに鎮守府將軍を任せす元弘一統の後足利殿奏請してこの職に任せられしかとも鎮守警衛の意にはあらてひとへに將軍の稱をからん爲な

これは遂に奥州にはくたらずして征東將軍にうつれり依て更に陸奥國司源顯家を鎮守府將軍に拜せらるもどより彼地に鎮衛しければ名義は往古に復せしかと實は陸奥出羽常陸下野をも管領し其職掌は古の鎮將に百倍して實に征夷府の勢をなせり且その奏請にまかせて新に大の字を加へられ鎮守大將軍と稱す顯家戰死の後弟顯信又陸奥國司となりて此職に兼任せられき顯家已後公卿たる人この職に居るときは必大の字を加へらる、事になりしかとこれは南朝の勅に出て一時の制なり職原夷使條に凡頼朝補之之後依征夷之任不並任鎮守元抄弘以來被並任事記せるもこの抄は南朝の言なる故なり北朝にては觀應年中足利直冬を以て鎮守府將軍に任せりこれまた陸奥の鎮將となすにはあらず將軍の名をかりて師直を誅さんが爲めなり其後絶て此職を任せす慶長年中源義重朝臣に鎮守府將軍を贈られしは頼義朝臣義家朝臣等の例を追はれしなるへければ贈官とせしはこれを始とすへし

武家名目抄第五册

職名部三

○大將

多武峰略記云炎上第二度天仁元戊子年九月十一日淨土院諸坊并院内堂舎少々焼失於山郷者皆悉燒失右根元者云云興福寺衆徒蜂起可燒拂多武峰由下知了即三軒大夫守延爲大將自傘峯打入令燒失第三度承安三癸巳年六月二十五日山郷并寺中堂塔僧坊等皆悉燒失右根元者云云四月廿六日興福寺大衆蜂起可燒失多武峯之由僉議了自晦日東西居關永止往還六月八日自當寺打破棕橋關了同廿日合戰始其合戰處者坂田細川傘峰棕橋大道天滿峰水越峰小竹峰宮奧等也寄軍大將小竹峰者宇陀藤二近保水越峰者長谷川三郎季俊忍坂三郎家宗此日山郷被燒失了廿一日合戰傘峯冬野許也寄軍大將傘峰者長谷川主殿正經廣瀨當武者倫成池尻三郎家資池尻四郎助成忍海清太時直冬野者檜原中内光遠北隅平太國親布施源藏行弘會禰源太季方中津尾源二忠康等也保元物語云新院爲義をすへて今度の大将軍いたみ存する

又云大渡山崎二番ニ坂東坂西ノ兵共二千餘騎櫻井ノ宿ノ北ヨリ山ニ副ヲ推寄タリ城中ノ大將脇屋右衛門佐義助ノ兵并ニ宇都宮美濃將監藤藤カ紀清兩黨二千餘騎二ノ木戸ヨリ同時ニ打出テ半時計相戦フ雌雄未決戦半ナル時四國ノ大將細川卿律師定禪六萬餘騎赤松信濃守範資二千餘騎二手ニ分テ押寄タリ又云義助豫州去程ニ四國ノ通路開ストテ脇屋刑部卿義助ハ曆應三年四月一日勅命ヲ蒙テ四國西國ノ大將ヲ奉テ下向トソ聞エシ又云直冬與吉野爲父孝アレハ賤シケレ共被賞虞舜ノ德是ナリ然ニ右兵衛佐直冬ハ父ヲ亡サン爲ニ君ノ命ヲ假ントス君是ヲ御許容有テ大將ノ號ヲ被許事旁以非道云々又云院條今將軍ノ逝去ニ力ヲ得テ菊池如何様都へ責上リヌト覺ル是天下ノ一大事也急キ討手ノ大將ヲ下サテハ叶マシトテ故細川陸奥軍顯氏子息式將大夫繁氏ヲ伊豫守ニナシテ九國ノ大將ニソ下サレケル又云山名伊豆守義美作城條中國ノ大將細川右馬頭賴旨讃岐國ノ守護ヲ相論シテ四國ニオハスルニ觸送テ其勢ヲ呼越シ備前備中備後當國四箇國ノ勢ヲ以テ倉懸ノ城ノ後攻ヲセヨトテ事ノ子細ヲ牒送ス○按賴旨別本頼之に作る從ふべし

子細多く侍りまけて今度の大将をはよ人に仰付られ候へとも申されける(中略)爲義か子供の中に義朝こそ坂東をたらの者にて合戦にてうれん仕り其道かしこく候上つきしたかふ所の兵共皆しかるへきものどもにて候へ共夫はたいりへ召れて参り候其外のやつはらは勢なども候はぬ上大將など仰付らるへき者とも覺え候はず

源平盛衰記云八牧夜討ノ大将給ハリテ嫡子ノ三郎宗時ニ先カケサセ家ノ子モ郎等モ洗キ汰タル者ノ手ニ立ツヘキ兵ノ八十五騎ニテ八牧カ館ヘソ寄セケル新式目云條々正嘉三年二月九日寄役所致自由合戦縦雖拔群之忠不可被行其賞所詮隨大將命可令進退由嚴密可被相觸九州守護并御家人以下輩也

伯耆卷云弘義馬に打乗小波に清高か扣たる船上より一里斗置て萱見畑と云野中にて大手搦手の手分をを爲仕けり先大手の大將には隠岐前司清高二千餘騎東坂より寄たりけり搦手の大將には清高か弟能登守清房若林等を始として其勢一千餘騎西坂よりよせたりけり

太平記云顯慶元年九月十九日卯刻ニ軍勢雲霞ノ如クニ六波羅へ馳參ル小串三郎左衛門尉範行山本九郎時綱御紋ノ旗ヲ給リ討手ノ大將ヲ承テ六條河原へ打出云々

花營三代記云永和四年十一月五日夜紀伊國大將細川兵部大輔使者到來去二日凶徒打取之間合戦大將引籠建内記云正長二年七月七日欲馳參室町殿之處別當僧正(一乘院照)注進狀到來良方若輩衆等及合戦之企(有確)云云八日一乘院方者申云泉覺房舎兄多々兄弟爲大將寄來之於大鳥居前如意輪院手防戦之間寄手大將多々兄弟并同宿一人國民岡子息被射殺之仍引退云々

新撰長祿寛正記云政長ハ立田ノ明神ノ御寶前ニ祈念シテ少モサワキ玉ハス河内勢ハ高安ノ馬場ノ崎ニテ二手ニ分テ島ノ領内福基ノヲウタウト云所ニハ遊佐彈正忠若黨二十四人指置遊佐河内守國助カ追手ノ大將ニテ千五百騎ニテ寄來云々

國府盛衰記云承れば義明はののし、武者とやらんにてむかふばかりをやふらるべし其義にて有ならはたうほうの人数を左右へおしわけ候ひて御所方のつは者をまん中に取籠て新手をいれかへせむならはたとへ四王羅せつといきほひにてましますとも終には討取申へし先弓手の大將にははこね殿應はしめとしてまつたおいししみつかの笠原に申付扱めての大將にはとを山きんこく山中をはたためあら川其外の侍とも御旗本を目懸我等父子はまん中に

ひかへつ、とき味方のかうおくを見物せんとし月の一戦はけふにすぎたる事あらじはやうつ立と下知せらる勝軍地蔵軍記云近江衆ハ永原安藤守ヲ大將トシテ一萬餘騎ニテ勝軍地蔵山ニ籠置ト聞エケレハ(中略)十一月廿四日ノ早天松永彈正少弼松山新太郎先手大將ニテ一萬餘騎ニテ責寄タリ

甲亂記云天正十年正月廿八日大手ノ大將トシテ武田相模守信豊并山縣三郎兵衛尉今福筑前守横田十郎兵衛尉都合其勢三千餘騎信州府中筋ヲ向ニ木曾一相働又搦手ノ大將トシテ仁科五郎信盛并諏訪越中守同伊豆守其外諏訪高遠之衆二千餘騎上伊奈口ヨリ相働

初井日記云八上水ノ丹波國は無類ノ堅固ノ國ニテ昔ヨリ代々名ヲエシ弓取大剛ノ者トモノ子孫旗頭トシテ守護シ弓矢ノ花モ實ニ備リタル處ナレハヨキ大將軍ヲ仰キ奉リテ一族ニテ畿内南海北陸ヲ一統シ天下ニ旗ヲ立ヘキ時節ト七頭七組ノ大將衆ヲ初メ工夫淺カラス候

會津陣物語云伊達政宗甘糟ハモトハ越後國上田ノ者ニテ長尾越前守政景ノ家人也度々ノ勇功將帥ノ智才柿崎和泉守武列本莊越前守重長ニモ肩ヲ可レ並モノナリケレハ謙信ノ代ニ次第ニ經上リ一手大將トナリケル

將をばまかいふならひとなりぬこの冊にのせし大將副將已下すへてそのたくひなり

但朝廷の任したまふ所にあらざるも大將軍副將軍とざるせしをば第三冊に附しこの冊にはたゞ大將副將とのみ注せるをのせたり盛衰記に知盛を征東將軍とざるし太平記に足利殿を上將軍と注せしもともに任除せしにはあらされとこれまた三四兩冊のうちに附せりこれ全く公私混載して條理たらざるか如くなれと大將軍副將軍征東將軍上將軍等の名目を兩所にあけんことをいとふ故に題目をば公に譲りて私の稱をもその末に附たるのみなりかれ是を合せ考ふればおのつからその詳なるをざるへきなり

○總大將

太平記云^{矢野}三番ニ仁木細川今河石堂一萬餘騎下ノ瀬ヲ渡テ官軍ノ總大將新田義貞ニ打テ懸リタリ又云^{兵庫海陸}左中將義貞ハ總大將ニテオハスレハ諸將ノ命ヲ司テ其勢二萬五千餘騎和田御崎ニ帷幕ヲ引セテ整ヘラル

新撰應仁記云^{武衛家}公方勢ハ廣川ト云所ニ陣ヲ取總大將管領代細川讚岐守成之同兵部少輔勝久同淡路守成春同阿

大友與廣記云^{雲田合}去程に佐伯の先陣後陣入亂た、かふ時日州の片大將新名治右衛門尉扇の馬しるしを高畑伊豫守か手にて追落すとかく物して後伊豫守此馬しるしを擧て招かけしかは日州勢新名治右衛門尉ひかへたるを心得て方々のしけみ物かけより出来る^{○按片大將は一方の大將といふに同じ}見聞難録云廿七日夜中淺井父子より越前の大將分朝倉孫三郎を小谷城へ招き淺井家の家老物大將各寄合各一兩日中に是非の合戦と相談有之云々

末森記云加州越中ノ境山際ニ鳥越ト云所丈夫ニヨシラヘ目賀田又右衛門丹羽源十郎兩人ヲ大將分ニシテ名アル侍共都合五百餘騎入置ル
按いにしへの大將軍は皆朝廷のよさし給ふ所にて節刀軍令等を受けらる、の式あり第三第四の冊に載たるは皆それなり中古にいたりて將軍を任する事中絶せし^{但領守將軍は常に置る、たゞ一軍の首將たる人をさし職なればこの例にあらす}り大將軍とも大將ともいひそれにつけるものを副將軍とも副將ともよへるならひとなれり後には公私混雜して私の戦にもこの名目をよへることとなりてより盜大將軍^{宇治拾遺物語海賊大將海東諸國に見えたるなどいへる語に見ゆ}名さへいてきしからにその人からも定めなく一隊の部

波守勝信同刑部少輔勝吉山名彈正忠是豐武田大膳大夫信賢弟治部少輔國信鶴岡望月關長野伊勢國司勢モ被打立^{應仁私記云去程被_レ成_二下治野御教書_一上者下_二給御旗_一御所勢總大將軍細川右京大夫勝元同六郎勝之於_二細川一族_一悉令_二一揆_一}

松陰私語云先年五十子張陣之上小山下野守招越長尾左衛門尉景信子息景春武州之守護同名景忠武上之諸一揆以下并當陣引_二率五千餘騎_一下總國兒玉塚に張陣(中略)然處佐野以下之面々招越而公方^成之御勢於_二一戰之上_一可_レ致_二裏切_一内談治定のよし巷説滿_レ岐このよし五十子諸將へ注進諸將當方の^岩松陣下來集惣兵談於_二此義_一者大切なり不_レ廻_二日時_一向_二彼口_一可_レ有_二進發_一治定其時之總大將は源慶院殿^{岩松}家純なり爲_二御代官_一御息男兵庫頭殿^{桃井}桃井讚岐守上杉治部少輔同名刑部少輔武州之成田以下爲_二先當方_一二千五百餘騎むかふ

萬松院殿穴太記云天文十八年六月十一日の早天に宗三入道はるなみの城を立出て晴元の近習外様の大名小名を催し其勢三千餘騎おのれは總大將として三軍の下知をつかさどる

賀越圖諍記云^{一揆等攻波}江大炊條尤斯ル處ニ越前國悉大坂ノ手ニ屬ス

ル間總大將トシテ下間筑後ノ法橋下有テ豊原に著陣アリ
初井日記云桂川合戦條彌次郎波多野秀基ヲ今日ノ總大將ト見候テ陣外ノハカマハス打込打込彌次郎本陣へ度々數モオホエヌホドニカケコミ申候

毛利家記云文祿二年ノ春秀元卿十五歳ナリシヲ爲ニ總大將ニ朝鮮國へ可レ被ニ差渡一由秀吉公ヨリ御誼有シニ依テ彌生半ニ秀元卿御渡海有シ勇ト知トオト奇妙ノ事多カリシナリ是ヲ御覽シ付ラレ若年ノ人ヲシテ異國和朝ノ御弓箭ノ大將軍ニ渡ラセ給ヒシ秀吉公ノ心ノ内恐鋪事ヲト沙汰アリシ

按總大將の稱は上古にはきこえず前條にもいひしこと
中頃より一將一隊の首長を世に大將とも大將軍ともいふ習ひとなりし故にそれに別んために總軍の首帥を總大將とも總大將軍ともいひしなり

○副大將 又稱副將
梅松論云五月五日兵庫の合戦の事御談合の御使夜の中往復度々に及ふ當所において御手分有テ下御所直副大將は越後守師泰大友三浦介赤松播磨美作備前三ヶ國の惣軍勢なり

天正事録云明智秀ハ正立寺ノ城へ逃入ル云々又脇大將ニ成テ取持タル齋藤藏介生捕則京都ヲ車ニ乘テ引明智日向カ頭ト一所ニ粟田口ニ礮ニ被ニ掛置也

見聞雜録云信玄方は手負討死越後方より五千餘少し然共典厩信繁大將諸角豊後山本勘介三枝新十郎初鹿源五郎是等を始として備々の物頭三十一人討死なり

按脇大將といへるは一門にもあれ家人にもあれ威權ある人の首將に並ひて軍務を攝する者をいへり其所職大かたは副將に似たれど副將は臨時に定むるか多く脇大將は常に其人からによりてよへる稱なればわつかの差別なきにあらざるを古くより聞えされは全く俗間のとなへより起れる名なることしるへし

○侍大將

平家物語云協合戰條大將軍には左兵衛督知盛頭中將重衛薩摩守忠度侍大將には上總守忠清其子上總大郎判官忠綱飛騨守景家其子飛騨大郎判官景高高橋判官長綱河内判官秀國武藏三郎左衛門有國越中次郎兵衛盛綱上總五郎兵衛忠光悪七兵衛景清を先として都合其勢二萬八千餘騎木幡山うち越テ宇治橋のつめに押寄たる

同長門本云本三位中將關東下向條三位中將をこひの二郎かしゆこしけ

松隣夜話云永祿四年武州松山の城主北條安房板橋ト云處ニ鷹野ニ越シ若侍餘多引率シ逗留シタリケル透ヲ伺ヒ太田三樂三千餘騎ニテ取詰問宮高梨ヲ魁首トシ西北ヲハ明ケ置キ東南ヨリ無理非道ニ乘入松山ノ副將北條玄庵子息雅樂佐笠原新五郎ヲ初メ城中ノ兵士千二百各渡リ合持口ヲ堅メ防戦ヲ

初井日記云氷上宗貞八陣ハ二階堂伊豆守秀香公副將トシ備ヘラレテ候其勢一千二百餘騎平林大膳秀衛畑正守廣錦織帶刀左衛門重真等後檢ニテハ候相傳ノ歴々輕備ニシテ此手ニ付シテ候カ多クテ候

豐臣家譜云秀吉帥師到紀州爲滅根來寺也以ニ大和
大納言秀長羽柴中納言秀次爲副將云々
松原自休手録云慶長十九年十一月六日從大坂一燒天王寺一淺野但馬守六日陣ニ泉州大鳥一此日藤堂爲副將一有可レ向大坂一命承承鈞命一自身至大仙領一面藤堂一歸大鳥一翌朝七日備藤堂カ住吉ノ陣ノ傍ト云々

按副大將といひ副將といふ即古の副將軍の流なり但ここにのするは私に稱せるものにて朝廷の授けたまふ所にあらず猶詳なることは前の大將の所にいへり

○脇大將

ることばかち原は大手かまの冠者のかたの侍大將也九郎申されけるは(中略)三位中將これへわたしたまへ給はらすはまゐりて給らむとのたまひければとひかちはらにいひあはせてとひかもとへ渡しければ其後あつかりにけり源平盛衰記云源氏勢關東ノ評定ニハ梶原平三は侍大將軍ニテ九郎義經ニ付キ土肥二郎ハ侍大將軍ニテ蒲冠者ニ相從フヘシト被ニ定タリケルニ實平ハ範頼ヲ捨テ、九郎義經ニ付ク景時ハ義經ヲ離レテ五百餘騎ヲ引分テ蒲冠者ニ屬ケリ○按平家物語以下の諸條すへて侍大將と注す然るに此處ひかり侍大將軍の稱あるはうたがはし

太平記云軍條大將軍ニハ大佛陸奥守貞直同遠江守足利治部大輔高氏侍大將ニハ長崎四郎左衛門尉相從フ侍ニハ三浦介入道武田甲斐次郎左衛門尉相從名孫八入道結城上野入道云々

又云節使使東山道ノ勢ハ搦手ナレハ大將ニ三日引下テ都ヲ立ケリ其大將ニハ先大智院宮彈正尹宮忠房洞院左衛門督實世持明院兵衛督入道道應園中將基隆二條中將爲冬侍大將ニハ江田修理亮行義大館左京大夫氏義島津上總入道同筑後前司饗庭石谷猿子落合仁科伊木津志中村村上頼高梨志賀眞壁十郎美濃權介助重是等ヲ宗トノ侍トシテ其勢都合五千餘騎云々

又云主上自今條千種殿ハ本陣峰ノ堂ニ歸テ御方ノ手負打死ヲ被レ註ニ七千人ニ餘レリ仍一方ノ侍大將トモ可レ成者トヤ被レ思ケン小島備後三郎高德ヲ呼寄テ敗軍ノ士力疲テ再難レ戰都近キ陣ハ悪カリヌト覺レハ云々
又云紀州龍門山軍條官方ノ侍大將鹽谷伊勢守其兵ヲ引具シテ最初峰ヲ引退テ龍門山ニ籠リケル

伯耆卷云四月八日六波羅合戰有レ之御方討負給ひて大將頭中將侍大將村上判官高重信濃法眼源盛等八幡へ引退く寶篋院殿將軍宣下記云延文三年十二月廿一日自レ己刻禁裡御門共爲レ警固參仕侍大將以上十二人也大將一人に隨兵三百騎充其外精兵之射手五十騎充大將一人に都合三百五十騎にて一門を警固也侍大將之事佐々木備前守高久山名伊豆守時氏土岐伊豫守直氏安東信濃守高泰二階堂但馬守秀則長澤遠江守利正長尾彈正大忠景元鳥山若狹守光武曾我美濃守氏助小申但馬守詮衡佐々木尾張守高信土岐右馬頭氏光以上十二人赤松大夫判官光範は五百餘騎にて御門之順見之役也

結城戰場物語云千王殿其時はいまた御所の宮と申て御年十四に成給ける大將軍の司を蒙り亦上杉兵庫頭侍大將を承打立る五萬餘騎都を立て關東結城か城へむかはれける

を大將と定め一郡計もちてあなたこなたへ旗をかたふけて憑て世をすこす侍を侍大將と申す此人一國をもつ大將へ隨身いたし申せは與力と定め又一國もとる大將の三ヶ國をも侍大將と縁などを組て無事有て互に加勢あるは小身の方を旗下と定て申たるか物の母はやく聞えてよく御座候

又云晴信山本勘介問答條甲州御家中弓矢功者の衆甘利備前守板垣信形小山田備中飯富兵部原加賀守諸角豊後侍大將に六人足輕大將には横田備中原美濃小幡山城多田三八四人此十人は弓矢をとりてくらからす

又云板垣備中三郎曲淵少左衛門公事條甲州にて侍大將衆同心に預おかる、侍とも知行百貫とる者大形五十貫は名田と申物にて年貢少つつ出し殘は其地主知行にふみてとる右少つ、の年貢は名田の中に段錢と云物を撰出し高にふみ又別人に下さる、然は板垣被官曲淵少左衛門と申者數度武邊譽ある故取わけ信玄公御被官になされて板垣には同心と仰わたされ候

又云物の時宜作法一郡一城或一ヶ國持ても小身なる者か主に取たてられ主の恩にて下され國主になるをは本の大將とはいはず郡代城代又は侍大將とも申さん

三好記云天文十一年三月十一日河内衆の侍大將譽田山城カ子ニ三寶院ト云法師武者一陣にス、ミ譽田川ヲノリコシ合戰ヲ初メケル
軍陣間書云侍大將などさす幡半幡ともいふなり又射手はたともいふ也

武具要説云天文、年五月八日信玄公小幡山城守原美濃守横田備中守多田淡路守山本勘助以上五人を被レ召出(中略)足輕大將の中にて右五人巧者と申何も五十度餘充手に合たる者共なれば然るへしとて此衆へ被レ仰付諸道具之事段々に銘々の所存申上候其後信玄公家老衆被レ召此書要を御見せ被レ成御意被レ成候は人は道具の善惡によらず勝負は運に依事なれば此吟吟不レ入事なれども一度も手に逢の若輩者は爰はの時役に立心得なく諸道具を拵候は以來信玄公鋒鈍なる基と思召右五人の者に被レ仰付一穿鑿被レ成候然共か様事諸人の手遊ひに成如く物淺くはいか、被レ思召一問士大將に此書付を御見せ被レ成不穿鑿成道具の拵を仕者をは家老衆は不レ及申侍大將衆より能々申教よと被レ仰付候家老衆侍大將衆御近習衆之外は此書付を見たる人無レ御座候

又云小身成侍大將は我同心被官の貴とむやうにして御大將の被レ成ましまさとある合戦をも勝と見きはめて勝利を元て味方をいさめ後軍を二重三重に考あふなけもなき様にする事肝要なり五度あらは一二度は敵をくつして後敵に能武者あらは手にかけても可然但小身より度々おほえある人大將になり候は、自身の働一切すへからすわかき心出來候は、大きなるけかなり

謙信家記云景虎ハ山内ヨリ大石小幡長尾白倉四人ノ侍大將ヲ近邊ニ打ツレ則官領ニ成給フ威勢ノ程コソユ、シケレ

見聞雜錄云天正元年七月朔日二條御所を御出有尤御留守居之大將には日野亞相輝資卿藤宰相永相卿を兩大將として三淵大和守を士大將として軍奉行には伊勢伊勢守を被レ差置義昭ハ宇治へ渡御有真木島城へ移らせ給ふ

初井日記云桂川合戦條天正三年冬ヨリ明智日向守又ヨミカヘリ出テ(中略)當國へ攻入ント工夫評議ス前々ニコリテトカク自然ニ仕寄コメヨト評議究マレハ一城充モ攻落シテ見ヨトテ翌年ノ春ヘムケテ様々ノ手立トモ致シ信長前ニテモ評議ノミ致スヨシナリ明智左馬助同次右衛門氏家外記久徳六左衛門小川土佐守溝尾左兵衛等ノ士大將トモ、

人數ヲ付テ手分致シ云々

別所長治記云別所小三郎長治ハ村上源氏具平親王廿六代ノ孫赤松人道圓心カ末葉也同姓ノ侍大將山城守舍孫孫右衛門兩人執權政道明也

大友與廢記云筑後國高良山ヲ被政條宗麟公きこしめし御人數をさしつかはし親種をせめらるへきとの御誕にて田原白杵田北古庄吉弘吉岡志賀朽網戸次一萬田をさふらひ大將にてうら部日田玖珠奈多安岐の江のせいをさきとして二萬餘のくんひやう十二たんのそなへを永祿八年乙丑に筑後國たから山へさしつかはさる

荒山合戦記云前田利家は二王門ノ方ヨリ大手ニ被ノ向相從侍大將ニハ長九郎左衛門尉信實與村伊豫守同孫助小塚淡路守以下都合其勢三千餘人石動山ニ押寄タリ

關八州古戦録云笠原新六郎政興松田尾張守村秀カ嫡子新六郎政堯其頃ハ武州小机ノ城主笠原能登守カ養子ト成テ組ヲモ附屬セラレ百八十騎ノ士大將タリシヲ籠置レタリ慶長見聞記云一番ノ戰大友方打勝テ豊前衆ヲ山上へ追上ル間爰ニテ黒田方島治右衛門討死也如翠ハ本陣ヲ崩シ突テ懸ル大友方ノ侍大將吉弘嘉兵衛ト申者ヲ黒田方ノ井上

周防ト云者突伏首ヲ取ル

なかをおちの草子云なかをのしやうへおしよせてときをとつとそあけたりけるおひふししやうないにはほうちやう殿のみうちにあしかる大將ふくむろたちわきさへもん七十三きにてこもりける

武具要説云天文、年五月八日信玄公小幡山城守原美濃守横田備中守多田淡路守山本勘助以上五人を被ニ召出ニ土屋右衛門尉内藤修理亮兩人を以被ニ仰下ニけるは(中略)武田家は度々手に合地園にも聞え有衆數多候得共一城をも御預置候侍大將には御遠慮有レ之不被ニ仰聞ニ候尤與力同心の内にも塙數手柄之者如何程も可有レ之候得共是は大勢の中にて誰彼と御撰被レ成候も如何に思召足輕大將の中にて右五人功者と申何も五十度餘充手に合たる者共なれば然へしとて此衆へ被仰付候右五人衆聞取仕諸道具之事段々に銘々の所存申上候多田淡路守申分一手の大將を仕程の者敵の中へ馬を入るは我働を心に懸自身勝負を仕らん爲斗にて無御座ニ候就レ中足輕大將などの馬を入る事は畢竟敵の備を乗破て我手の者共に能働させんか爲なれば一寸二寸の小馬にて大勢の中を駆破候事申成間敷候

勝軍地蔵軍記云三好方足輕大將三郷修理亮其時ハ主膳ト云ト云兵一番ニ嶽ヘカケ上リ跡ヲツ、ケト再拜ニテマテキケル

加藤家軍詞云被官與力同心アルハ士大將ト云フ

按侍大將とは其身侍にして一軍の將となり軍士を指揮するものをいへるなり侍は六位の人の諸家に懸候するものをいふ五位に叙せらるるいへとも其筋の人は猶侍と稱するこさなり詳なるよしは稱呼の部にしるせり平家物語太平記伯耆卷寶篋院殿將軍宣下記等に見えたるはこれなりされどこれは平日に定め置る、ものにあらず事あるに臨みて侍の中よりさるへきものを撰ひて其職に従かはせしなり室町殿の末に至りては名義や、みたれて家々の定同しからず果には侍大將足輕大將と並へよはる、こと、なりて侍一組を預り指揮する者の稱となれり後世の番頭は大かたこの職掌にかなへり

○足輕大將

東亂記云河越城武州ノ國司上杉扇谷修理大夫朝興ハ天文六年卯月下旬朝ノ露ト消玉ヲ子息五郎朝定生年十三歳ニテ家督ヲ繼ケルカ父ノ遺言ニマカセ佛事作善ヲ抛テ先武州ノ神大寺ト云處ニ故要害ヲ取立城トシテ氏綱ヲ退治セントシタクシケレハ氏綱斯ヲ聞玉ヒテ同七月十一日サカ寄ニ河越ノ三木ト云處マテ押寄タリ先カケノ兵ニハ井浪橋本多目荒川ヲ足輕大將ト定メ松田志水朝倉石巻ヲ互手ニ備テ待懸タリ

ヲ近江衆ノ若黨ツ、ク敵ノ無ヲ見テ長身ノ鎧ヲトリノへ馬ノ足ヲナイタリケレハナカレテ人馬共ニカケヨリコロヒ落ケルヲ堀伊豆守ト云者オサヘテ修理ヲ打取リケル

義秋公方記云三好三人衆ハ首途ヨシト悦ヒ則堺へ打入テ勢ソロヘシテ其勢一萬餘人永祿十二己巳正月二日堺ヲ打立五日ニ本國寺へ取カ、ル折節公方様衆無勢ニテ細川右馬頭藤賢三淵大和守藤英總門ヲ固野村越中守足輕ノ大將トシテ四辻ヲ固メケルカ三好方大勢ニテ責入已ニ外カハ責破リ御難儀ニ及ハント云々○按將軍家にて足輕大將といふによればこの頃は其稱ありしこ明なり名目多くきこえす然れども此書信長記云三川國小豆坂合戦條天文十一年八月十三日三川國生田原へ打出勢ノ著到ヲ付テ由原ノ某ト云者ヲ足輕大將トシテ三州小豆坂へ押寄ル

安土日記元龜二年五月六日淺井備前姊川迄罷出横山へ差向人數ヲ備居陣候テ先手足輕大將淺井七郎五千計ニテミ浦表堀樋口居城ノ近邊マテ相觸

各御成寺々へ御申を致す其日は時宗一蓮寺にて御歌の會有之(中略)廿人衆の頭五人にさし添加勢の足輕大將三頭市川梅隱齋原與左衛門横田十郎兵衛馬乘同心足輕共に召具し是は寺外四方を廻也加勢の足輕とは各境目へ番手に遣さる、者共也

又云信支代意足輕大將衆横田十郎兵衛騎馬三十騎足輕百人原與左衛門騎馬十騎足輕五十人(下略)

又云功小宮山をりふし向山同心功力左大夫と申侍又足輕大將の三枝善右衛門寄子小宮山八右衛門と申信玄公御持弓の者と兩人の侍何を用ありてこそこれも右の酒屋へまゐる

又云小身成者足輕大將のこころは自身の働してはけかたり脱掛の勝利を分別して足輕をあつかひ軍の先達をして味方の勝利を得ることに仕後によき敵あらはうちても尤なり

謙信家記云六人ノ侍共三ヶ國ヲ廻リアラユル城ノ繪圖或は山川沼ヶ川迄ノ甲乙道筋ヲ繪圖ニナシ來リ(中略)輝虎大ニ悦ヒ侍大將足輕大將ヲヨヒ軍評定有云々

別所長治記云山城守申シケルハ明日ノ合戦辰ノ尅ニ城中ヲ押出シ先長屋表へ總人數ヲ伏置若武者五六百ニ足輕少

經大將は足輕同心を指揮すること主眼にて騎馬同心は翼衛に属せらるゝ者なりされは本文の文章すこしくたかへり

按足輕大將は足利殿の季世に諸家の職名より移れる稱にて古き代にはさこゆることなしすへて此職は弓鉄砲の足輕同心を預りそれを指揮するもの、總名なれば先手弓鉄砲頭持矢鐵砲頭などいひて物頭と稱せたるたぐひ皆この所職なり諸家の定むる所一例ならされとも騎馬同心をも附屬せられて翼衛とすること大かたの例なりもとより弓同心と鉄砲同心とは分ち預る故に弓大將鉄砲大將ともよへりさて足輕同心に弓鉄砲の二隊ありといへども就中鉄砲を以て字とす鉄砲は永正大永に始りて天文に廣れるものなれば古代足輕大將の名なかりしもこの故なるへし猶弓鉄砲頭の所を合せ見るへし

○武者大將

島山記云和州へハ政元細川自身打立テ越智カ城ヲ被レ責ケル越智彈正カ内ノ武者大將ニ鳥屋ト云侍父子一番ニ渡リ合散々ニ戦ヒ子息ハ十六歳ニテ打死ス

信長記云三河國小豆坂合戦條天文十一年八月十三日三川國生田原へ打出勢ノ著到ヲ付テ由良ノ某ト云者ヲ足輕大將トシテ三川小豆坂へ推寄ル處ニ織田備後守殿僅四千余騎ノ勢ヲ率シ同國安土城へ出向ヒ舍弟孫三郎殿ヲ武者大將トシテ敵

々相添室田保岡岡村ヲ爲ニ足輕大將前ナル川ヲ打渡シ敵ヲ可引出

義光物語云城取十郎討捕條螺を吹立る程に五十挺組の足輕大將熊澤主税高橋主計志村藤右衛門など段々に打立押ければ義光公も御馬引寄ゆらりと打乗三百丁の長柄のうち三十人者どて獸の名をつけし強力の者共月山打の長身の鎧を持せ前後に被ニ召連

由良家傳記云或時新田へ北條家働はりつけ木を押立城を渡し不申候は、國繁顯長をはりつけにあげ可申旨申候其時金山城より是を御覽被成あれを持候て下知仕候やつを大筒にて打と妙印様被ニ仰付候得は田村加賀守と申足輕大將くぬ木戸張すこし脇の木立しけり候所へ罷上り大筒にて一時に三放打せ申候

大友與廢記云朝鮮國へ兵代を渡さる、條安に豊後の七組足輕大將有富久作右衛門尉上野彌平此等をさきとして七人あり

土屋知貞私記云大坂籠城之節籠候人數尾張者足輕大將藏五十計岸勘解由知行千石程

里見義康分限帳云里見揚安齋足輕大將高三百石

加藤家軍詞云弓鉄砲ヲ與リ名字持タル者ヲ預ルハ足輕大將ト云按、こゝに名字持たる者といふは騎馬同心のこゝにて足輕同心に属せらるゝ者なりされは本文の文章すこしくたかへり

ノ陣へ推向シカハ小豆坂へ取上時ヲ咄トソ上ケタリケル又云輝元取圍條此日又陶ト尼子ト大ニ戦テ陶カ被官深野平左衛門尉武者大將タリシカ眞先ヲ懸テ打死シ其外宮川以下數十人討レヌ

安土日記云天正二年七月十三日イタイノ島燒拂信長公其日者五妙ニ野陣ヲ懸サセラレ候十五日ニ九鬼右馬允アタケ舟瀬川左近アタケ舟(中略)浦々ノ舟ヲ寄ラレ蟹江アラコ勢田大高木田寺木大野トコナへ野間内海桑名白子平尾高松アノ津楠ホソクミ於茶筌公極氷鳥屋野尾大東小作田丸坂ナイ是等ヲ武田大將トシテ被ニ召列ニ大船ニ取乘參陣也

又云天正十年二月十六日御敵今福筑前守武者大將トシテ葦原ヨリ鳥井峠へ足輕ヲ出シ候

賀越關詳記云從大坂越前守謀議條河合ノ庄ノ者卒爾ニ討立テ豊原寺へ押寄下間筑後ノ法橋ヲ誅セント八重巻寺ニ馳アツマル處ニ筑後法橋則逆寄ニシテ追拂ヘトテ若林長門守野島ヲ武者將軍トシテ僅ニ八百餘騎打位テ先手加島表ニ支ヘタリ

新撰信長記云加賀國ヲ支藩領條御幸塚ノ城ニハ徳山五兵衛ヲ大將ニスエ置阿閉ナタノ介上坂又兵衛兩人ハ武者將軍ニ定ム

氏郷記云小倉三河守佐々木義ノ武者將軍トシテ其勢數千騎ヲ引率シ伊勢國へ發向ス
又云三好中納言秀嗣卿ヲ大將軍トシテ堀尾帶刀ヲ武者大將ニ定メ淺野彈正少弼ヲ奉行トシテ石田治部少輔ヲ横目ニ下シ給フ

奥羽水陸軍記云和賀山北藤奥州和賀ノ城主多田薩摩守義忠山北ト相戰フ事度々ナレトモ山北ハ大勢也和賀ハ小勢也和賀勢不レ失利云コトナシ此醜憤ヲ散セントヤ大勢ヲ催シ寄來ルト聞ユ山北ヨリハ兼テ和賀押ヘトシテ小田島大黒澤長門守南郷雄勝川ヲ切廻シ藤倉カ城ニ楯籠リシカ此由ヲ聞横手ニ以テ飛檄乞ニ加勢遠江守景道是ヲ聞テ旗本ノ武者大將足輕大將ヲ始急ニ催シ指向ラル
加藤家軍詞云總軍ヘモ下知ヲ爲ハ武者奉行武者大將軍奉行備頭ト云

按武者大將はすへての武者を指揮するゆゑに軍中に在てはことなる重職なりされと事に臨みて定めらるゝ所司なれば中古以來の侍大將などのことく常に設置るゝ職にはあらて事果ぬれば其任をどかれしと見えたり
○軍大將

河越記云爰にまたたけき中によさしきありそのひのい

一つ請取しかもよく持ち候とて信玄公御扶持被レ成伊丹大隅守と申て駿河船大將に被レ仰付候也
毛利家記云サテ舟手ヨリモ秀元ノ舟大將村上掃部頭ヲ將トシテ船ヲ川口へ押入陸ノ合戰初リナハ舟ヨリモ同時ニアカツテカ、ルヘシ云々
義殘後覺云野島來島爰ニ毛利家ノ舟大將ニ野島來島栗屋トテ有ケルカ折節雨ノ痛ク降ツ、キケレバ徒然ナルニ依テ野島ト來島ト基ヲ固ミケルニ來島カ與力基ノ手ヲ助言シケレハ野島早速ニ引拔テ天願ヲ丁ト切タリケリコハ如何ニト來島拔合セ遣マシト戰フ處ニ野島カ與力トモ居合セ切テカ、ル來島カ與力同心立別レテ入亂レ前後亂ラニ切合

北條五代記云相模寶藏山登陸條氏直沒落より以來家康公御舟大將小濱民部左衛門尉向井兵庫助間宮虎之助千賀孫兵衛此四頭彼湊を居住とす

板坂卜齋慶長記云古城の家作りの間家康公本屋敷に被レ成ニ御座候かと存候へは夜中は路地口うら門坏よりしのひやかにちにて河端へ出御御屋敷より河端まではくたり坂にて坂の下平地坂も三十間斗平地六十間斗河の端へおりさせられかたまちあり片町の内西のかたへ二町斗

くさ大將せし難波田かあやなくうしろを見せ松山さしていぬるをいさめる兵駒かけよせ一首はかくそ聞えにけるあしからしよかれとてこそた、かはめ何か難波のうらくつれ行と誹謗跡によみかけしに難波田もさすかによしある武士にてくつはみいさ、か引返し古今集の歌をもて一首の贈答いそかはしく君を置てあたし心を我もたは末の松山波もこえなん我作りかほにもてなし駒の足はやめけすかことくに成ぬ

矢島十二頭記云慶長五年八月廿五日酒田の城主赤田修理殿より淺野權之丞軍大將として九月十日に由理へ遣し候て由理中城主を責潰し可レ申候

按軍將軍は其身の分限にはか、はらす其日の合戰をは悉く主將より許されて進退するものをいふとみえたりもとより臨時の所職にして常に置かるゝものにはあらず然れども多く見えされは詳に考かたし

○船大將

太閤記云因幡國取海上を見れば松井猪介荒木勘十郎船大將として番船其數を不レ知播磨之外には家々の幕を張櫓を上晝夜の番固く勤しかは鳥の外かよふ物はなし
甲陽軍鑑云花澤城今川殿御同朋伊丹清安の花澤くるわを

行江戸町と申所の南のはてに小濱與三次郎と申舟大將居申候其所より小船にめしむかい島の堤へしのひあからせられ候

駿府記云慶長十九年十一月廿九日蜂須賀阿波守松平宮内少輔註進申云今朝野田福島捕之云々戸川肥後守花房一黨註進同前九鬼長門守向井將監忠勝船大將衆註進今朝番船數艘取其外小舟不レ知數敵皆捨ニ舟於天滿ニ逃入
土屋知貞私記云大坂籠城之節籠候人數尾張者舟大將千石餘岡田丹後五十歳斗

按船大將は船頭及水主楫取をひきゐて舟船の事をつかさどる長官なりこれを海賊大將海賊衆船奉行船手衆などといふは船奉行船手衆等の條を合せ見るへし

申云延及今日猶可謂遲引一世之安危人之可疑時也
 可治定事也早可有其沙汰云々前與州禪室卒去之後
 世上巷說縱橫武州者爲討亡弟等出京都令下向之
 由依有風聞四郎政村之邊物怨伊賀式部丞光宗兄弟以
 謂政村主外家内々憤執權事與州後室朝光女亦舉聲宰
 相中將實雅卿立關東將軍以子息政村用御後見可
 任武家成敗於光宗兄弟之由潛思企已爲和談有一同
 之輩等子時人々所志相分云々武州御方人々粗伺聞
 之雖告申武州稱爲不實欺之由敢不驚駭給刺要
 人之外不可參入之旨被加制止廿九日掃部助時盛
 相州武藏太郎時氏武州等上洛兩人共就世上巷說雖稱
 可在鎌倉之由相州武州被相談云世不靜之時者京
 畿人意尤以可疑早可警衛洛中者仍各首途相州當時於
 事不被背武州命云々八月一日乘燭之程相州出仕
 政所此國司并武州被奉執事之後于今無此儀廿八
 日武州於政所吉書始九月五日故與州禪室御遺跡庄園
 配分子男女賢息之注文武州自二品賜之廻覽方々
 (中略)皆歡喜之上會無異儀歎此事武州下向最前内々
 支配之潜披見二品之處御覽畢後仰曰大概神妙歎但嫡
 子分頗不足何様事哉者武州被申云奉執權之身於領所
 等事爭強有競望哉只可省舍弟之由存之者二品類
 降御感涙云々仍今日爲彼御計之由及披露云々
 保曆間記云泰時天下ノ事ヲ行ニ此人賢人無双ニシテ武家
 ノ政道ニ五十一ヶ條ノ憲法ヲ貞永元年七月始テ定メ行フ
 嘉祿元年ヨリ仁治三年ニ至ルマテ十八ヶ年執權ニ目出度
 カリシ世也懸シ故ニヤ末七代天下ノ政事ヲ行フ同五月九
 日依所勞泰時出家ス法名同六月十七日泰時六十二ニシテ
 テ死去畢天下惜ヌ人ソナカリケル嫡孫武藏守經時時左
 泰時カ跡ヲ繼テ將軍ノ執權ス
 吾妻鏡云寬元四年三月廿三日壬子於武州御方時有深秘
 御汰沙等云々其後被奉讓執權於舍弟大夫將監時頼朝
 臣是存命無其特之上兩息未幼稚之間爲止始終牢籠
 可爲上御計之由眞實趣出御意云々左親衛即被申
 領狀云々廿六日癸卯左親衛依爲執權今日令始行評
 定給
 又云康元元年十一月廿二日己酉相州時赤痢病事減氣云々
 今日被讓執權於武州時長又武藏國務侍別當并鎌倉第同
 被預申之但家督時宗幼稚程之暇代也廿四日辛亥武州奉
 執權事之後始被參政所與州并評定衆等各布參會
 保曆間記云康元元年十一月廿二日時頼將軍家ノ執權ヲ政

村長時時孫陸奥等ニ申付テ出家ス出家ノ後モ凡世ノ事ヲ
 ハ執行ハレケリ弘長三年十一月廿二日最明寺入道時頼法
 三十七ニシテ死去三男時宗被跡ヲ繼文永元年八月十日將
 軍家ノ執權ス○按政村は義時の子なり元元年三月
 帝王編年記云鎌倉執權武藏守平朝臣長時時長子康元元年十
時頼文永元年七月左京權大夫平朝臣政村文永元年八月五日爲執權
二日出家法名專阿左京權大夫平朝臣政村權同五年三月五日爲執
權左馬權頭兼相模守平朝臣時宗最明寺長子文永元年八月十日
年三月五日
 將軍執權次第時宗相模文永五年三月五日始爲執權云
 云政村左京權三月五日時宗出仕之間渡執權又連署
 帝王編年記云鎌倉執權相模守平朝臣時宗弘安七年四月出家法
號實相模守兼左馬權頭平朝臣貞時實光寺長男弘安七年七月
光寺保曆間記云正安三年八月廿三日貞時出家シテ法名號最勝
 圓寺入道嫡男高時未生ノ間將軍家執權ヲ從弟相模守師
時右申付タリ時頼ノ孫武藏守宗政子也彼師時ハ貞時
時馬權頭聲也其上師時ヲハ時宗カ爲子ケレハ如此計ケリ嘉元元
 年高時朝臣生ヌ應長元年十月廿六日最勝圓寺入道死去息
男高時子時左彼跡ヲ繼今年九歳ナリケル宗宣熙時等將軍
 家ノ執權ヲシケリ
 北條記云師時相模正安三年八月廿二日爲執權應長元年
 九月廿二日出家同日酉冠卒三十宗宣陸奥嘉元三年七月廿二
 日爲將軍家連署應長元年十月三日轉執權正和元年五
 月廿九日出家同六月十二日卒五十熙時相模應長元年十月三
 日爲連署正和元年六月二日爲執權同四年八月十二日
 出家同十月九日寅冠卒七高時相模正和五年七月十日爲
 執權七正中三年三月十三日出家
 梅松論云治承四年より元弘三年に至るまで百九十四年の間
 關東將軍家并執權の次第は頼朝頼家實朝以上三代武家也
 又頼朝頼家以上二代は攝政家なり亦宗尊惟康久明守邦以
 上四代は親王なり惣て九代なり次に執權の次第は遠江守
 時政義時泰時時氏經時時頼時宗貞時高時以上九代皆以將
 軍家の御後見として政務を申行ひ天下を治め武藏相模兩
 國の守をもて職として一族の中の器用を撰ひ著して御下
 文下知等を將軍の仰らるゝに依て申汰沙しける元三の境
 飯弓場始庭の座貫馬隨兵以下の所役の輩諸侍ともに對し
 ては傍輩の儀を存す昇進においては家督を德崇と號す從
 四品下を以て先途として遂に過分の振廻なくして政道を
 專にして佛神を尊敬し萬民をおはれみ育みしかは吹風の
 草木をなひかすかこくに從ひつきしほとに天下悉治り
 て代々目出度ぞ有ける然るに高時の執權は正和五年より

正中二年に至るまで十ヶ年なり是より關東の政道漸く非義の聞え多かりけり
 太平記云武家繁頼朝ノ長男左衛門督頼家次男右大臣實朝公相繼テ皆征夷將軍ノ武將ニ備ル然ルヲ頼家卿ハ爲ニ實朝一討レ實朝ハ頼家ノ子爲ニ惡禪師公曉一討レテ父子三代僅ニ四十二年而盡ヌ其後頼朝卿ノ男遠江守平時政子息前陸奥守義時自然ニ執ニ天下權柄ニ勢漸欲覆ニ四海一此時ノ太上天皇ハ後鳥羽院也武威振レ下朝憲廢レ上事ヲ歎思召テ義時ヲ亡サントシ給シニ承久ノ亂出來テ官軍忽ニ敗北セシカハ後鳥羽院ハ隱岐國へ遷サレサセ給テ義時彌八荒ヲ掌ニ握ル其ヨリ後武藏守泰時修理亮時氏武藏守經時相模守時頼左馬權頭時宗相模守貞時相續テ七代政武家ヨリ出テ徳窮民ヲ撫スルニ足リ威萬人ノ上ニ被ルトイヘトモ位四品ノ際ヲ不越謙ニ居テ仁恩ヲ施シ己ヲ責テ禮義ヲ正ス是ヲ以テ高シト云トモ危カラス登リト云トモ溢レヌ承久ヨリ以來儲王攝家ノ間ニ理世安民ノ器ニ相當リ給ヘル貴族ヲ一人鎌倉へ申下奉テ征夷將軍ト仰テ武臣皆拜趨ノ禮ヲ事トス同三年ニ始テ洛中ニ兩人ノ一族ヲ居テ兩六波羅ト號シテ西園ノ沙汰ヲ執行ハセ京都ノ警衛ニ備ラル又永仁元年ヨリ鎮西ニ一人ノ探題ヲ下シ九州ノ成敗ヲ司ラ

シメ異賊襲來ノ守ヲ堅スサレハ一天下普ク彼下知ニ不隨ト云處モナク四海ノ外モ均ク其權勢ニ服セスト云者ハ無リケリ此故ニ朝廷ハ年々ニ衰ヘ武家ハ日々ニ盛也因レ茲代々ノ聖主遠クハ承久ノ宸襟ヲ休メンカ爲近クハ朝議ノ陵廢ヲ歎キ思食テ常ニ叡慮ヲ回サレシカトモ或ハ微勢ニシテ不叶或ハ時未レ到シテ默止給ヒケル處ニ時政九代ノ後胤前相模守平高時入道崇鑒カ代ニ至テ天地命ヲ革ムヘキ危機此時ニ顯レタリ行跡甚輕シテ人ノ嘲ヲ不顧政道不正シテ民ノ弊ヲ不レ思只日夜ニ逸遊ヲ事トシテ前烈ヲ地下ニ羞シメ朝暮ニ奇物ヲ翫テ傾廢ヲ生前ニ致サントス見人眉ヲ蹙メ聽人唇ヲ翻ス
 保曆間記云正和五年高時時四將軍家ノ執權ス頗亡氣ノ躰ニテ將軍ノ執權モ難レ叶カリケリサリケレトモ武藏前司泰時ノ時ヨリ代々政道正直ニ行ヒ置タリケレハ彼内管領長崎入道圓喜又高時カ舅秋田城介時顯彼二人ニ貞時世事申置タリケレハ申談シテ如シ形無ニ子細ニテ年月送リケリ爰ニ高時管領長崎入道老耄ニ依テ子息長崎左衛門尉高資ニ彼管領ヲ申付高資政道モ心ヨカラサリケルニヤ高時正躰ナキ儘高資心ニ任セテ天下ノ事ヲ行フ人ノ歎キ積リケレハ關東ノ侍トモニモ深ク疎レテ世上ハ果敢々々シカラ

シナト申ケリ嘉曆元年三月十三日高時依ノ所勞出家ス舍弟左近大夫將監泰家宜執權ヲモ相繼ヘカリケルヲ高資修理權大夫貞顯ニ語テ貞顯ヲ執權トス貞顯は義時子五郎實泰カ後守顯時子ナリ爰ニ泰家高時ノ母儀貞顯朝是ヲ憤リ泰家ヲ同十六日出家セサス此事泰家モサスカ無念ニ思ヒ母儀モ憤深キニ依テ貞時被レ誅ナント聞エケル程ニ貞顯評定ノ出仕一兩度シテ出家畢同四月廿四日相模守高時武藏守久時男修理大夫維貞宗宣男子彼兩人ヲ將軍之執權トス是モ高資カ僻事シタリト申ケル中略○按維貞貞上野國ニ高氏一族新田義貞ト云者アリ武藏上野相模等ノ勢ヲ催シテ鎌倉へ馳上テ高時ノ一族等ヲ責高時カ一族家人馳向テ去元弘三年五月中旬ヨリ毎日所々合戦ヲス諸國ノ侍皆高資カ無道ノ振舞高時カ亡氣ノ頼ナサニ鎌倉ヲ恨ミタリ終ニ五月廿二日高時一族共悉滅ス昨日迄ハ天下ノ政ヲセシカハ誰背カント云者ハ有シ私ノ恩ヲ蒙ル諸人モ勿ニ替テ敵ト成ニシ事浮世ノ習ト云ナカラ口惜カリシ事也
 將軍執權次第云元弘三年五月十四日將監入道泰家爲ニ大將軍一向ニ武州關戸ニ合戦新田多勢之間將監入道引退入ニ鎌倉同十七日相模守時南條左衛門尉以下各向ニ武州山内離山ニ合戦十八日守時以下自害畢廿二日鎌倉方被レ打落

殿中以下懸レ火悉燒ニ拂之一族等或自害或落畢
 梅松論云爰に先代といふは元弘年中に滅亡せし相模守高時入道のことなり承久元年に武家の遺跡絶てより以來故頼朝卿後室二位禪尼のはからひととして公家より將軍を申下テ北條遠江守時政か子孫等を執權として關東に於て天下を汰沙せしなり
 太平記云中前代今天下一統に歸シテ寰中雖ニ無事ニ朝敵ノ餘黨東國ニ在ヌヘケレハ鎌倉ニ探題ヲ一人オカテハ惡カリヌヘシトテ當今後醍醐第八ノ宮成ヲ征夷將軍ニナシ奉テ鎌倉ニソ置進セラレケル足利左馬頭直義其執權トシテ東國ノ成敗ヲ司レトモ法令皆舊ヲ不改
 保曆間記云元弘三年十二月主上ノ宮成良親王ト申ニ尊氏舍弟左馬頭直義朝臣相副テ關東八ヶ國爲ニ守護ニ下向アリ鎌倉將軍ト申ケル去程ニ建武二年七月ニ高時ノ息勝長壽丸時相模信濃國ノ勢ヲ語テ鎌倉へ責上ル直義朝臣雖ニ防戰ニ無勢ノ間鎌倉ヲ出テ成良親王ヲ奉レ具テ京都へ上ル○按成良親王將軍の宣旨蒙りたるは鎌倉下向の後にて建武元年の春なり直義其執權として關東の事を沙汰せしは纔に二年なり
 太平記云四條堀手已ニ楠ト武藏守トアハヒ僅ニ半町計隔タレハスハヤ楠カ多年ノ本望爰ニ途ヌト見タル處ニ上山六郎左衛門師直ノ前ニ馳塞リ大音聲ヲ擧テ申ケルハ八幡殿

ヨリ以來源家累代ノ執權トシテ武功天下ニ顯レタル高武藏守師直是ニ有ト名乗テ討死シケル間ニ師直遙ニ隔テ楠本意ヲ遂サリケリ

又云頼朝宗徒ノ者共千餘人神水ヲ吞テ所詮畠山入道清國ヲ執權ニ被ニ召仕ハ毎事御成敗ニ隨マシキ由ヲ左馬頭基ヘソ訴申ケル

花營三代記云應安五年十一月廿二日將軍家義御判始御年十五御裝束立烏帽子長相直垂執權武藏守頼之朝臣直垂摠奉行治部少輔高秀同七年正月十日御評定始御出座武藏守頼之時大膳大夫高秀佐々木

普廣院殿御元服記云正長二年三月九日御元服御祝儀式以後於ニ御會所東向ニ法體衆其外諸大名少々御對面御太刀鞍馬折紙等各被ニ進ノ于ノ時執權左衛門尉入道道端於ニ御會所ニ砂金又御太刀等内々被ニ進ノ之依ニ爲ニ法躰ノ子息持國朝臣參勤可ニ謂ニ御佳例ニ乎

又云永享二年七月廿五日大將御拜賀供奉行列出仕人々伺候次第(中略)次一騎打被ニ着ニ狩衣一畠山尾張守持國佐々木治部少輔持光富樫介持春土岐美濃守持益左衛門佐義淳于時執權郎等拾騎大帷直垂自餘一騎打組騎無之鎌倉年中行事云奉公中管領ヘ書札之事誰ニテモ其時之執

爲ニ母堂ノ外戚常ニ寓ニ大坂一市正ニ後被ニ憑ニ大坂ノ執權ニ常眞固辭シテ諫言及ニ再三ニ雖ニ然依ニ不得巳爲ニ述ニ當時ノ難ニ假應レ之

毛利家記云松田ハ北條家ノ執權セシ者也彼家ノ諸士彼カ威ニ屬シテケリ最前北條秀吉カヲ蔑如ニセシ時モ北條カ伯父ノ美濃守ト相共ニ度々北條ヲ諫メ云云

氏郷記云伊勢國住人千草ハ近江ノ守護佐々木左京大夫義賢ノ執權後藤但馬守カ弟ナリ

勢州軍記云國司北執權鳥屋尾石見守文武之達人拘ニ公私ニ不屈ニ其義ニ無双之者也

鹿島治亂記云江戸但馬守殿ヘハ左金吾ノ族臣士子ヲ遣シ執權叶氏ヘ談而通泰ヘ達ス○按以上六條或ハ一時の稱呼にいふ所あるは大名諸家の管領にして幕下職員の比にあらずといへども當時諸國にも執權の稱ありしをみるべき爲に所見の一二をここに收む
按執權は君主を輔佐し政務を統領せる重職にて公家の職掌に比すれば攝關大臣の任に當れり依て或は理非決斷の職と稱し吾妻鏡又は判斷の職といふ太平記又常には後見職探題の職ともよへり將軍執權次第鎌倉草創の時大江廣元政所別當として政事を攝行しければ當時稱して執權といへりこれ當職の權與なり實朝將軍武職を相續あるに及びて外戚の祖父北條時政政所別當に加は

事宛所ニテ謹上下管云々管領ノ執權ト云事ヲ毎々諸人申條不可然其故者管領トハ只之時ノ詞ニ申也八段之記ニハ執權トノセラル、也然間管領一人ヲハ執權ト申ヘキ也○按太平記四條總手合職條以下六條は京鎌倉兩足利家の執權なり尙管領關東管領條を合考ふべし

三好別記云三好肥前守長慶後修理大根本は四國侍と申候河内國飯守に在城五畿内其外十三ヶ國手に入天下之執權被ニ致候由申候病死被ニ致候

濃州無者道人狀云天下之儀三好義令ニ執權ニ公儀ヲ蔑如に扱申に付而被ニ合ニ御意趣之由内々傳承而寄ニ事於左右永祿八年五月十九日御所中ヘ諸勢亂入暫雖被ニ爲ニ成ニ御戰ニ多勢ニ不ノ叶殿中ニ火ヲ懸御自害義○按ニ三

度ノ男義繼をいふなり已上二條は足利將軍の季世に三好家在京して畿内西國の事を沙汰せしをいへり但全く管領に稱せられしにあらざり當時は所司代も稱せしと他書に見ゆ其旨趣は所司代條に述たり合考ふべし

大開記云惟任坂本を心さし日向守首を村井春長軒か郎等見知て秀吉ヘ持參し夥しき引出物賜てけり其死骸をも尋出し首をつき日の岡に六月十四日明知左馬助か父二人を磔に懸給ひにけりかくてより秀吉の威光か、やき出天下の執權は此人たるへきやうに上下媚をなしけり

松原自休手録云慶長十九年六月廿四日命ニ大野修理渡邊内藏助木村長門守ニ欲ニ誅ニ市正ノ子此前内府入道常眞依

り執權の職に居て威權内外を兼たり是より先時政務に預述たるがごとし然れどもいまだ別當に補せざる後これを男義時に聞なれば全く執權さばはれざりしと見えたり

武家名目抄第七册

職名部四之二

諸國に及び大名諸家にもま、執權の名をとふるなら
ひいてきて終には武家の古法を失ふに至れり長四年二月廿日鎌倉の奉行北條家の使節として上洛の所に當時將軍被下辭に執權申上皇第一三宮之間可下御下向之由依申請也あり、ことに執權を辭すあるは頼朝將軍政務を辭せらるゝないへるなり北條家の意にて執權を辭すよしに申されしと見えたり

○連署又連判又加判又合判
清和源氏系圖云頼行男宗頼兵庫頭將軍家司政所御下文連署人衆○按頼行は三位入道頼政の弟也

又云頼兼男頼茂右馬頭昇殿政所家司連署人數○按頼兼は頼上二條は元仁以後北條氏執權連署と相ならひていたす政事を攝せし類にはあらすた、源家の近親たるを以て鎌倉にありし時政府に列し公文に連署せしことありしと見ゆ此外建久の間源邦業藤原親能など下文に連署せしことあり頼行頼茂は全く其たぐひなるべし邦業親能の事は政所別當條にあり

帝王編年記云鎌倉執權別當右京權大夫兼陸奥守平朝臣義時元仁元年六月相模守平朝臣時房義時舍弟元仁元年六月十六日卒月爲將軍家連署 武藏守平朝臣泰時義時長男元仁元年六月爲將軍家執權

將軍執權次第云泰時武藏元仁元年任父讓補御後見時房相模奉御後見加合判嘉禎二年三月三日修理權大夫仁治元年正月廿四日死○按此後寶治元年に至るまで連署の職中絶せり

梅松論云承久元年二月廿九日攝政道家公の三男頼經二歳にして關東に御下向嘉祿二年十二月廿九日頼經八歳にて御元服あり武藏守平泰時加冠たりさる程に武藏守泰時相

模守時房連署として政務を執行ふ

關東評定傳云貞永元年壬辰執權相模守平時房武藏守平泰時寶治元年丁未執權左近大夫將監平時頼相模守平重時朝臣七月下旬關東連署

吾妻鏡云寶治元年七月廿七日戊寅相州重時爲將軍家別當連署秋田城介義景傳仰於彼國司即被申領狀八月一日辛巳恒例贈物事可停止之由被觸諸人一令進將軍家之條猶兩御後見之外者制禁云々○按兩御後見とは時頼重時といふなり

將軍執權次第云重時相模寶治元年奉御後見加合判建長元年六月十四日遷陸奥守康元元年三月十一日出家法名觀覺○按重時連署たるは時頼在職の間なり

關東評定傳云康元元年丙辰執權陸奥守平重時朝臣連署三月廿三日連署四月五日任陸奥守

相模守平時頼十一月前右馬權頭平政村朝臣五月任陸奥守武藏守平長時十一月文永元年甲子執權相模守平政村朝臣八月十一日武藏守平長時七月三右馬權頭平時宗七月十一日執權

將軍執權次第云政村陸奥康元元年三月卅日爲御後見加合判四月十四日政所着座文永二年三月廿八日左京權大夫五年三月五日時宗出仕之間渡執權又連署十年五月十八日出家法名覺崇時宗左馬權頭文永元年八月十一日以後令加連判二年三月廿八日相模守五年三月五日始爲執權

云々○按本書政村の傳中文永元年執權なることを脱せり

帝王編年記云鎌倉執權左馬權頭兼相模守平朝臣時宗武藏守平朝臣義政文永十年六月八日爲連署政村建治三年四月四日出家

將軍執權次第云業時駿河弘安六年四月十四日連判事被仰出御使城介宗景同廿五日評定時始加合判六月廿八日着座政所七年八月八日任陸奥守二十年六月十八日出家法名監忍○按業時連署たるは時宗貞時執權の間なり

帝王編年記云鎌倉執權相模守兼左馬權頭平朝臣貞時武藏守平朝臣宣時弘安十年八月十九日爲連署業時正應二年六月廿三日任陸奥守正安三年八月四日出家法名忍昭

將軍執權次第云宣時前武藏守弘安八年八月十九日連判事被仰出同日評定始同廿三日加判形云々

保曆間記云正安二年八月廿三日貞時出家シテ嫡男高時未生ノ間將軍家執權ヲ從弟師時ニ申付タリ時頼ノ孫武藏守宗政子也彼師時ハ貞時翌也其上師時ヲハ時宗カ爲子也

ケレハ如此計ケリ其頃左京權大夫平時村師時ニ相合テ將軍家ノ執權シテ連署也

將軍執權次第云師時左馬權頭 正安三年八月廿三日奉御後見今日評定始十月廿五日政所始應長元年九月廿日於御評定座頓死時村武藏 正安三年八月廿三日合判事被仰下今日評定始十月廿五日政所始嘉元三年四月廿三日夜被誅畢

北條記云宗宣陸奥 嘉元三年七月廿二日爲將軍家連署應長元年十月三日爲連署正和元年六月二日爲執權○按正和元年五月宗宣出家するをより同四年に至るまで四年の間宗宣一人執權して連署の職中絶せり

將軍執權次第云熙時相模 應長元年十月十三日加判事被仰下 異本伯耆卷云高時若年ナレハトテ其間大佛宗宣熙時等加判シテ執權ノ司ニ代テ天下ノ下知ヲ成ス

北條記云其時相模 正和四年八月十二日爲執權一貞顯修理權大夫 正和四年八月十二日爲連署正和三年三月十六日爲執權○按正和四年七月熙時卒するを以て其時これに代るなり但將軍執權次第に其時貞顯執權連署なるを七月十一日とす

將軍執權次第云貞顯武藏 正和四年七月十一日合判事被仰下 梅松論云高時の執權は正和五年より正中二年に至りて十ヶ年なり病によりて落髮せられしかは嘉暦元年より守時

應テ兩探題職ニ可被居御教書ヲ被成相模守ニ被移ケル○按貞永式目注に探題とは關東には兩所京師には六波羅をいふことあり本文にはゆる兩探題は即執權連署の兩職ないふ言妻鏡に兩御後見とある

按連署は執權を補助せる大任にて政務を助斷し理非を裁判すること長官と異ならされは執權連署を併せて兩執權兩執事又は兩後見兩探題ともいへり常には連判合判加判等の稱ありされとも連署の號を以て本義とすも

とこれらの稱謂あるは執權と共に政事を判斷し署判を公文に加ふるか故なり政所の下文又訴訟裁決の時下す所の公文又領色を充行はるる時の公文等皆しかり

凡て公文にはみつから花押を署して裁判の證とするか故に頓て花押を判とはいへり今の世印章を印判といひ花押を判判といふはも此意より出たり

抑此職は元仁中北條泰時執權をうけ給はりし時叔父時房連署たりしに始り元弘中茂時一門と共に滅亡せしに終る其間北條一家の輩かはるゝこれに補せられ或は執權に進む者あり當時畿に中絶の事ありといへども實にたまさかの例なり足利殿の代には更にこれを置ることなかりしかとも今の世に至りて加判衆連判衆などいふ稱あるにこゝにもとつきしなるへし吾妻鏡に貞永元年七月十日評定衆等の起請を述せしむる所に爲政道無私評定衆連署起請文其餘爲十一人云々相州武州爲理非決斷職一獨令加判署判於此起請給ありなるは評定衆の連署を見るべき爲にこゝに注せり

維貞を以て連署なり○按正和五年十月其時職を辭し高時を以て執權のこゝをのせざるはしはら

異本伯耆卷云一家ノ宿老其仁ニ當リケレハトテ金澤修理大夫貞顯ヲ執權ノ職ニ居テ政道ヲ司ルカ、リケル處ニ高時ノ舍弟左近大夫將監泰家サリトモト思ヒシニ貞顯ニ超ラレ述懐シテ急ニ出家ス貞顯モ是ヲ聞テ苦々布ヤ思ケン

是モ無程執權ヲ辭退シテ出家ス此上ハ力不レ及シテ同嘉暦四月廿四日赤橋相模守守時ト修理權大夫惟貞ト兩人ヲ撰出シテ兩人加判シテ守時ヲシハラク執權ノ職ニ居ラレケリ

北條記云守時相模 正中三年嘉暦 四月廿三日爲執權元弘三年五月十八日於山内一自害維貞修理大夫 正中三年四月廿四日爲連署

將軍執權次第云維貞修理大夫 嘉暦元年四月廿四日加判事被仰下二年九月七日死茂時右馬權頭 元德二年七月九日加判事被仰下評定始元弘三年五月廿二日於殿中一自害○按維貞卒しはらく中絶せり

太平記云金澤貞時 金澤武藏守貞將モ山内ノ合戰ニ相從フ兵八百餘人被打散我身モ七ヶ所マテ疵ヲ蒙テ相模入道ノ御坐ス東勝寺へ打歸リ給タリケレハ入道不レ斜感謝シテ

○執事 吾妻鏡云元仁元年八月一日乘燭之程相州時始出仕政所此國司并武州時被奉執事之後于今無此儀而奥州時禪室五旬中者所憚申誠可謂理去月又問也於今者不

及擇日次早可令參此間世上不靜人之所思多其疑一歎被行如然式者可爲落居基之由二品政類被勸仰云々

將軍執權次第云高時左馬權頭 正和五年七月十日任執事○按以は鎌倉殿の執權にいへるなり

伯耆卷云借長高館に折節爲在合家子郎等を召寄て若異儀を存る人々者可任心於長高は一筋に思切たる上は人の諫に不可拘君の御供申て船上山へ馳登て尋常なる

腹を可切と被申れは次男孫三郎基長高舍弟鬼五郎助高從弟小太郎信貞執事内河兵衛三郎入道眞信○眞は長年日於山内四坂本討死事 以下同心に申けるは君の御爲命を捨事塵芥よりも猶輕し云々○按これは名和長高の執事なり長高後長年に改む

又云弘義馬に打乘小波に清高か控たる所に馳着て申けるは隱岐の帝を奈和庄地頭村上又太郎長高か奉取て船上山へ楯籠候不時刻早寄給へと申處に加茂梶岡入道も馳來て弘義の仰に不違と云ければさらは打立はや

とて寄んとす執事田所か申けるは此御計を忽に存候是程の大事を思立候は手柄も謀もさる仁にて候らん何様所所にて待候はん無案内にては可_レ爲_レ難義一候曉に成て可_レ寄候と申けにもとて明るをそ待居たる○按これ佐々木清高の執事なり

太平記云新田義貞上野國住人新田小太郎義貞ト申ハ八幡太郎義家十七代ノ後胤源家嫡流ノ名家也或時執事船田入道義昌ヲ近ツケテ宣ヒケルハ古ヨリ源平兩家朝家ニ仕ヘテ平氏世ヲ亂ル時ハ源家はヲ鎮メ源氏上ヲ侵ス日ハ平家はヲ治ム云々

常樂記云正中元年六月十七日足利殿執事高右衛門入道妻他界○按右衛門入道名は師直といふ師直の父なり以上四條は鎌倉殿の時名の列にありし時なれば師直に異なることなし

執事補任次第云高武藏守師直建武三年補任至觀應二年ニ六ヶ年
梅松論云將軍母ハ御船下御所直ハ陸地ヲ御發向治定して則御手合あり御舟ニハ執事師直關東京都より供奉の宿老兩國の輩を船に乗せられて御發向あるへし

祇園執行日記云貞和六年七月廿八日鎌倉左馬頭殿直并執事高武州直發向濃州
太平記云師直此人天下ノ執事ニテ有ツル程ハ何ナル大

太平記云尾張左衛門佐都ニハ細川相模守敵ニナリシ後ハ執事ト云者ナクシテ毎事叶ハサリケル間誰ヲカ其職ニ置ヘキト評定アリケルカ此頃時ヲ得タル佐々木佐渡判官入道道譽カ婿タルニ依テ傍ノ人々皆追從ニヤ申ケン尾張大夫高入道ノ子息左衛門佐殿直ニ増タル人アラシト申ケレハ宰相中將殿義モ心中ニ異儀ナクシテ執事職ヲ内々此人ニ定タマヒニケリ父ノ大夫入道ハ元來常腹ノ三男治部大夫義將ヲ寵愛シテ先腹ノ兄二人ヲ世ニアラセテ見ントモ思ハサリケレハ左衛門佐執事職ニ居ラルヘキ由ヲ聞テ様々ノ非ヲ舉種々ノ答ヲ立テ此者曾テ其器用ニ非ル由ヲソ宰相中將殿ヘ申サレケル中將殿モ人ノ申ニ附安キ人ニテオハシケレハケニモ子ヲ見ルコトハ父ニシカスサラハ當腹ノ三男ヲ面ニ立テ幼稚ノ程ハ父ノ大夫入道ニ世務ヲ執行サスヘシト宣ヒケル左衛門佐是ヲ聞テ父ヲ恨ミケン世ヲウシトヤオモヒケン潜ニ出家シテイツトモナク迷出ニケリ
尊卑分脈云高經子義將右衛門督治部大輔此時改ニ執事ニ號ニ管領第一自_二貞治元_一至_二同五_一第二自_二康曆元_一至_二明德二_一第三自_二明德四_一至_二應永五_一
搦糞抄云施行管領ト申ハ近頃ノ事也本ハ執事ト云キ大御

名高家モ其エメル顔ヲ見テハ千鍾ノ祿萬戸ノ侯ヲ得タルカ如ク悦ヒ少シモ心ニアハヌ氣色ヲ見テハ薪ヲ負テ燒原ヲ過キ雷ヲ戴テ大江ヲ渡ルカ如ク恐レキ
又云天下時天下危カリシ時タニモ世ノ譏ヲモ不_レ知侈ヲ究メ欲ヲ恣ニセシ大家ノ氏族高上杉ノ黨類ナレハ能ナク藝ナクシテ亂階不次ノ賞ニ關リ例ニ非ス法ニ非スシテ警衛判斷ノ職ヲ司ル初ノ程コソ朝敵ノ名ヲ憚リテ毎事天慮ヲ仰キ申體ニテ有シカ今ハ天下只武德ニ歸シテ禁闕仙洞サヒカヘリ參仕拜趨ノ人モ無リケリ況ヤ朝廷ノ政武家ノ計ヒニ任テ有シカ二三家ノ台輔モ奉行頭人ノ前ニ媚ヲ成シ五門ノ曲阜モ執事侍所ノ邊ニ賄フ○按管領とは住所の職をいひ判斷とは執事の職をいふなり

執事補任次第云仁木左京大夫頼章觀應二年補任至延文三年一八ヶ年
太平記云直冬上山名父子七千六百餘騎前後十里ニ支ヘテ丹波國ヲ打通ルニ仁木左京大夫頼章當國ノ守護トシテ敵ヲ支ン爲ニ在國シタル上今ハ將軍ノ執事トシテ勢ヒ人ニ超タレハ丹波國ニテ定テ火ヲ散ス程ノ合戰五度モ十度モアランスラント覺エケルニ云々

執事補任次第云細川相模守清氏延文三年十二月補任至_二康安元年_一四ヶ年
所ノ御時高師直ノ朝臣久々此職ニアリシ執事ト號ス執事ノ施行ト云昔ハ高上杉ノ人々ノ役タリキ鹿苑院殿ノ御代ノ初ツ方斯波修理大夫高經法名始テ此職ヲ承給時再三固辭シ給シカハ只天下ヲ管領シテ御計候ヘト仰出サレシカハ領狀被_レ申四男治部大輔義將ヲ以テ此職ニ居給ト云云其ヨリ以降御一族ノ職ト成テ管領ト申也○按これより後將領と稱して執事といはざるならひさなりたれば義將以後補任せし輩をばすへて管領に載て發に洩せり但この近き程は猶執事と稱せしこともなきにあらす今其一二をとりて次に收む

太平記云島山入道島山ハ此十餘年左馬頭基ヲ妹婢ニ取テ築堀門戸ニ餘ルノミナラス執事ノ職ニ居シテ天下ヲ掌ニ握シカハ東八ヶ國ノ者共ノ命ニ替ラント昵ヒ近付ケルヲ我身ノ仁徳ト心得テ云々
又云和左衛門京都ヨリ武家ノ執事尾張大夫入道大勢ヲ討手ニ下スト聞エケレハ和田桶又尼崎西宮ノ陣ヲ引テ河内國ヘ歸リヌ
又云細河右馬頭自_二愛_一ニ細河右馬頭頼之其頃西國ノ成敗ヲ可テ諸事沙汰ノ途轍少シ先代貞永貞應ノ舊規ニ相似タリト聞エケル間則天下ノ管領職ニ令_レ居御幼稚ノ若君義ヲ可_レ奉_二輔佐_一ト群議同赴ニ定シカハ右馬頭頼之ヲ武藏守ニ補任シテ執事職ヲ司ル

花營三代記云禁制條々一年始諸人引出物一向可止事一所々雜掌可爲儉約一事一精好大口穢物小袖不可着金具較不可用事一中間以下輩金銀梅花皮等腰刀可止一事一同輩直垂之絹裏絹腰并烏帽子懸不可用事貞治六年十二月廿九日於執事里小路亭自三〇時一堅被守此法一畢

又云應安三年四月九日御社參六條新八幡宮帶刀姓名役人姓名次近習人々次佐々木四郎兵衛尉次土岐左馬助次攝津掃部頭次執事武州後陣侍所佐々木治部少輔

後愚昧記云應安二年四月廿日甲申日吉神輿入洛事中略又近江守護入道佐々木率家人等二營固内裏又執事細川武藏守勢少々分進内裏云々三年十二月十五日土岐大膳大夫入道下向尾州日來執事有可誅伐之間於京都稱可決雌雄不下向連々夜々騒動而土岐方大名等多與同之間執事不被誅伐之頗令退屈之間以無爲之篇下向云々按以上十七條は足利將軍家の執權なり但山道新

太平記云瓜生高越後守四方ノ口ニ堅ク兵士ヲ居テ人ヲ不通若ハ所用アリテ此道ヲ通ル人ハ師泰カ判形ヲ取テ通リケル瓜生判官サテハ此關ヲ謀テ通ラント思テ越後守ノ許ニ行テ云々關所ノ御札ヲ給リ候ヘト云ケレハ師

ヘカラス御分執事ノ職ニ居シテ毎事ヲ申沙汰シ給ヘト宜ラレケレハ小林良有テ申ケルハ云々只今度ノ合戦ニ一番ニ打死ヲ仕リ泉下ニ忠戦ヲ顯ハスヘキニテ候サアランニ取候テハ執事ノ職ノ事ハ他人ニ仰付ラレ候ヘシトテ目モ持アケス泪ニ咽ンテ罷立

應仁記云義就義就馳向テ政長ヲ追出シテコソ累年ノ鬱憤ヲ散スル所ナレ面々如何カ思ト云ケレハ遊佐モ譽田隅屋甲斐庄尤々ト申ケルコ、ニ政長ノ執事神保宗右衛門尉長誠聞ニ此由ニ此方ヨリ佐殿ノ御在所ヘ取カケ今度ノ恨ヲ可散所ニ屋形請取ニ勢遣アランコソ所招幸ナレ

鎌倉年中行事云奉公中管領ヘ書札之事誰ニテモ其時之執事充所ニテ謹上ト書裏可有之○按奉公中とは番衆をいふなり

梅花無盡藏云關東太田道灌扇子贊上杉藤谷修理大夫之執事傳二三千騎之士余東遊以前作滿路爲鳴盃有霞春遊已屬太平家一聲不用三郎鼓舞袖紅輕影自花扇面有之

東亂記云太田上杉家ノ出頭人評定ノ輩トモ太田入道扇谷ノ執事トシテ萬ツ心ニ任タル事ヲ猜ミ境ニ着テハ吹毛ノ谷ヲ爭テ讒言シケル事度々ナリ

三好成立記云此度宗三カ謀ニテ敵ヲ追靡ケ二度從阿波天下ヲ治執事職ニハ篠原彈正同肥前守三好下野守入道鈞

泰カ執事山口入道杉板ヲ札ニ作テ此人夫百五十可通ト書テ判ヲ居テソ出シケル

又云山名右衛門佐々木カ勢ヒルマニ綴ヲ傾ケテ袖ヲカサシ懸入ケルヲ見テ山名カ執事小林右京亮七百餘騎ニテ横合ニアフ

又云新田左兵衛少將ノ御局ヨリトテ佐殿ヘ御消息アリ披テ見給ヘハ過シ夜ニ御事ヲ惡キ様ナル夢ニ見進セテ候ツルヲ夢說ニ問テ候ヘハ重キ御憤ニテ候七日カ間ハ門ノ内ヲ不可有御出ト申候也御心得候ヘシトソ被申タリ

ケル佐殿是ヲ見給テ執事井彈正ヲ近付テ如何可有ト問給ヘハ井彈正凶ヲ聞テ慎マスト云事ヤ候ヘキ只今夜ノ御遊ヲハ可被止トコソ存候ヘトソ申ケル

又云紀州龍門島山カ執事遊佐勘解由左衛門是ヲ見テスハヤ敵ハ引ケルソ何クマテモ追懸テ打取レ者共トテ馳向フ頼印僧正繪詞云上根中務少輔入道禪助大將トシテ小田ヘ發向ノ處ニ小田ノ城ヲ没落シテ男體城ニ惠尊小田子息兩人執事信田以下若黨一族悉捕籠ル

明德記云山名陸奥守小林ヲ呼テ宣ケルハ去レハ先年南朝ヨリ事ノ次有シ時錦ノ御旗ヲ申給テ今ニ是ヲ頂戴ス今度此御旗ヲ差テ合戦ヲ致スヘシ若軍利有ハ爭フヘキ人アル

關三好日向守同民部少輔五人也

松原自休手録云坂井左衛門尉サヘ彈正忠ヘ心ヲ合セ廣忠ヘ難題ヲ云懸ル直談ニ可云事アリト人ヲ退云ケルハ其頃兩人ノ執事石川安藝守坂井雅樂ヲ生害サセ給ヘ左モナクハ可爲逆心云々○按以上十二條は大名家の執事なり

按執權執事共に政務を攝する者の稱謂にして元よりさばかりの輕重なしといへとも執權の稱は重きに限り執事の稱は輕き方にもわたりて聞ゆれば鎌倉の世には幕府の執政を執權と稱し諸家の老臣を執事といふこと大かたのならひにてありしなり

但此時もまれば執權を執事と稱しは運籌を合判加判運籌なきまひしに同じさて鎌倉の世足利家に移り等持院殿將軍の宣旨蒙られし後も舊きならひて執事ととなへたりしに鹿苑院殿の時に至り斯波氏政務を攝せしころより近親の一門として家人の如く執事と

よはれんことを惡みひたすら管領とのみ稱へしかは執事の稱はひとへに陪臣家務を行ふ者の職名となれり猶執權管領條を合考ふへし

武家名目抄第八册

職名部四之三

○管領

旅宿問答云守邦將軍御時元弘三年癸酉五月足利治部大輔
尊氏出世シテ北條ノ末孫平高時ヲ追伐シテ天下ヲ被召
仍二位尼時ヨリ守邦迄ハ關東モ京都モ兩奉行ナリ其時ノ
兩管領ハ相模守高時一人ハ右馬頭茂時ナリ元弘三年五月
十八日高時於山内自害シ茂時ハ廿二日於殿中自殺ス
此時東一變シテ成ニ御當家ノ代ニ當時なまること遠しといへども
鎌倉の執權を以て管領と稱せしこと必りなり
るなしとすハのち依てしはらへんに收む

上杉系圖云朝廷左近將監彈正少弼法名道禪與ニ師直ニ兩管
領於信州御原御陣ニ討死○按上杉家は足利殿の外戚たるを以て朝
太平記云者條 或時首楞嚴經ノ談義已ニ畢テ異國本朝ノ
物語ニ及ケルトキ吉侍者右兵衛督ニ向テ被申ケルハ古モ
今モ人ノ代ヲ保チ家ヲ失フ事ハ其内ノ執事管領ノ善惡ニ
ヨルコトニテ候今武藏守直越後守師カ振舞ニテハ世中靜
マリ得シトコソ覺テ候ヘ云々 ○按本書の記すこと管領は官
管領とす他の諸管
悉くこれに準ず

尊卑分脈云斯波義將左衛門佐右衛門督治部大輔此時改執
事號ニ管領
太平記云神木入尾張修理大夫經入道道朝ハ將軍御兄弟合戰
ノ時惠源禪門ノ方ニ屬シテ打負シカハ禪胸ヲ散セスシハ
ラクハ宮方ニ身ヲ寄ケルカ若將軍義詮朝臣ヨリ様々幣禮
ヲ盡シテシキリニ招請シ給ヒケル間亦御方ニ成テ三男治
部大輔義將ヲ面ニ立テ執事ノ職ニ居武家ノ成敗ヲソ意ニ
任ラレケル○按義將は高經の四男なり長兄家長建武中自殺
任ラレケルしたるが故に現在の次序を以て三男と書けるなり
又云入道道朝條 抑此管領職ト申スハ將軍家ニモ宗徒ノ一
族也ケレハ誰レカハ其職ヲ猜ム人モ可有又關東ノ盛ナ
リシ世ヲモ見給タリシ人ナレハ禮儀法度モサスカニ今ノ
人ノ様ニハアルマシケレハ是誠ニ武家ノ世ヲモ治メンス
ル人ヨト覺ケルニ諸人ノ心ニタカフ事ノミアリテ終ニ身
ヲ被レ失ケルモ只春日大明神ノ冥慮ナリト覺タリ諸人ノ
心ニ違ケル事ハ一ニハ近年日本國ノ地頭御家人ノ所領ニ
五十分一ノ武家役ヲ毎年懸ラレケルヲ此管領ノ時ニ二十
分一ニナル是天下ノ先例ニ非スト憤ヲ含ム所ナリ(中略)
懸ル處ニ柳營庭前ノ花紅紫ノ色ヲ交ヘテ其與類ナカリケ
レハ道朝種々ノ酒肴ヲ用意シテ貞治五年三月四日ヲ點シ
將軍ノ御所ニテ花山ノ遊宴アルヘシト催サレ殊更道譽ニ

又云左兵衛督 左兵衛督ハ師泰カ大勢ニテ上洛スル由聞給
テ此者カ心ヲトラテハ叶マシスカサハヤト被レ思ケレハ
飯尾修理進入道ヲ使ニテ武藏守カ行事高短才庸愚ノ事ア
ル間暫ク世務ノ務ヲ止ル所ナリ自今後ハ越後守ヲ以テ
管領ニ居セシムル者ナリ政所以下ノ沙汰毎事懸懸ニ沙汰
セラルヘシトソ委補セラレケル
又云京中ノ合戰ハ如此數日ニ及テ雖雄日々ニ替リ安
否今ニアリト見エケレ共時ノ管領仁木左京大夫頼章ハ一
度モ桂川ヨリ東ヘ打越サス
若狹國今當名領主次第云細川相模守清氏其時は天下
年九月廿七日ニ御下向有テ神宮寺ニ暫御座アリ 月廿七日に
御評定始着坐次第云延文三年十二月三日御坐西北坐管領
細川清氏朝臣佐渡判官入道々譽云々 ○按高師直上杉朝定等持
院殿の時に執事となりし
のち仁木頼章細川清氏相つきてこれに輔せらるること頗は大い管領とい
はすして執事と稱せり故に詳なることは彼條にゆつりてこゝには管領と
注せしもの一
二を抄せり

執事補任次第云斯波義將康安二年元 七月補任至貞治五
年五ヶ年康暦元年再任至明德二年 十三ヶ年明德四年
六月五日補任已上三个度至應永五年 六ヶ年此時有ニ管
領號

ソ相觸レケル道譽兼テハ參ルヘキヨシ領狀シタリケルカ
態引違ヘテ京中ノ道々ノ物ノ上手トモ一人モ殘ラス皆引
具シテ大原野ノ花ノ本ニ宴ヲ設ケ席ヲ粧テ世ニ類ナキ遊
ヲソシタリケル此遊洛中ノ口遊ト成テ管領ノ方ヘ聞エケ
レハ是ハ只我申沙汰スル將軍家ノ花下ノ會ヲカハケナル
遊哉ト欺ケル者也ト安カラヌコトニソ被レ思ケル乍去是
レハ心中ノ憤ニテ公儀ニ可レ出答ニモアラス哀道譽何事
ニテモ就ニ公事ニ犯レ法事アレカシ辛ク沙汰ヲイタサント
心ヲ付テ待レケル處ニ二十分一ノ武家役ヲ道譽兩年マテ
不ニ沙汰ニ間管領スハヤ究竟ノ罪科出來ヌト悦ヒテ道譽カ
近年給ハリタル攝州ノ守護職ヲ改メ同國ノ舊領多田莊ヲ
沒收シテ政所料所ニソ成タリケル依レ之道譽カ憤憤不レ安
如何ニモシテ此管領ヲ失ハヤト思テ諸大名ヲ語フニ六角
入道ハ書家ノ總領ナレハ無ニ子細ニ赤松ハ智也ナシカハ
可レ及ニ異議ニ此外ノ大名共モ大略ハ道譽ニ不レ諂ト云者ナ
カリケレハ事ニ觸テ此管領天下ノ世務ニ叶マシキ由ヲ將
軍家ヘソ讒シ申ケル
搦糞抄云施行 管領ト申スハ近頃ノ事也本ハ執事ト云キ大
御所ノ御時高師直ノ朝臣久ク此職ニアリシ執事ト號ス昔
ハ高上杉ノ人々ノ役タリキ近頃御一族ノ態ト成テヨリ以

太平記云神木入尾張修理大夫經入道道朝ハ將軍御兄弟合戰
ノ時惠源禪門ノ方ニ屬シテ打負シカハ禪胸ヲ散セスシハ
ラクハ宮方ニ身ヲ寄ケルカ若將軍義詮朝臣ヨリ様々幣禮
ヲ盡シテシキリニ招請シ給ヒケル間亦御方ニ成テ三男治
部大輔義將ヲ面ニ立テ執事ノ職ニ居武家ノ成敗ヲソ意ニ
任ラレケル○按義將は高經の四男なり長兄家長建武中自殺
任ラレケルしたるが故に現在の次序を以て三男と書けるなり
又云入道道朝條 抑此管領職ト申スハ將軍家ニモ宗徒ノ一
族也ケレハ誰レカハ其職ヲ猜ム人モ可有又關東ノ盛ナ
リシ世ヲモ見給タリシ人ナレハ禮儀法度モサスカニ今ノ
人ノ様ニハアルマシケレハ是誠ニ武家ノ世ヲモ治メンス
ル人ヨト覺ケルニ諸人ノ心ニタカフ事ノミアリテ終ニ身
ヲ被レ失ケルモ只春日大明神ノ冥慮ナリト覺タリ諸人ノ
心ニ違ケル事ハ一ニハ近年日本國ノ地頭御家人ノ所領ニ
五十分一ノ武家役ヲ毎年懸ラレケルヲ此管領ノ時ニ二十
分一ニナル是天下ノ先例ニ非スト憤ヲ含ム所ナリ(中略)
懸ル處ニ柳營庭前ノ花紅紫ノ色ヲ交ヘテ其與類ナカリケ
レハ道朝種々ノ酒肴ヲ用意シテ貞治五年三月四日ヲ點シ
將軍ノ御所ニテ花山ノ遊宴アルヘシト催サレ殊更道譽ニ

ハ高上杉ノ人々ノ役タリキ近頃御一族ノ態ト成テヨリ以

來管領ト申ス也鹿苑院殿ノ御代ノ初ツ方斯波修理大夫高
經法名道明始メテ此職ヲ承給フ時再三固辭シ給ヒシカハ
 只天下ヲ管領シテ御計候ヘト仰出サレシカハ領狀被レ申
 四男治部大輔義將ヲ以テ此職ニ居給ト云々法花寺法名
督ニ任シ正四位下ニ叙セラレ世ニ然ルニ三男左衛門佐氏頼ハ當
勘解由小路ノ金吾ト云コレナリ家ニ彼職ニ居スル事此家ノ理也トテ出家遁世シ給ヒケ
 ハト云爰ニ或人ノ云世ノ風聞ハ今ノ如クナレ共實ハ非
爾高經ニ五重アリ嫡子家長ハ陸奥守トシテ與州ニ下向
 次男左京大夫氏經ハ筑紫探題トシテ九州ニ下給三男左衛
 門佐氏頼四男治部大輔義將五男修理大夫義種也然兄二人
 无ニ在京間氏頼總領タルヘキ歟ト思給又京極道譽禪門野
 ニ取テモテナシケリ然共其器用有ル故ニ親父義將ヲ以テ
 管領トシ總領牒タル間述懐ノ義ヲ以テ遁世シ給カ外聞ヲ
 彼事ニ披露アリケルトナン途ニ江州山上ノ邊ヲ菩提寺ト
 シテ圓寂ト云フ其レヨリ以降御一族職ト成テ管領ト申ス
 也關東モ管領ト云共上杉一人此職也按義將實鹿苑院殿の時執事
るによりて其職を止められ鹿苑院殿の時に至り康曆中再び管領となれり高
經のこれを輔佐せしは實鹿苑院殿の代なり本誓鹿苑院殿の代に記せしは違事
なり但花營三代配太平記傳等分脈等を合せ考るに專管領と稱して執事とい
はさるとさなりしは義將再任以後の事と聞ゆされは本誓鹿苑院殿の代に記せし
管領と稱せしとを混し記せしと見えたり又後藤氏記永享五年の記及建内
記永享元年の記に執事と書るは堂上の記録なれば凡そに記せしなるべし
 執事補任次第云細川右馬頭頼之貞治六年十一月補任應安

元年四月十五日任武藏守同四年十月廿四日轉相摸守
 同五年辭之還任武州至康曆元年二十三年
太平記云細川右馬頭自愛ニ細川右馬頭頼之其頃西國ノ成敗
西國上洛條ヲ司テ敵ヲ亡ホシ人ヲナツケ諸事沙汰ノ途轍少シ先代貞
 永貞應ノ舊規ニ相似タリト聞エケル間則天下ノ管領職ニ
 令レ居御幼稚ノ若君ヲ可レ奉ニ輔佐ト群議同赴ニ定シカハ
 右馬頭頼之ヲ武藏守ニ輔任シテ執事職ヲ司ル
 花營三代記云應安元年四月十五日左馬頭殿御元服加冠細
 川右馬頭頼之子時管領今當日御雜掌管領御劔役細川右馬
 助御鏡御馬以下御太刀一振以吉見左京亮被下ニ管領
 云々三年四月九日御社參役人次近習人々中略次執事武
 州之後陣侍所佐々木治部少輔四年五月夜武州號令辭
 退管領職被赴西山西芳寺仍御所御出并赤松律師坊以
 下相向之間武州相自路次被歸畢
 空華日用工夫集云應安四年十二月十三日京師清藏主至
 即出去月廿二日書書曰當月十五日管領欲動春屋屋
 潛退雲居庵而隱居于丹後州云々先是或人告京之管
 領細川武州欲動春屋和尚和尚潛逃匿于丹波州或云
 丹後未審其處
 後恩味記云應安四年四月一日知惠光院遊騷動相摩之處土
 執事補任次第云島山左衛門佐基國應永五年八月五日補任
 至同十二年八個年按島山氏の管領となれ
 又云斯波治部大夫義淳應永十六年八月十日補任時十一
少祖父法花寺代又云細川右京大夫滿元應永十九年四月十日補任至同廿
孫殿列形云々八年七月廿九日上表十個年
 若狹國今富名領主次第云小濱着岸之鐵船之公事自内裏
 可レ有御直納之由依武家被仰出之當御管領細川右京
 大夫殿御教書應永十九年十二月三日被成一色殿了
 伊勢家記云應永廿八年七月廿九日庚寅管領細川右京大夫
 入道満道觀管領職上表納之
 建内記云正長元年十月十七日播州高家莊直務并都多村及
 建聖院五領賀茂莊加地子等事申狀今朝村ニ管領義淳乞賦
 之處今日雖爲賦日依御出管領被共之間延引
 又云永享元年七月十四日細川右京大夫持元持元故右京大夫入道
道觀男卅一歳前執事自去七日風病今日逝去按持元は管領に補せしに
前執事とあるは道觀をいふなり
 康富記云嘉吉二年八月四日壬辰先管領細川右京大夫入道
 持常喜今日逝去四十三歳也廿二日庚戌島山左衛門督入道
 管領職之出仕始也出立之儀衣袴也乘網代與立騎馬十人
左右五番也十月十三日庚子管領島山左衛門督入道雜訴之
黃直垂如常

佐國住人佐川假名實名之居住伴寺中而執事類爲四國管領
 之間仰可レ發向南方之由之處固辭之間爲誅伐之差遣
 執事被管軍勢并侍所軍勢之處不能討取之云々五年
 十月十三日高野莊事爲催促罷向管領許之所不達得
 又云康曆元年十二月二十日今夜世上騷動不知何事巷
 說云執事頼之朝臣也諸大名等可レ退治彼朝臣之結構等
 有之依之如此五月三日是彼稱云武家執事左衛門佐
義將○號玉堂故修領狀此間治定了
理大夫高經法師子
 花營三代記云康曆元年閏四月十四日以二階堂中務少輔
 入道并松田丹後守爲御使可下國之由就被仰武
 州類之即沒落同十六日自西宮乘船渡淡州之由有其間
 武州於京都出家云々廿八日左衛門佐義將可被爲管
 領之由被仰之按義將は再任なり凡實錄諸書の記す所これより
後は大かた管領とのみあり執事と稱せし事みえ
れは尊卑分脈瑣瑣なきに似たり
所そのよりとあるに似たり
 執事補任次第云武藏前司入道常久之明德二年四月八日再
 任法體任職之始也至同三年二個年再任三個度ナリ
 明德記云細川武藏入道常久四國ヨリ押渡テ備中國ヲ退治
 シテ翌年ニ上洛シ二度管領職ニ居シ權勢萬人ノ上ニ立テ
 天下悉歸伏ス政道ハ每事武州禪門ニ讓ルト被仰下シカ
 ハ理民安世ノ儀ヲ申沙汰シ給ケリ

職名部四之三
 七十五

賦自今日被出之飯尾六郎左衛門尉木澤左野等三人談
合書出目安之銘云々毎月六日可被出也今月二日
管領衰日也去七日者飯尾違例也昨日又例日也仍自明日
三今日連日可被出之由風聞廿七日甲寅管領山亭諸人
爲取難訴願群參賦事一日不過廿通於所望之仁者
及數百人之間每日作闕賦所望之訴人兼令取之充
人書給賦云々此四五日如此云々此
儀元來無事也雖爲訴人殊勝

執事補任次第云細川右京大夫勝元文安二年四月廿四日補
任同六年四月十四日武藏守同廿九日辭之京兆如元寶德
元年九月五日上表五十年四品依慈照院
殿御元服也享德元年十二月廿三
日再任至寛正五年二十三年

康富記云文安四年五月十七日戊申或仁語云加賀國守護職
事富樫次郎堂名龜丸并叔父安高兩人半國充可知行之由管
領之沙汰落居云々此間相論不止度々合戦也次郎者前管
領山山扶持也安高者當管領細川京兆扶持也六年三月十八
日先年北野社御遷宮時山山爲管領職有執奏長與宿禰
被補官務舉其年中管領職替時細川又爲管領被執
奏晨照宿禰還補事至今者也嗚呼正長之昔無官務吉凶
之沙汰者文安之今免兩職改易之憂思歟出於爾者飯
于爾之謂乎然間自管領以使節鎌津大輔
飯尾輝可被尋究之

執事補任次第云山左衛門督政長文明六年十二月十九日
再任依御方御所常徳院殿御元服之儀也同廿六日辭之至同
九年十二月又中絶九年十二月廿五日補任已上三
个度至同十
八年十一年

嵯川親元記云文明十五年五月廿七日東山殿御移徙(中略)
管領山左衛門督殿政
長河州に御在城雜掌土肥六郎右衛門尉御太刀行三千正
執事補任次第云細川右京大夫政元文明十八年七月廿日補
任就常徳院殿大將御拜賀之儀也被奉當日計則上表
也十九年丙午當年改
元長享八月再任依御吉書之儀也今日被行
御評定并御前御沙汰初則辭之其後中絶

舟岡記云京管領細川右京大夫政元ハ四十歳ノ頃マテ女人
禁制ニテ魔法飯繩ノ法アタクノ法ヲ行ヒサナカラ出家ノ
如ク山伏ノ如シ○按政元は職をうけたまはるこゝ一日にしてさ
ら其任にあたるを以て
世には管領といひしなり
鎌倉大草紙云憲實をも鎌倉へ歸參可有由京都よりも仰下
され成氏も再三御使ひありけれども終に不參伊豆國名
越國清寺にて出家となりかくれ居けるか其後船にて西國
へ赴周防國へ行脚あり爰に其頃中國の大内殿威勢を中國
九州までふるひける都には武衛細川山山の三家ともに末
になり其家いつれも二つに別れ合戦あり一人して天下の

由被申入傳奏又被申公方武家云々於上意者堅被
仰下之間及六七度管領雖被支申遂以還補令治定
又云寶德二年八月十六日丁亥山左衛門督入道管領職事
自去月上旬頃有上表也悉被開難訴了近日被訴訟
申之儀昨日無爲令落居仍今日始元爲管領職之御禮
被出仕申者也八月十日今度大御所無御子爲繼母分
不可有御輕服云々武家管領右京大夫勝元被存此
旨之故歟

長祿以來申次記云正月上様へ御禮事五ヶ日之内にて三度
十五日也管領一人は上様御所へ被參て御盃頂戴在之御酌
は上らうの御方
齊藤親基記云寛正六年十一月十日襄帳典侍御訪并綾綿綿
等代沙汰分管領長御訪五十八貫八百文上綿廿丈代四十貫
上綾十三丈代十八貫五百文○按政長は高
山尾親守なり
執事補任次第云細川勝元朝臣應仁二年補任已上三
个度至文明
五年六十年自文明五年五月至同六年十二月職中絶
○按管領職は代々連綿たりし
にこゝに至りて始て中絶せり
備前文明亂記云山名入道カ威勢肩ヲ並フル人ナシ時ニ大
樹ノ管領細川右京大夫勝元元來政長最負タルニ依テ勝元
分國ノ勢ヲ召上セ合戦ニ及フ事度々ナリ

御後見も難叶大内は大名にて威勢もありければ天下の
御後見を望一度都にのほり公方の執事と仰かれ政道を輔
佐せんことを願ひけれども三家の外は執事の例もなしか
なふまじとて多年望を空しく過しける時憲實入道此所へ
來りけるこそ幸ひなれと大に喜んで憲實入道を雲洞菴高
岩長棟菴主と稱し長門國深川大寧寺と申會下寺にうつし
おき馳走渴仰して則大内殿は憲實の養子になり上杉山内
の系圖を繼條の丸にまひ雀の紋を請て憲實を御父と
て崇敬限りなし其後大内殿都へ上り上杉公は關東管領の
家なればそれを繼て京都の執事職も子細あるまじきよし
申上ければ公方よりも禁中へ奏請ありければ尤其寄あり
と御免ありて大内左京大夫義興初めて上杉より請て京管
領に任せられ其後見望のことく叶ひける○按義興の兵權を
こゝなり執事補任次第にこの人を載せすおもふに正しく管領となりしに
はあつてたし請を執行せしこゝの管領のこゝくにありしなるへし將
軍家譜に管領代をのせたるもま
たその意を得たりといふへし

執事補任次第云右京大夫高國萬松院殿就御元服儀補任
應而辭之
細川家譜云高國民部少輔右京大夫管領職任武藏守三个
日則上表
御事始記云大永元年十一月廿八日細川右京大夫高國被

任管領職御使兩度伊勢守貞忠京兆へ參申初度は被任之旨被仰出候御使也二度目は御請御喜悅之旨御使也此後右京大夫被祇候御三盃參惣別は三個度可有出仕之旨候御禮御太刀持同御劔御拜領御使伊勢守裏打管領出仕同前裏打右京大夫出仕之供衆香川美作守裏打太刀秋庭備中守長鹽又四郎

光源院殿御元服記云天文十五丙午歲十二月十九日於坂本樹下宅公方左馬頭義藤朝臣御元服之次第(中略)加冠之役者先例於三職之中當管領之人令勤事處也雖然當時因無管領十一月中旬被仰付佐々木彈正少弼定頼

世鏡抄云管領職之事專祭禮敬寺塔諸家ヲ導萬民ヲ哀ミ二六時不寛心君ヲ恐可誅ヲ誅シ可罰ヲ罰シ以小理處可埋大非谷也可誅ヲ誅シ可罰ヲ罰スルヲ正直正路ノ成敗トハ云也雖無當忠先々ノ忠節ノ未類ナラハ所領安堵アルヘキナリ但シ重テ有罪ハ依時議可罰之又當代在忠先代无忠侍ヲハ只今ノ忠ニ合テ可扶持之也相構テ々々一毛一塵程モ無理無道ノ儀不可有能々守之ハ管領不守之ハ人非人ナリ

按管領といふ意はもと事をすへふさぬるいはれにて正

の管領長崎入道老耄に依て子息長崎左衛門尉高資に彼管領を申付云々と記し太平記長崎高重最期條にも前相摸守高時の管領に長崎入道開喜か嫡孫次郎高重と見えたり此長崎氏は世々北條家の家令にて陪臣の如き人なるをも猶管領といひしと見ゆ又今川了俊書札禮に我等かことは既九州の管領の時分に候云々といふことありこれは了俊九州探題たること云しなりこれらによりても一時の稱呼なりしをまゐりし足利殿の時に至りて執權高師直上杉朝定仁木頼章細川清氏などを希には管領といひしことの物に見えたるも猶全くの職名にあらずまかるに斯波義將執事となるに及びて其職掌はもとより諸家人の所役なるのみならず執事といふ名の大名一家の老臣と向きを厭ひて常に管領と稱する事となれりさるは斯波氏公方家一門の中にもすくれば連枝なればなりこれより後は斯波細川畠山の三家何れも公方家かはるく此職に補せられて他門の人覬覦の心を一門なり

の心を絶にいたれりしかりしより世に此三家を三職とも二管領ともいひ常に管領とのみとなへて執事といふ名は知人なきかことくなれり但當の辭には管領のさいひな義すそのよしはすて武家の成敗悉く此職にかかりて威權に執權の條にいハリ

して職名にもあらざりければ定まれるしなもなく一所の長官の稱にてはありしなりされは庭訓往來に問注所は永代沾券安堵年紀放券奴婢雜人券契和與狀負累證文等謀質糾明之管領寄人右筆奉行人等評判也奉行人得差符方與奪當參仁者成書下下國之時は下奉書而無音之時下使節召文調訴陳狀相對當所執事管領奉行人等○按一本には管領の上に年々可致問答披露沙汰就探題之異見所加下知也侍所は謀叛殺害山海兩賊強竊二盜放火及傷打擲蹂躪勾引路次狼籍圖諍喧嘩等也管領執事奉行人檢斷之と注せしは皆引付頭人をさして管領といへるものにて執權の人をいふにはあらす花營三代記に應安元年二月十九日禪律内談始行管領佐々木大夫判官入道とあるも禪律方引付頭人の事にて庭訓にはゆる管領に同じ又諏訪大明神書詞に嘉元の頃當國の御家人小坂孫三郎盛直おもきか有て硫黄か島へ流されたりけるか當社御社山に酒室の頭役人なり先規にまかせて免除あるへきよし愁き申けれども其ころ執權時村朝臣と越訴管領宗方確論のことありて神訴も空しかりけるとありこれまた前の二書なる管領に同じく越訴方引付頭人をいへるなり保曆問記には高時

天下に覆へりしを應仁亂の後には室町家もやうやく衰微し管領家も亦陵夷しければ終に其職にあたりても政務をふさぬるの力なくおのつから闕職となれり但幕府にて御元服拜賀等の大儀行はるるときは必管領の所役あることなれば白地に補せられて在職數日にすくることなし三職のかく衰へしより大内佐々木朝倉三好等のことき其筋ならぬ家々も時勢に乗て後見の事を承る族も出來たれど皆全く管領の號をゆるされざりしは其職を重するの至れるなるへし

○管領代

伊勢家記云應永卅二年正月一日壬申椀飯出仕有管領代出仕畠山彈正少弼持國管領一男也直垂大帷薄香直垂紋白扇六馬梁毛槽自大御所騎馬五番也新撰應仁記云武備家公方勢ハ尾張守ハ合手ナレハ不及申廣川ト云所ニ陣ヲ取リ總大將管領代細川讚岐守成之同兵部少輔勝久同淡路守成春同阿波守勝信同刑部少輔勝吉山名彈正忠是豐武田大膳大夫信賢弟治部少輔國信鶴飼望月關長野伊勢國司勢モ被二打立三好記云京公方義晴公御子御年今年十一歳ニテ御元服アリテ御家督御相續アルヘントラ天文十五年十一月中旬ニ

御沙汰アリ加冠ノ役ハ代々三管領ノ中當職ノ役ナレトモ今細川畠山亂中ニテムシユンノ最中ナリ若輩ナリ微力ナリ旁御請難申カルヘシ幸ニ佐々木彈正少弼定頼宿老ト云大名ナリ最其仁ニ相當レリ則管領代ニ比シ勤仕可申旨再三被仰付ケル定頼大ニ恐レ辭退被申レトモ頻ニ仰被付間且ハ家ノ面目ナリトテ御請ヲ申ケル

光源院殿御元服記云天文十五丙午歲御元服當日十二月十九日(中略)表江御出有テ有富有春御身固有之御次管領代定頼著坐衣裝大帷子折鳥帽子カケ緒紙ヨリ海老箱卷刀ヲサ、ル、也翌廿日御判始有之御物七通ヲ硯ノ蓋ニ入伊勢守貞孝持參シテ管領代定頼ニ渡サル

義秋公方記云佐々木定頼管領代ニ比シ御加冠ニ參ラル、其例トシテ義景ヲ管領代ニ比セラレ御加冠ノ役勤仕アマツサヘ左衛門督ニ任セラレ義景カ父教景初メテ御相伴衆ニ召加ラル、トイヘトモ御前伺候ハナクシテ只名ノミ計リナリ○按義景は越前朝倉より以上五條は京都將軍家の管領代なり

鎌倉年中行事云正月朔日ノ梳飯ハ管領ヨリ參遠侍ニハ高盛物ニアリ一ニハ波葉一ニハ緒ナリ置鳥置鯉アリ梳飯奉行直垂ニテ出仕是レハ右筆勤之管領代官ト兩人御中門ニ令伺候公方様出御奉侍御坐ハ妻戸ノ門也御酒式三

獻三獻メノ御酌御酒ヲ申時御一家ノ人銀切持參管領御代官手ヨリ直ニ被受取也其後弓征矢ヲ役人持參其次ニ杏行騰ヲ役人持參イタシ罷出後管領被官武州守護代子或孫或兄弟等御車寄ノ立砂ノ前ニ御馬御鞍ヲ置テ引立同引副ハ裸馬ナリ○按此一條は關東管領の代官なり

按管領代は常に設置る、つかさにあらざるへき儀式の時あるひは出軍の時など當職の闕職せるか又は障ることありて其役に從ひかたきをり假りに定めらるゝものなり大かた一門たる輩のつとむへき所役なれど天文永祿の際にいたりては古規すたれし故に佐々木朝倉等の輩もこのことをうけたまはりしなり正月元日柳營にて梳飯出仕の式は管領たる人故障なければみつから事に從ふならひなるか關東には代官をもて勤仕せしむるをつねの儀とせり其趣は鎌倉年中行事に見えたるかごとし

武家名目抄第九册

職名部四之四

○關東管領又稱鎌倉管領

太平記云足利殿東諸卿議奏有テ急足利宰相高氏卿ヲ討手ニ下サルヘキニ定リケリ則勅使ヲ以テ此由ヲ仰下サレケルハ相公勅使ニ對シテ申サレケルハ去ヌル元弘ノ亂ノ始高氏御方ニ參セシニ依テ天下ノ士卒皆官軍ニ屬シテ勝事ヲ一時ニ決シ候キ然ハ今一統ノ御代偏ニ高氏カ武功ト云ヘシ抑征夷將軍ノ任ハ代々源平ノ輩功ニ依テ其位ニ居スル例勝テ計フ可カラス此一事殊ニ朝ノ爲家ノ爲望ミ深キ所ナリ次ニハ亂ヲ鎮メ治ヲ致ス以謀士卒有テ功時節ニ賞ヲ行フニシクハナシ若莊進ヲ經テ軍勢ノ忠否ヲ奏聞セハ舉達道遠シテ忠戰ノ輩勇ヲ成ヘカラス然レハ暫東八箇國ノ管領ヲ許サレ直ニ軍勢ノ恩賞ヲ執行フ様ニ勅裁ヲ成下サレ夜ヲ日ニ繼テ罷下リテ朝敵ヲ退治仕ルヘキニテ候若此兩條勅許ヲ蒙スンハ關東征罰ノ事他人ニ仰附ラルヘク候ト申サレケル此兩條ハ天下治亂ノ端ナレバ君モ能々御思案アルヘカリケルヲ申請ル旨ニ任テ左右ナク勅許有ケ

ルコソ始終如何トハ覺エケレ但征夷將軍ノ事ハ關東靜謐ノ忠ニ依ヘシ東八箇國ノ管領ノ事ハ先子細有ヘカラストテ則倫旨ヲ成下サレケル是ノミナラス忝モ天子ノ御諱ノ字ヲ下サレテ高氏ト名ノラレケル高ノ字ヲ改メテ尊ノ字ニソ成サレケル

又云新田足利足利宰相尊氏卿ハ相摸次郎時行ヲ退治シテ東國總テ靜謐シヌレハ勅約ノ上ハ何ノ子細カ可有トテ未タ宣旨ヲモ下サレサルニ押テ足利征夷將軍ト申シケル東八箇國ノ管領ノ事ハ勅許有リシコトナレハトテ今度箱根相摸河ニテ合戰ノ時有忠輩ニ恩賞ヲ行ハル先立テ新田ノ一族共拜領シタル東國ノ所領共ヲ悉ク關所ニ成シテ給人ヲソ被付ケル

鎌倉大日記云延元丙子直義左馬自今年關東十ヶ國管領二丁斯波陸奥守家長爲管領被指置一處爲顯家於三杉本觀音寺○按直義は合見尊氏將軍の附託を以て關東を管領せしなり家長は又其代官にて鎌倉を守りし見ゆ

太平記云新田足利義貞朝臣是ヲ傳聞テ同奏狀ヲ上ケル其詞曰(中略)前亡余黨纒存揚蟻蟻忿之日尊氏申賜東八箇國管領不叙用以往勅裁養寇堅恩澤害民事利欲違勅停政之逆行無甚於焉云々諸卿重テ會議有テ此上ハ非疑處急ニ討手ヲ可被下トテ一宮中務卿親

王軍ヲ東國ノ御管領ニ成シ奉リ新田左兵衛督義貞ヲ大將
 軍ニ定テ國々ノ大名共ヲソ被レ添ケル○按此一條は足利殿關東
 を以て尊良親王を東國管領として征討せられしなりされども官軍利な
 くして降京ありければ東國はひたすら足利家の管領するこゝとなれり
 又云奥州上洛條 八月十九日ニ白川ノ關ヲ立テ下野國へ打越
 給フ鎌倉ノ管領足利左馬頭義詮此事ヲ聞給テ上杉民部大
 輔細川阿波守高和守其外武藏相摸ノ勢八萬餘騎ヲ相添
 テ利根川ニテ支ラル○按義詮當時關東にして全く東國の守護たりし
 てこれに代て關東に鎮す故に本文鎌倉管領の稱あり大輔に東國管領と記
 せるも亦これに同じ又按前に引し鎌倉大日記に見えたる新波家長の自書
 は此時の事なり此家長は義詮の
 補佐として鎌倉を守護せしなり
 又云道與勢勝道 大將左馬頭殿ハ其頃纔二十一歳也未思慮ア
 ルヘキ程ニテモオハセサリケルカツクツクト評定ヲ聞給
 テ抑是ハ面々ノ異見共覺エヌ事哉苟モ義詮東國ノ管領ト
 シテタマタマ鎌倉ニアリナカラ敵大勢ナレハトテ爰ニテ
 一軍モセサランハ後難道レカタクシテ敵ノ欺ン事尤當然
 也云々
 上杉系圖云憲藤修理亮中務少輔關東一方執權曆應元年三
 月十五日於信州討死○按憲藤は家長討死の後
 録倉大日記云康永壬義詮十月二日元服十三歳此時未三將
 軍一只號鎌倉殿○按本書記す所によれば義詮今年より全く關東を管
 領せしなり直義は京師にありて政務に暇なき故なる

基氏朝臣島山入道道誓ニ聞エテケリ
 又云○頃宮心 康安元年十一月十二日關東ヨリ飛脚到來シテ
 島山入道道誓舍弟尾張守御敵ニ成テ伊豆國ニ楯籠リ候云
 云其濫觴何事ソト尋ヌレハ去々年ノ冬島山入道南方退治
 ノ大將トシテ上洛セシ時東八ヶ國ノ大名小名數ヲ盡クシ
 テ上リケル此軍勢長途ニ疲レ數月ノ在陣ニクタクヒレテ暇
 ヲモ不レ乞拔々ニ大略本國ヘ下リケル遙ニ程經テ島山關
 東ニ下向シテ彼等カ一所懸命ノ所領共ヲ沒收シテ欺ケ共
 耳ニモ不ニ聞入一余ニ事興盛シケレハ宗徒ノ者共千余人神
 水ヲ吞テ所詮島山入道ヲ執權ニ被レ召仕一ハ毎事御成敗ニ
 隨マシキ由ヲ左馬頭殿基氏ヘソ訴申ケル○按此訴によりて道誓
 豆の條禪寺に籠る明年九月に至て基氏に
 攻められ陣を乞ひ終に流落して死たり
 又云○島山入道道誓 島山ハ此十余年左馬頭ヲ妹婿ニ取テ榮耀門
 戸ニ余ルノミナラス執事ノ職ニ居シテ天下ヲ掌ニ握シカ
 ハ東八箇國ノ者共ノ命ニ替ラント昵ヒ近付ケルヲ我身ノ
 仁徳ト心得テ云々
 喜連川判鑑云貞治二年六月上杉民部大輔憲顯再任ニ執事
 職ニ是ハ觀應頃惠源禪門ニ屬シ故將軍ノ御勅氣ヲ蒙ル其
 後先非ヲ悔ヒ鎌倉殿ヘ欺申ニ依テ御免ヲ蒙リ此度任ニ執
 事

上杉系圖云憲顯執權民部大輔越後守安房守康永元年四月
 晦日管領○按憲顯も亦義詮の補佐とし
 晦日管領て執權に補せられしと見ゆ
 喜連川判鑑云義詮貞和五年十月高師直師泰奢侈ニ依テ直
 義政務ヲ停止セラル師直カ計ラヒトシテ上京シテ政務ニ
 預ル基氏ニ鎌倉ノ管領ヲ讓ラル
 又云基氏貞和五年十月任關東管領職一上杉兵庫頭憲房男
 民部大輔憲顯高武藏守師直男播磨守師冬ヲ執事トス
 太平記云○師直自 高播磨守師冬ハ師直カ猶子ナリシヲ將軍ノ三
 男左馬頭殿ノ執事ニナシテ鎌倉ヘ下リシカハ上杉民部大
 輔顯ト相共ニ東國ノ管領ニテ勢八ヶ國ニ振ヘリ
 鎌倉大日記云貞和五己基氏御下向觀應頃關東兩管領高播
 磨守師冬十二月廿五日沒落鎌倉一翌年○按觀應二年等持院
 甲州栖澤城ニ被討了其後戶部顯一人管領 殿直義三不快の時憲
 顯は直義に繼いで戦や
 され信濃に遷れたり
 喜連川判鑑云文和二年七月島山阿波守國清鎌倉ノ任ニ執
 事
 太平記云○新田左兵衛佐
 義貞自書條 古へ新田義貞ニ忠功有シ族今島山入
 道道誓ニ恨ヲ含ム兵竊ニ音信ヲ通シ催促ニ可シ隨由ヲ申
 者多カリケレハ義貞今ハ身ヲ寄ル所多ク成テ上野武藏兩
 國ノ間ニ其勢漸萌セリ此事無レ程鎌倉ノ管領足利左馬頭

鎌倉大草紙云尊氏公之御母二位殿之御兄上杉兵庫入道憲
 房京四條合戰の時將軍の命に代り討死あり實子上杉修理
 亮憲藤曆應元年より關東の執權を仰付られ同年三月十五
 日信濃國にて討死其子幸松丸とて十四歳二男幸若九十二
 歳にてありしを郎等石川入道覺道供して鎌倉へ參ければ
 將軍大に感し兄を左馬助朝房と號し信濃越後を給はり
 弟を中務少輔朝宗と名付上總國を給はり應永二年三月
 關東の執事に被レ爲補し犬懸の先祖是なり憲房の二男民
 部大輔憲顯此人は尊氏公と錦小路殿御兄弟不和のとき錦
 小路殿の味方に參りし故將軍御惡み有けれども案者第一
 の人にて關東のかため此人にあらずんば叶ましと思召け
 れは被レ召出けり其上基氏公の御乳母子にて幼きより抱
 きそたて被レ申ける間旁々可レ然由にて越後安房兩國を下
 され鎌倉の御後見にて山の内殿の先祖是れなり
 頼印僧正繪詞云觀應二年ノ頃將軍ト錦小路殿ト不和ノ子
 細出來ス爰ニ上樞ノ民部大輔憲顯ヨシミヲ錦小路殿ニヨ
 セテ城ヲ信州ニカマヘ數萬騎ヲ率シテ武州將軍ノ陣ニ發
 向ス(中略)寶篋院殿驛敵ノ怨念ヲワスレテ忽ニ降參ノ御
 教書ヲナサル、ノミナラス越後ノ國守護職ノ御教書到來
 ノ間則城ヲ拂テ越後ヘ進發スカノ子息道護能道珍道合

方憲道命ニ任テ知行相違ナシ四代關東ノ管領相續ノ事併院主ノ加持力也

喜連川判鑑云基氏男氏滿貞治六年五月御家督上杉憲顯執事トシテ輔佐也應安元年九月十九日執事上杉憲顯死去次男兵部少輔能憲執事職ニ補セラル上杉中務少輔憲藤カ男彈正少弼朝房能憲ニ相並テ執事ト成ル是ヲ兩上杉ト號ス朝房ハ後ニ在京シテ死ス

上杉系圖云憲顯民部大輔關東執權憲顯弟顯藤中務少輔關東執權此名字始憲顯男能憲兵部少輔關東執權憲藤男朝房彈正少弼關東執權ニ補セラル上杉中務少輔憲藤カ男朝房ハ後ニ在京シテ死ス

花營三代記云慶安五年十二月廿日關東一方管領上杉兵部少輔入道憲上洛著三條西洞院太草太郎左衛門尉亭

後愚昧記云應安六年十一月廿五日今夜被行小除目參議源義滿勳功左近中將源義滿兼左近中將藤原冬實左馬頭源滿氏關東管領源基氏嫡息正四位下藤原宣方從四位下源義滿正五位下源滿氏自餘雜任略之○按滿氏は氏滿の嫡なりこの頃は氏滿をばらひさなりしかく書れしは堂上の記録なればなり

空華日用工夫集云永和二年五月九日兵部能問以臨終用心之一段(中略)又兵部上表辭管領職遺余令白府君余推讓少室相與入府啓管領上表之意府君不允

賴印僧正繪詞云大慶三ヶ條アリ一ニハ關東前ノ管領上樞刑部大輔入道道珍去三月八日自害ノ刻舎兄道合土岐善忠對治ノ大將トシテ數萬騎ヲ率シテ上洛ス暫伊豆ノ三島ニ

信宿ス爰ニ道合管領タルヘキ由仰ラル、問貴命ニヨリテ四月廿八日還參シテ出仕ス二ニハ道珍自害ニヨリテ關東野心ノ由洛中ヘ徹スル間武術義滿驚テ自筆ノ告文ヲ認テ瑞泉寺古天和尙ヲ使トシテ將軍ヘ陳謝申サル、處ニ五月二日將軍自筆ノ狀ヲモテ子細アルヘカラサル由返事アリ三ニハ京都管領未定ノ處ニ同日志波ノ治部大輔義將ヲモテ

其仁ニ補セラル都鄙ノ兩管領同時ニ定マリシカハ鼻害ノ義悉ク和睦ニ歸ス

鎌倉大日記云永德二壬正月十六日道合管領職上表六月廿七日亦還補

鎌倉大草紙云明德三年四月廿二日上杉房州道合重病に依て管領を辭し子息憲孝名代に被補○按憲孝元憲定に作る今鎌倉大日記喜連川判鑑に依て改じ喜連川判鑑云應永元年十月廿四日前管領上杉安房守憲方入道道合卒ス十二月三日上杉兵庫助憲孝病ニ依テ管領職ヲ上表ス

上杉系圖云憲藤男朝宗中務少輔上總國守護應永二年三月九日任管領一號一釋迦堂管領一十二年八月十二日辭

還就兵部宅一報以不允之意十日兵部重遊余與少室一懇問于辭職之切一府君會議乃曰管領職本系于京之樞府一事不致專免一當急白京府一宜寬處而忍待一之慰諭諄々余復報以白京之意一兵部顏色稍好如平日一人咸謂以脫重職一其病自除也十三日入管領第先與房州一和會白兵部辭職於京府事次入臥內一與兵部一談畢參白府君一於是辭職之事既定矣

喜連川判鑑云永和三年四月十七日上杉能憲死ス舍弟刑部少輔憲春執事職ニ補セラル

鎌倉大草紙云永和五年三月三日改元康曆元年に移る美濃國土岐大膳大夫御退治あり國々の御勢を召る、間關東より此時の管領上杉憲春の舍弟憲方入道道合を大將にて出勢す此時京都の勳團に付て鎌倉殿思召立事有已に憲春に御評定あり上杉大に驚き諫奉るといへども御承引なし思召定められたる御返答を承り上杉諫兼て我館山の内へ歸りて氏滿公へ御謀反叶ましき由を再三自筆に書置持佛堂へ入て則腹切たまひける法名道珍と號す鎌倉殿大さに驚き給ひ御後悔ありて同卯月晦日に三島まで打立ける上杉安房入道道合に管領を被仰付是は去三月十日に發向しけるを三島に滯留有て領狀を申上けるなり

鶴岡事書案云就當社座不冷以下御寄進事應永庚辰六月三日執行法印御房倫與南藏坊俊二人管領方へ被參當社御勤料所者或依爲遠國令不知行或雖爲近國依旱水兩損有名無實定候雖然於代々被定置御勤等上者無懈怠令勤仕候間大略致無供勤行候由被申之處ニ管領御返事趣は御寄進事尤可然候以目安可有御申如何様可付奉行人之旨御返事在之

旅宿問答云安房守憲定應永十二年八月十七日管領職玉リ同十九年壬辰十二月十八日卅八歳ニシテ死去次ニ右衛門佐氏憲爲管領職○按憲定は憲上杉系圖云朝宗男氏憲右衛門佐應永二十年三月任管領

在職三年同二十四年正月十日依謀反於雪下別當坊一討死法名禪秀○按憲禪朝宗氏憲三代管領に補せられしに氏憲敗死の後大懸の流斷紀して山内家のみ此職を攝する事なれり旅宿問答云其時ノ鎌倉殿ヲハ持氏將軍ト申ス上杉安房入道大死後後同名右衛門入道大懸ノ禪秀氏ニ管領職ヲ給リ四五十年ノ間政道ヲ改ム途ノ亂ル、事ヲ直處ニ良業口苦ク忠言耳逆ル習ナレハ連々背ニ上意コト既ニ多然ニ應

永廿二年四月末ッ方常陸國ノ住人越幡六郎無差罪科所帶ヲ被沒收一候程ニ禪秀再三不便之由被申候處ニ上意以之外御氣色ノ間禪秀被思ケルハ道ノ道爲コトヲ悦ビ

法ニ背コトヲ法トシテ不ニ諫申一居職テ有ニ何益ニ乎トテ
五月二日ニ上表被レ申畢上意連々御耳ニ逆ル機上意ヲ非
レ令レ輕乎ト思召間收ニ上表一畢同十八日ニ大至ノ嫡子安
房守憲基ニ被ニ仰付

鎌倉大草紙云應永廿四年五月安房守憲基はいかゞ思ひけ
ん同廿八日職を辭し三島へ下向ありしをやうく被ニ
仰下ければ五月廿四日鎌倉に返り参り六月卅日又管領
に成給ふ廿六年三月六日上杉安房守憲基病に依て管領を
辭し子息四郎憲實當職を承り安房守に任す

伊勢家記云應永卅一年十二月廿七日大御所御方貢馬に管
領へ成也管領私ニ島山左衛門督入道上杉四郎鎌倉管領也

鎌倉大草紙云鎌倉成氏は同姓持氏一亂の時永享十年十一
月永壽王と申五歳にて信濃へ落行大井越前守持光を頼居
たまひしか同十二年三月四日舎兄二人常陸中郡に蜂起し
同廿一日結城氏朝をたのみ籠城有りしかは持元か家臣二
人をつけて六歳の時結城の城に籠城す結城落城の時兄弟
三人生捕にして上りけるを舎兄二人は美濃國垂井の金輪
寺にて生害す永壽王殿は未だ東西不覺の躰なれば一命を
助美濃の守護土岐左京大夫に預けらる關東には土岐安房
守入道鎌倉に居住して政務をつかさとりける爰に越後の

を下され永壽王殿御元服ありて左馬頭成氏と申龍若丸は
上杉右京亮憲忠と號す○按鎌倉大日記には成氏免許を蒙り憲忠執
圖には文安四年九月憲忠執權と
なるよしを記せり共に疑ふべし

上杉系圖云憲忠右京亮文安四年九月廿五日今川播磨守
帶三輪旨下君享德三年十二月廿七日於鎌倉御所ニ爲ニ成
氏ニ被レ誅憲忠弟房顯爲顯思上杉四郎兵部少輔在鎌倉十
二年寛正七年文正二月十二日於武州五十子與成氏ニ對
陣中病死

御内書案云寛正五甲申職上表事如元可令存知之由先
度被ニ仰遣之處猶以辭退之旨被ニ聞食候太不可然任例
可有ニ輔佐也十月十六日上杉兵部少輔殿御判
又云文正元年丙戌房顯遺跡事息中一人領承候者尤可然
候猶被官人委細可申候也六月二日上樞民部大輔殿御判

○房顯は兵部少輔子時關東
執事房定は越後守護なり
上杉系圖云房顯男顯定四郎民部大輔右馬頭實越後上樞相
模守房定次男房顯無子息依之長尾景信迎之令顯定
繼家督子時應仁元年也此年任管領年十四移山内
初築平井城永正七年六月廿日爲長尾爲景對治越後發
向雖得勝利信州高梨峰起於椎屋討死顯定男顯實公
方源政四郎永正十二年早世○按平井城は
氏子上野にあり

職名部四之四

守護人上杉相模守房定關東の諸士と評議して九ヶ年の間
毎年上洛して捧訴狀基氏の雲孫永壽王丸を以關東の主
君として等持院殿の御遺命を守り京都の御かためたるへ
き由丹精を盡し歎き申ければ寶徳元年正月御沙汰ありて
永壽王殿をゆるし亡父持氏の跡をたまり同二月十九日
關東へ下らる是により上杉相模守は越後上野の境へ出
むかひ政事を輔佐し同顯定は上野國府中へ參還御の御支
度を馳走被レ申八月廿七日上州白井をたち鎌倉へ赴きた
まふ由聞えければ上杉安房守も御迎に可參と支度しけ
るかいやく御父持氏兄弟御兄三人まで憲實か爲にうせ
給ひし事定て恨めしく思召身のため子孫のため大事なり
とぞんし同廿六日の夜子息三人同道して伊豆國へ落行爰
にて出家して行方しらす成り給ふ永壽王殿は同九月九日
鎌倉へ還御御所御造營なり其間京都より御下知有て上杉
安房守行術を御尋候得共子息二人ともに出家となり西國
へ落行末子龍若丸幼少なりければ伊豆の山家に隠し置け
るを老臣とも漸々尋出京都へ此由申ければたとへは幼少
成とも老臣とも令補佐管領に任し山内扇谷の兩家の輩
相談にて京都の御下知をうけ政務を專に可致之由被ニ仰
下去開同年十一月晦日御所出來御移あり京より御一字

又云禪僧周清男憲房五郎右馬頭永正十二年任管領大永
五年四月十六日死憲房男憲廣美子實公方
源高基子四郎任管領○按
憲忠の子にて
憲實の兄なり

小田原記云上杉憲房ハ鉢形へ來テ人衆ヲ遣ハシ河越衆ニ
カヲ合江戸ノ城ヲ夜カケニシテ取返スヘシト打立處ニ同
國平居ノ陣ニテ重病ニ犯サレ大永五年四月十六日終ニハ
カナクナリタマフ誠ニ此人關東長者ニテ諸軍モヨクシタ
シミ奉リ政道モ私ナカリシニカク成タマフ云々扱アルヘ
キニアラサレハ京都へ御意ヲ請古河殿へ申彼家督憲政幼
稚ニシテ難叶トテ公方ノ御子ヲ一人養子ニシ奉リ憲廣
ト名ヲ付奉リ管領ト定テ長尾白倉大石小幡等ノ長者共彼
名代ニ關東ノ成敗ヲ司リテ諸家ヲ支配スル事モトノ如ク
分國ハ無爲ニソ治リケル

天正年代記云天文六丁酉上杉憲正定管領憲廣上總退
○按憲正は憲
政に作るべし
豆相記云鎌倉公方滅亡之後關東州國分散而雖如戰國七
雄上杉管奉管領職而爲三州國之長一號東管領一執柄異
他威名赫如矣(中略)天文二十辛亥年氏康氏政父子圍山
内則政居平井城攻敗則政出奔北越矣執則政長子龍若
丸以飯於修禪寺殺之矣永祿三甲申年北越長尾景虎

出張關東一矣尋其濫觴上杉管領則政平井城敗北之後
 出奔北越謙信入之矣則政以關東管領職兼上杉氏與
 景虎曰相人朝夕釋憾於弊邑長子死之民震動國幾亡吾
 身泥焉故今爲山葬矣寡人不忍其詞願再飯弊邑之地
 而比死者一酒之景虎與之終改長尾一號上杉管領景
 虎後改稱虎所稱義輝越永祿二己未年景虎以回文告
 東八州列將曰先年東公方滅亡之后兩上杉管奉管領職
 而八州盡附庸于上杉矣然伊豆北條侵襲於關東一恣嚴
 威故諸士舉從于北條實忘忠臣不事二君之語乎此
 故我起義兵而欲使則政再飯國不君君而却事雖臣
 等豈忍哉丞服景虎退北條之謀於諸將之急務也故今
 呈一紙回文云々依之而東八州諸士盡寒心于北條而
 飯景虎景虎喜而則率越師戒嚴而發向關東先伐沼
 田城取之亦拔厩橋城而圍名和城自同年十月迄
 翌歲二月宿年而攻之城々衆人衆東八州之士卒皆飯景
 虎景虎益大終越師伐於相小田原云々○按則政は他番憲政
 東亂記云景虎小田原永祿四年三月上杉景虎東八ヶ國ノ軍兵ヲ
 催シ其勢九萬六千餘騎ニテ小田原へ發向シ先年養父憲政
 氏康ニ打負上州ヲ落シ耻ヲモ雪カント披露ス後ニ聞エケ
 ルハ今度發向ハ氏康退治ノ爲ニアラス管領ニ成テハ代々
 國ヲ通り上洛シテ京公方光源院殿義輝公へ出仕ライタシ
 關東管領ノ御教書ヲ賜リ朱柄ノ唐笠同御紋ノユタナヲ御
 免アリ御諱ノ一字ヲ被下輝虎ト改名シテアシロコシ狀
 ノ裏書ヲ御免アリ越後へコソハ飯リタマフ
 越後國彌彦社所藏上杉輝虎願文云輝虎守筋目不致非
 分一事一關東江年々成働致辭謹事も上杉憲政東官領與
 奪依之右動及其稼事○按據信天正六年三月に卒して同十年
 鎌倉年中行事云管領子息兄弟出仕之時被遣御馬ニハ
 御使御馬牽事先規ヨリ無之被座職時之禮儀也管領職
 ハ公方様ノ御代官ナル故也職上表之時モ先管領ト申問禮
 儀同前也
 又云公方様へ管領外様出仕之時御盃御禮ナシ目禮モ無
 ヲ之御座ニ墨重ナレトモ管領ニ御對面之時御下アツテ御
 對面アリ外様奉公同前
 長祿以來申次記云正月十日白鳥一進上候判門田毎年今日開
鎌倉式日此分也○按本書判
門田をよみてはれたす
 土岐家聞書云管領職は昔は賞祓にはあらず然に高師直師
 泰等謀叛の後御一族管領職にならるゝに依て其以來賞祓
 の職となり近代侍所を賞祓とせず又關東の管領は今も
 上杉なり是は格別なり上職に准せず

若宮へ拜賀アル事ナレハ鎌倉へ參詣シ管領ノ悅ヲモ遂ン
 ト思ヘトモ彼所小田原モ無下ニ程近シ定テ勢ヲ出シテ合
 戰ニ及ハ、拜賀モ叶フマシ先小田原退治ト披露シテ人衆
 ヲ集メ小田原へ押寄對陣シ人衆ヲ出サハ合戰スヘシ敵籠
 城アラハ若宮へ參詣ヲ遂ヘシト内々密談シテ小田原へ押
 寄ケル云々大屋形氏康老中ヲメサレ仰ケルハ抑今度景虎
 發向ノ事ニ付テ各々手合ノ沙汰最ナリ然レトモ彼景虎天
 性健ナル若モノニテ就中憲政ニユツラレテ管領ト名ヲ
 付諸侍ヲ下ニ付ヌレハカレラカ見ル處ヲ思ヒ一入ツヨミ
 ヲ出スヘシ先籠城ノ用意ヲシテ敵ヲ外ニナシ馬ノ足ヲツ
 カラカセヨ矢種ヲ盡サセヨ此方ヨリ人衆ヲ不可出ト仰
 ケル(中略)案ノ如ク未タ五十个日ニモ及ハサルニ小田原
 表ヲ引テ鎌倉へ參詣シ度々ノ前例ヲ尋テ拜賀儀式ヲ追ハ
 レケル此拜賀ト申ハ頼朝御治承四年十月當宮ヲ建立アリ
 シ後代々ノ公方管領京ノ内裏ハ程遠ケレハ此宮へ參内ニ
 コトヨセテ拜賀アル當社ノ御本地ハ應神天皇トテ仁王十
 五代ノ帝ノ御廟ナレハ則禁裏仙洞モ同御事ナレハ也今度
 モ前例ノ如ク山内殿ニカリヤヲ建ソレヨリ大石長尾倉
 小幡等ヲ近侍ニ乗ツレテ宮寺へ參リ拜賀ヲ遂諸院家衆ニ
 所領ヲイタシ悅ノ酒モリヲシテ飯リケル其後其年五月北
 東亂記云武田一門去程ニ信長公子息信忠卿ト相談シテ今度
 討取處ノ國郡ヲ皆悉ク大名トモニ充行上野國ヲハ瀧川左
 近將監一益ニ給ル是ハ關東ノ管領トシテ以來連々小田原
 ヲモ可亡トノ内意ト見エケル
 又云瀧川合去程ニ瀧川左近將監一益ハ上州三ノ輪ノ城ニ
 居住シテ追捕使ニ成テ東國ヲ管領ス
 織田家譜云天正十年二月廿三日信長召瀧川左近將監一
 益賜上州一國并信州之佐久小縣二郡且告之曰以汝
 爲關東管領職自是以東八州到奥州征伐賊獄可取
 汝處分
 松原自休手錄云瀧川左近將監賜關東管領職ニ在上州厩
 橋折節近邊ノ諸將來話ス殘置長島杉山小介來テ告信
 長聽則對客談之各變舊約更無恨可返人質云々
 諸將ノ曰ク信長被宥對敵罪賜或本領或新恩今以不
 可ノ有疎意云々然處ニ從小田原氏直率三萬餘騎出
 張ス瀧川以三千戰之二ノ軍打負引入厩橋六月廿八
 日敗武藏野諸將ノ曰ク爰ニ有居城可觸忠信有
 上國可送屆云々瀧川爲吊軍請可上依之送眞田
 眞田出向送木曾從之飯長島
 按はしめ等持院殿關東の管領に補せられしは朝廷の命

する所にして武家の設けし職にあらずして幾程なく等持院殿これを弟直義に傳へ直義これを寶篋院殿に譲り寶篋院殿又弟基氏にゆつられしはみなこれ武家の私にして公家のしらしめす所にあらず然れども武家終に國命を執を以て基氏の子孫相續て關東の管領たることを得たり但當時其執事たるものまればは管領とよはれたりしかもとこれ世俗の語話に稱する所なれば執事の號を以て本義とせり然るに京都の執事其職號を嫌ひて專管領と稱するに及て關東の執事も亦常に管領の號を用ふ爰に於て君臣その稱の同じきを厭ひ基氏の子孫みつから關東管領の號を指て悉く京都の制に效ひ或は御所と稱し又は公方といふ俗間には關東將軍と稱するものあるに至る此故に管領の號は全く陪臣執事の稱となり始め等持院殿關東を管領せられしより基氏の代にいたるまでは斯波畠山高上杉など一門家人の別なく此職に擧用せられしか貞治中上杉憲顯再ひこれに補任せしより已後他姓の人又此職に拜することなく上杉一家の世職となれり上杉氏に管領となるべき家兩流あり一を山内といふ憲顯の子孫なり一を大懸といふ憲顯の兄憲藤の後なり山内大懸共に鎌倉の地名なり各此兩家互に此職に

補せられたりしに應永中憲藤の孫氏憲兵を起して一門の殄滅を致せしより山内家ひとり管領の職を襲ぬることとなりぬ世に或は山内福谷兩家を以て兩管領といへるはひかこなりこれ全く兩上杉を稱せしを譲れるなり福谷家にては前後これに補せ敷世の後山内憲政家運衰ふるに及て其臣長尾輝虎を養子としてこれを傳へしか輝虎卒して後上杉氏遂に其職を失へり織田信長更に瀧川一益を此職に居らしむといへとも當時戰國にして右の管領の治術を施すに及はず信長薨して一益本國に歸るの後關東管領の職終に置事なしといふ

武家名目抄第十册

職名部五上

○評定衆

關東評定傳云嘉祿元年乙酉七月二位家基逝以後後始評定執權相摸守平朝臣時房武藏守平朝臣泰時評定衆助教中原師員駿河守三平義村隱岐守藤原行村法師法名出羽守藤原家長民部大夫野三善康俊民部大夫藤原行盛民部大夫三善倫重左衛門尉藤原基綱支善允太三善康連相摸大掾藤原業時左兵衛尉藤原長定法師淨圓吾妻鏡云嘉祿元年五月廿二日甲寅上野介藤原朝光加評定衆

又云延應元年三月九日癸酉西政所造畢之間今日有吉書始儀前武州布衣以參給評定衆前攝津守師員藏人大夫入道西阿以下參上廿九日己亥匠作前武州著評定所給評定衆等參進宮根山別當與實與三知藏三郎法橋良賢遂對決

又云建長六年十二月廿三日辛卯評定衆并可然大名外之輩者云出仕云私出行不可具騎馬共人凡非時儀者僮僕之員可減定之旨普司相觸之由所被仰付侍

職名部五上

所司等也

又云文永三年三月六日己亥諸人訴論事被止引付沙汰問註所召整訴陳狀可勘申是非也前々被記申詞之間爲被賦九人評定衆所被結番也御評定日々奏事結番次第一番三日十三日尾張入道見西越前前司時廣宮内權大輔時秀伊賀入道家道圓和泉入道行空方二番日廿六日越後守實時中務權大輔教時出羽入道道空行信濃判官入道行一行對馬前司倫長三番日廿十日秋田城介泰盛縫殿頭師連少卿入道心運伊勢入道行願一番衆一日十二番衆一日廿三番衆一日廿五日政所問註所兩執事行實每日可令參也且自問註所每日可差進文士二人也按本文には被賦九人評定衆云々さあ毎に三人は其主職にて自餘は佐職につけられしなるへし

太田康有記云建治三年六月十七日爲諏訪左衛門入道奉被仰云陸奥左近大夫將監宗所被加評定衆也可書進御教書云々

新式目云政務事正應六五任先例可被召評定引付衆并奉行人等起請文且不可取賄賂之由可被召奉行人誓狀於無足之輩者可御恩至廉直之仁可被賞

既歟

太平記云長崎新左衛門尉見條持明院殿ヨリ内々關東へ御使ヲ下サレ

當今御謀叛ノ企近日事已ニ急ナリ天下ノ亂近ニ有ヘシト
仰ラレタリケレハ相摸入道ケニモト驚テ宗徒ノ一門并頭
人評定衆ヲ集テ此事如何有ヘキト各所存ヲ問ル○按已上八
條は鎌倉將
軍家所
司ナリ
庭訓往來云引付問註所上裁判判之勢異見議定之趣評定衆
以下可注ニ給之

梅松論云或時兩御所御會合在テ師直并故評定衆を餘多め
して御沙汰規式少々定められける○按これ建武式目のことない
本書を考ふるに卷尾に題せし人数は前長部權是圓(俗名道昭)眞惠志憲法
印大幸少貳明石民部大夫太田七郎左衛門尉布施三郎入道以上八人なり
少貳以下は鎌倉殿の時
より評定衆の家なり

太平記云比叡山將軍左兵衛督を奉始高上杉頭人評定衆ニ
至ルマテサテハ山門ナクテ天下ヲ治ル事有マシカリケリ
ト信仰シテ武家増々寄進ノ地ヲソ被副ケル

御評定着座次第云評定衆列ニ執權上ニ例文和三年五月廿日
評定始也今日評定當參石橋左衛門入道心勝仁木左京大夫
賴章朝臣佐渡判官入道道譽土岐大膳大夫賴康二階堂大藏
少輔政元問註所美作守顯行披露奉行也○披露是執事心勝道
譽等五人は評定衆なり
又云永和四年正月十一日於出世評定衆一者盃飯期ノ子出
云々

花營三代記云應安五年正月十一日齋藤右衛門入道被召
なれりさればたまかには評定衆を引付衆と同しく奉行さいふことあ
りしなり太平記に奉行頭人評定衆と次期してかける所もあるは奉行さい
ふ事すへてにかかりし一證なりされなへては引付衆と寄人さにかき
りていふなよしとすへしさてこの頭人には評定衆の内にも大かた上首の
輩を以て兼輔せらるるならひなりきこれ全く後輩をして上首の人を指押
させしことなるへし然れども本文のこころ座席の論出さしを見れば位
階の下なるものもたまかには頭人
になされしことありしと見えたり

又云寶徳元年十一月九日甲寅武家御評定始也管領畠山左
衛門督入道出仕也頭人問註所加賀攝津掃部頭二階堂波多
野飯尾肥前入道大和入道齋藤加賀入道飯尾備中守新加
同
美濃守等十人皆評定衆也此外役人飯尾左衛門大夫布施十
郎等也

文安年中御番帳云評定衆攝津波多野二階堂町野
伊勢貞滿筆記云評定衆事外様衆と同前惣別評定衆と申は
攝津二階堂波多野町野等也何も外様衆の分也
年中恒例記云十月亥日コトニ御殿重拜領之云々御紋之
御供衆同御供衆(中畧)かみかみ御部屋衆攝津守以下評定
衆右切薄也上包在之名書有之

長祿以來申次記云正月八日評定衆波多野二階堂町野此三
人一人充懸御目也攝津も雖爲評定衆一朔日も參勤之
間今日は不出仕候
又云御方御所様申次初而被仰付二人數事文明九年十一月
卅日大館治部少輔尙氏御供衆數氏在兵庫頭正少左衛門左
伊與守等於江州鈞御被召加評定衆

加評定衆訖三月十二日布施彈正大夫入道可爲評定衆
之山被仰出之

鹿苑院殿御元服記云應安五年十一月廿二日御判始御祝次
第御引出物御劍御馬管領進上之次御評定衆俗達直垂
法體衣如也
伊勢家記云應永卅年正月十一日御評定有管領出仕也衣袴
攝津左馬助滿親波多野因幡入道元昌問註所刑部少輔康雄
以下三人評定衆也

康富記云嘉吉二年八月廿八日丙辰或語云飯尾肥前入道永
祥者評定衆也去廿二日御評定始日與頭人波多野出雲守
座席令相論也爲評定衆上者任位階上首可著頭人
出頭上之由肥前申之出雲申云雖爲衆爲奉行人之間
不可著頭人上候間可著肥前上之由出雲守慕申
之於去廿二日者出雲守著肥前上云々今日事兩方及
對論之所詮任位階上首爲衆者可著頭人上之條有支
證之間諸奉行一味同心申此子細候仍出雲守俄一級事
被執申今日著肥前入道上○按常に奉行人といへは引付衆
間なれども奉行と云は君命をうけたまはりて事を行ふの意なるか故に
所職の上下等級にかはらて政所の有司たる輩の姓名の如くかけていひ
しことあり本文に雖爲評定衆爲奉行人云々さかける類これなりか
くならぬ故に初鎌倉の世にいた引付衆を置さりしは評定衆は執權
にさしつきて政務を裁判せる重職なれば衆中いづれも優劣なりし引
付を置るに及びて評定衆の内をも其頭人に兼補せられしなり同職掌
さは云ながら頭人もしくは政所問註所の執事を帯せざるなへての評定衆
は其勢一きはくたれるさまになりておのづから頭人の指押に從ふこと
云々

長享元年常徳院殿江州御勅座在陣衆著到云評定衆二階堂
山城判官江波波多野因幡守藤原町野加賀守中條大夫判官藤結
城加賀守藤原

光源院殿御元服記云天文十五年十二月廿日若君義藤朝臣
征夷大將軍從四位下禁色昇殿宣下有之同日新將軍御評
定始御判始等有之新將軍出御著座元造朝臣サンフヲ持
參御座右ノ方ニ被置人數定額朝臣二階堂中務大輔有泰
朝臣町野左近大夫將監康定松田丹後守晴秀今度始而被
召加處也元
造朝臣也座席之次第新將軍御右方定額朝臣著座元造朝臣
向定額而座少下也定額之下有泰座有泰下晴秀座元造朝
臣之下康定座ス(中略)竟連出テ三社ノ事披露發言晴秀各
合點ノ氣色有テ竟連退出次ニ評定衆下臈ヨリ立テ皆退出
定額朝臣モ又退出其後新將軍又御出座定額朝臣以下評定
衆如前各著座各令披露云云評定衆又下臈ヨリ退出○按
は評定衆の上首攝津氏なり梅松論以下
に至りて十六條は京都將軍家の所司なり

清原氏系圖云將繁本名頼將左將監關東評定衆
上杉系圖云氏定彈正少弼評定衆應永廿三年十月八日於
藤澤道場自害

鎌倉年中行事云正月朔日公方様出御御酒參御マイリノ肴

ニテ三献御一家并評定衆召サレ此御祝ニハ宿老中皆御荷用ヲ被レ申
 又云管領對ニ奉公中ニ禮義并書札等之事公方様御役又ハ御一家評定衆ヲハ先座へ請テ其後被レ出酒一献之時ハ依ニ時宜ニ先被レ始時モアリ(中略)引付衆中以下管領先被レ出後有ニ御對面○按以上四條は鎌倉公方家の所司なり
 南都一乘院所藏文龜四年記云當時京兆評定衆上野治部少輔秋庭備中守安富又三郎藥師寺與一郎同與次内後備前守寺町太郎左衛門同石見守○按此一條は京都管領細川家の評定衆なり
 鎌倉大草紙云景春我こそ家務職を可レ承所に忠景に被レ越逆心忽に思ひ立顯定を可レ亡企密に存知立縁者たるの間太田道灌に此事を相談す道灌是を聞テ一大事出来ぬと思ひければ顯定の前に來りて申けるは彼か心を相靜て御陣中無爲の御謀可レ然候彼か家來被官人に狼藉の族逐日令ニ増倍ニ候間定而近日御難儀不可レ遠之由申といへとも山内を始て評定人とも更に何れも承引せず
 東亂記云太田逸政ニハ忠臣多ク勞政ニハ亂人多キナラヒナレハ上杉家ノ出頭人評定ノ輩トモ太田の入道扇谷の執事トシテヨロツ心ニ任セタル事ヲ猜ミ境ニ著テハ吹毛ノ咎ヲ爭テ讒言シケル事度々ナリ○按已上二條は關東管領上杉家の評定人なり

三善の諸流攝津太田町野飯尾相庭の類なり并二階堂齋藤波多野等の族其任に堪たる者をもて此職に充られ更に公方の一門吉良石橋山名一色等の諸家に命して評定の席に臨み中原三善等の上にして政務を議定しかはるく引付頭人の職を攝せしむ但當時の制度にて一門の輩は引付を経ずして直に評定衆に補するか故に他姓の諸家をは出世評定衆と稱して一等を降せりさて一家の輩も初の程は諸家と同しく評定衆と稱せしか中頃より頭人とのみいひて評定衆とはよはさる事と成けれと其職掌に至りては即評定衆のつかさどる所なり思ふに一家の人は右筆の列と其稱を同しうすることを厭ひて頭人とのみ稱するならひもいてきしとみえたり三善領の家にて執事といふ名をふこさな其外土岐佐々木等の類も等持院殿寶篋院殿の頃是一家の人と共に評定の席に列し引付頭人をも帶せしかは應仁の亂後にも引付の番文には頭人の列に載られたりけれとこの輩も亦常に評定衆といふことなしさるは何れの武門の名家にして執事の職を名譽とせざるなどの故を以て一家と同しく其稱を停めし成へし尚引人の條を合伊勢守も亦鹿苑院殿の頃より評定の列に加はり頭人をも帶する家となりしかと康曆中政所執事を攝

慶長年録云慶長十八年七月九日御代官を仕大久保十兵衛と申勘定方才覺有之石見伊豆佐渡等之金山奉行被レ仰付ニ國奉行にて評定衆のなみに加判仕云々○按ここに評定衆なり
 按評定衆は執權と共に政所の席に列なり政務を評議し萬事を進退せる重職なり或は政所執事問註所執事等を攝し又は引付頭人を帶す公家の官職に准するに納言以上のつかさに配しては尤文官の冠たり此故に北條家の一門もしくは大江清原中原三善等の諸氏及二階堂齋藤などの如き文筆に堪たる諸士此職を世々にせり又三浦千葉安達結城宇都宮小田佐々木等のこと武門の名家もまゝ補せらるる事あり此外にも補せられし輩あり評定衆に依りて補せらるる事あり
 此れはもと文筆の家にあらずれば父子其職を襲ねし事は多からず三浦千葉等の諸家は文筆の家にあらずるのみならず一門も廣く所領も多き輩なれば北條家にいまることありて政務の職をすへて其人數十五六人にこえしこと稀なり建長年中始めて引付衆を置るゝに及びて評定衆たるものゝ子弟先引付衆となり後この衆に轉することゝなりぬ世家の輩といへとも引付を経ずして直に補せらるるものあるは選定の例にて尋常の事にあらず足利家の時にいたりても大かた其准據なりければ中原

せしより其職を世々にせしかは常には評定衆とはいはすしてひたすら政所とのみ稱せりことをもて評定衆といへるは攝津二階堂波多野町野等の族に限れる如くなりけれと原より定格とせられしならねは猶引付衆よりも轉補したまはるかに其家ならぬ人も補任せられし事なきに非ず應仁亂後は一家の輩及土岐佐々木等の諸家も多くは在國定衆の家と思ふ如くなり此頃は評定衆をさして宿老ともいふこれ全く長老宿徳の所職なればなりこの衆大永天文の比まではたしかに補任せられしか永祿元龜の際に至りてはその稱謂さへ聞えずなれり後幾はくもなく織田氏勃興して足利家職を失ふに及へりこれをもて其勢の自然なるをしるへし天文の頃まで評定衆の存せしこと本文に引たる光源院殿御元服記にて明なり永祿の頃には其職絶たるは永祿六年
 諸役附義昭將軍諸役附共ニ奉行衆のみありて評定衆のなきを以てしるへしさて永祿の諸役附には攝津掃部頭晴門波多野五郎は外衆の内筋なり義昭將軍の諸役附には二階堂山城守晴泰波多野五郎通秀共に奉行衆の内に入りて攝津晴門は外衆の内に入りて依りておもへば天文までは評定衆を置たりしに永祿に至りては其家存すといへとも職掌の断絶せしこと鎌倉の足利家にも評定衆引付衆を置たりしは何事も京都の制に擬せられし故なり

職名部 五上

○式評定衆
 建武年間記云奥州式評定衆冷泉源少將房式部少輔房内藏權頭入道元結城上野入道宗信濃入道行三河前司親山城左衛

門大夫行伊達左近藏人引付一番信濃入道下六人二番三河前司下六人三番山城左衛門大夫伊達左近藏人下五人諸奉行姓名政所執行山城左衛門大夫評定奉行信濃入道寺社奉行姓名下安塔奉行侍所○按本文に見ゆる所の諸有司は建武一統の時源頼家親同安塔奉行侍所守將軍として陸奥に鎮せし時鎌倉幕府の制にならひて設けし所の諸職にして奥羽の成敗をつかさどりし輩なり花營二代記云應安五年正月十一日齋藤右衛門入道被_レ召加評定衆一訖三月四日町野越前入道可_レ爲_二式評定衆一之由被_レ仰出_二九日佐々木治部少輔秀高式評定衆出仕始十二日布施彈正大夫入道可_レ爲_二評定衆一之由被_レ仰出_二之佐々木治部少輔恩賞方出仕始之六年十二月廿七日布施彈正大夫入道昌椿齋藤右衛門入道立觀可_レ爲_二式評定衆一之由被_レ仰出_二訖七年六月一日内談番文施行奉行佐々木大膳大夫秀高右筆布施彈正大夫入道十一月三日政所執事代事被_レ仰_二松田左衛門尉貞秀畢齋藤右衛門尉入道立觀所勞之間依令_二辭退一也八年五月廿二日布施彈正大夫入道爲_二圓覺寺奉行一○按佐々木氏は初式評定衆に補せられて出仕始を勤め日あらずし補する時は式字を除くことなり尙書求の按中ののへたり

四右種基親基齋五兵衛基飯四左爲衛依親樂不參衆治河國通飯新左爲脩十一月十五日總州辭式評定衆可_レ爲_二引付衆一方内談之旨屬立良被_レ申_二請奉書希代事也廿日飯尾下總守爲_二數神宮開闢并政所執事代等被_レ仰_二付之一加_二式評定衆已後不_二申沙汰一之上者辭式衆爲_二引付衆一可_レ奉行之旨以_二伊勢備中守貞藤被_レ仰_二出之舍弟肥前守之種御折檻之間所帶并奉行等悉被_レ仰_二付之一又云應仁元年正月廿六日政所内談始於_二住宅一在_レ之政所内評定着到伊勢兵庫助執事代雖爲_二式評定衆之却引付衆也古者式評定衆着座也今執事非_二式評定之放飯尾下總守下十七政所賦銘引付云寄人松田丹後守秀興文明六十二被_レ治部河内守國通文明六十清和泉守貞秀人下十五以上衆文明六正廿六著座分也○按以上四條は京都將軍の所司なり按式評定衆はなへての評定衆の列にありながら引付頭政所問註所の執事及評定奉行等を帶することなくして要職を攝せざるものなりされは例式の評定にのみあつかる意にて式字を加へられしなり此名目鎌倉殿の時には絶て見る所なく建武記に始て出たりされと鎌倉の世にも別に統職なき評定衆を常の辭にはしか呼れしこと有し成へしかの建武一統の御世に陸奥の鎮府に評定

引付等の衆を置れしも全く鎌倉の例にならひし處なれば其稱呼をも追れざるいはれなければなり此時兩衆に擊多くは鎌倉の奉行人の門族なりこれらをも思合すへし然れども元は辭にのみとなへ來りけむを正しく式字をそへて職名となせしはこの時を始なるへき但建武記には引付頭及其他要職を帶せる人をもすへてせし故に初にはたゞ當日の評定に列すへき衆といへる意にてなへて式評定衆とかけたる故なるへし別に評定衆といふものなきも其一證なりさて幾はくもなく足利殿の世となりて評定式評定の兩衆を置れけるに初の程は殊更に階級を分別せらるゝ事はなかりしかと要務を統攝すると例式の公事を沙汰するとの輕重はありしなり當時式衆たる者政所執事代にはなされけれと執事には補せられずこれその輕重あるされは式衆たる者も一旦恩賞方に加補する時は直に式字を除きて要務にもあつかれりこれ恩賞方は政府の要領たるを以てなり花營三代記に評定衆より式衆になされしこと見えたれこれに別は故ありて要務を止められしなればより常例にあらす恩賞方の職掌は恩賞奉行條にあり然るを世を経るに從ひ式衆の職掌往々被削せられひとへに揚名の職となりて御評定始御沙汰始等の席に臨むの外は所職なき様になりされはこそ伊勢飯尾等の如く式衆を辭して引付衆に還補し神宮開闢政所執事代等を兼行ふ變例もいてきしなれ思ふに此頃は引付衆の内或は者境にいたりあるひは病ありてしなれ職務に堪へざる類を以て式衆になさるゝもの多かりしなるへしこの式衆を補せられし事文明より後は絶て聞えず畢

竟揚名の職となりし故に自ら廢絶せしと見えたり
○寄合衆
北條記云時村建治三年爲_二六波羅一弘安五年任_二武藏守一同六年下_二向關東一正應二年五月爲_二寄合衆一正安三年八月爲_二連署一
又云宗宣正應元年任_二上野介一永仁四年正月爲_二引付頭一同十月爲_二寄合衆一同爲_二京下奉行一同五年七月十日爲_二六波羅南方一
又云久時正安三年爲_二一番引付頭一嘉元二年任_二武藏守一同三月六日爲_二寄合衆一爲_二官途奉行一德治二年三月出家同十一月卒
又云熙時正安三年爲_二評定衆一爲_二引付頭一嘉元三年爲<sub>二京下奉行一德治二年任_二武藏守一延慶二年四月九日爲_二寄合衆一應長元年十月三日爲_二連署一
按寄合衆といへるは執權及評定衆と共に國政を評議せらるつかさにて北條一家の内其任にあたる人たまさかに補任せらるゝ所なりもとより連綿の職ならされは其職に居りし人も亦多からず鎌倉殿の初政には宿老たる輩は定まれる職掌なき者といへともま、政務にあつかれる事ありしか評定引付の職掌いてきし後は其つかさ</sub>

武家名目抄第十一册

職名部 五下

にあらざるは參議すること絶たりさて後にこの寄合衆といふかいてきたり但此名目北條記の外には見る所なけれとも今推考もて思ふに大方北條貞時執權のほかに設けし所なるへしざるは北條家久しく國命をとりてやや衰政の時に至り外寇の憂などありければかく名稱の異なる所司を設けて執權と評定衆との間に居らしめ國務をたすけられしと見ゆ其重職たるは引付頭六波羅探題などよりもこれに補せられ又此職より直に連署に至るをもてするへきなり内々のさまは連署の衆に差つきしほどの大任にて有しなるへしなへて政務の事は評定の席にて議せるか舊式にはありけれど年をふるにしたかひて評定の席上にはさまく禮式のこと多くなりけるま、ひたすら政務を議すへきたために寄合といふことをはしめ評定衆の内さるへき輩執權の亭に會合して專要務を沙汰することにて來れり但これよりあなにも會中に合さしひしことさて此職を寄合衆といへるにつきて考ふるに例式なる評定の席にはのそますして寄合の席につらなり内議論定するつかさなりしと見ゆ足利殿の世となりては又此職を補せられしこと聞えず

○引付頭又稱内談頭人

○引付衆又稱内談衆

關東評定傳云建長元年己酉十二月始引付諸人評定衆前右馬權頭平政村朝臣十二月九日武藏守平朝直二月九日相摸三郎平資時法師法名眞昭十二月前尾張守平時章下十一月引付衆十三日始前和泉守藤原行方前筑前守藤原行泰前伊勢守藤原行綱左衛門尉藤原長泰左衛門尉藤原景綱

吾妻鏡云建長二年四月二日丁酉諸人訴論事於引付勘決文書理非之間加丁見之處旨趣爲分明者任先規不能對決又引付事已剋以前可始行之云頭人云奉行人莫及遲參且可進覺時付著到之由被觸仰三方引付三年六月五日甲午有評定(中略)次三方引付更被結番之爲三方秋田城介義景輕服之後始出仕奉行此事其番文云一方前右馬權頭政村常陸入道行日大曾禰右衛門尉長泰山山城前司俊平新江民部大夫以基○按政村日て政村は一番引付頭なり長泰は引付衆後平以基は寄人なり二番武藏守朝直太田民部大夫康連

武藤左衛門尉景綱中山城前司盛時山名進二郎行直○按行直定衆にて朝直は二番引付頭康連は同註所執事三番尾張前司時章對馬守倫長清左衛門尉滿定長田兵衛太郎廣雅越前四郎經成○按時章倫長滿定は評定衆にて時章は三番の頭なり廣雅經成は寄人なり四番攝津前司師員出羽前司行義伊勢前司行綱山名中務俊行皆吉大炊助文幸○按師員行義は引付衆俊行文幸は寄人なり五番伊賀式部大夫入道光西秋田城介義景和泉前司行方明石左近將監兼綱内記兵庫允祐村○按光西義景は引付衆兼綱祐村は寄人なり六番信濃民部大夫入道行然筑前々司行泰甲斐前司泰秀越前兵庫助政宗太田太郎兵衛尉康宗○按行然泰秀は引付衆政宗は寄人なり廿日己酉引付之事雖被結番之重々被壓其左右縮三方爲三方一番前右馬權頭攝津入道師和泉前司筑前々司大曾禰右衛門尉清左衛門尉中山城前司明石左近將監對馬左衛門尉越前四郎○按中山城前司以下は寄人なり二番武藏守出羽前司伊賀式部大夫入道太田民部大夫對馬守武藤左衛門尉山城前司越前兵庫助皆吉大炊助進士次郎藏人山名進次郎○按越前前司以下は寄人なり三番尾張前司信濃民部大夫入道秋田城介常陸入道伊勢前司山名中務伯耆右衛門尉内記兵庫允長田兵衛太郎○按山名中務以下四人は寄人なり關東評定すきすしれし故なり被せられし故なり

付頭武藏守平朝直付頭前尾張守平時章付頭式部大夫藤原光宗法師法名民部大夫藤原行盛法師法名行然政所執事四月廿前甲斐守大江泰秀前出羽守藤原行義前下野守藤原泰綱秋田城介藤原義景四月廿日爲常陸介藤原行久法師法名民部大夫三善康連同註所對馬守三善倫長左衛門尉清原滿定引付衆前和泉守藤原行方前筑前守藤原行泰前伊勢守藤原行綱左衛門尉藤原長泰左衛門尉藤原景綱掃部助平實時四月前佐渡守藤原基綱四月前備前守三善康持四月前參河守清原教隆四月

吾妻鏡云建長四年四月廿日癸酉被改引付番文之旨有其沙汰今月以評議之次被加人數秋田城介太田民部大夫康連等奉行之廿日癸未引付加三方爲五方以三民部大夫藤原行盛法師爲四番頭秋田城介藤原義景被定五番頭一二番頭人如元云々引付一番二前右馬權頭政村佐渡前司基綱備後前司康持伊勢前司行綱○按基綱以下三人は引付衆中山城前司盛時内記兵庫允祐村山名次郎行直二番武藏守朝直出羽前司行義伊賀式部入道光西清左衛門尉滿定越前兵庫助政宗皆吉大炊助文幸對馬左衛門尉仲康三番尾張前司時章陸奥掃部助實時常陸入道行日大曾禰左衛門尉長泰新江民部大夫以基太田太郎兵衛尉康宗長田兵

職名部 五下

衛太郎廣雅四番廿三信濃民部大夫入道行然和泉前司行方
對馬前司倫長武藤左衛門尉景賴深澤山城前司俊平甲斐前
司宗國山名中務丞俊行○按後平以下五番廿七秋田城介義景筑
前前司行泰三河前司教隆○按行泰教隆太田民部大夫康連進
士次郎藏人明石左近將監兼綱越前四郎經朝五年十二月廿
二日丙寅前和泉守藤原行方爲四番引付頭人○按行方行泰前筑
前守藤原行泰補五番引付頭○按行方行泰前筑
引付一番前右馬權頭政村佐波前司基綱備後前司康持伊勢
前司行綱城九郎泰盛○按基綱以下四中山城前司盛時內記兵
庫允祐村山名進次郎二番武藏守朝直出羽前司行義伊賀式
部大夫入道光西清左衛門尉滿定越前兵庫助政宗皆吉大炊
助文幸對馬左衛門尉仲康三番尾張前司時章陸奥掃部助實
時常陸入道行日城次郎賴景大曾禰左衛門尉長泰○按賴景長
幸少貳爲佐和泉前司行方○按爲佐行方對馬前司
倫長武藤左衛門尉景賴深澤山城前司甲斐前司山名中務丞
五番筑前前司行泰○按行泰是日頭人三河前司教隆太
田民部大夫進士次郎藏人明石左近將監越前四郎六年四
月廿九日壬申評定西園莊公地頭等所務事有共沙汰是本
地頭所務者可依往昔之由緒故追先規之例可令止

新儀非法也新地頭者被定率法之上者其外全可停止
濫吹也者存此越可加下知之由即被相觸五方引付
十二月一日己巳五方引付更被結番之引付一番前右馬
權頭佐波前司備後前司伊勢前司城九郎中山城前司內記兵
庫允山名進次郎佐波右京進○按右京進二番武藏守出羽前司伊賀式
部大夫入道縫殿頭○按縫殿頭清左衛門尉對馬左衛門尉三番尾張前司
播部助常陸入道大曾禰左衛門尉城次郎江民部大夫太田太
郎兵衛尉長田兵衛太郎四番和泉前司武藤左衛門尉對馬前
司前太宰少貳那波左近大夫將監○按那波左近大夫將監深澤山城前司甲斐
前司山名中務丞雜賀太郎○按雜賀太郎五番筑前前司太田民部大夫
參河前司明石左近將監長井太郎○按長井太郎善刑部丞進士次郎
藏人對馬左衛門次郎越前四郎○按越前四郎那波左近將監長井太郎三人は引付
衆なり外二人
又云康元元年四月廿九日庚寅三番引付四人等事有共沙
汰今日被定之所謂武藏守朝直爲一番引付頭前尾張
守時章爲二番頭越後守實時三番頭五月一日辛卯引付等
始行之六月五日甲子於御教書違背之咎者爲令召可
注進所領之由可下知之旨所被相觸五方引付也
又云正嘉二年五月十日己未錄倉中并國々雜人沙汰事被
定注法是可仰付主人并在所地頭事也其事書樣一錄倉
間註所召整斷陳狀可勘申是非

中并國々雜人沙汰事奉行人奉書二個度不叙用者可被
成御教書又彼狀及二個度不事行者於引付
尋明子細事實者可注申所領之由可被成御教書
次難治事同於引付可有共沙汰矣
又云弘長元年三月五日丁卯引付沙汰不事行之由訴人等
懇訴之越達上聞之間今日有評議向後無懈緩之儀早
速可申沙汰也於徒拘持奉行人等者頭人就注申可
被處重科之旨被觸仰引付
關東評定傳云弘長二年壬戌六月廿九日引付止評定衆前武藏
守平朝直○按平朝直前尾張守平時章○按平時章越後守平實時○按平實時前
和泉守藤原行方○按藤原行方秋田城介藤原泰盛○按藤原泰盛五月廿九日止
新編式目追加云鎌倉中諸堂供料事○按供料事寺用未下之間多
致無供之勤云々寺務并雜掌共以不法也於引付糺明
子細早速可令尋沙汰
吾妻鏡云文永二年六月十一日丁丑評定衆被新加所謂
前越前守平時廣中務權大輔平教時宮內權大輔大江時秀又
引付新前左近大夫將監平義政彈正少弼平業時左近大夫將
監平公時○按平公時備中守藤原行有前對馬守源氏信左衛門尉藤
原行實○按行實三年三月六日己亥諸人訴論事被止引付沙汰

關東評定傳云文永三年丙寅三月六日止三方引付事評定衆
前尾張守平時章○按平時章法師○按法師越後守平實時○按平實時引付頭
前越前守平時廣中務權大輔平教時前出羽守藤原行義
法師○按法師秋田城介藤原泰盛○按藤原泰盛三月止引付頭
人等六年己巳四月廿七日止同注所沙評定衆前尾張守平時章法
師○按法師越後守平實時○按平實時前越前守平時廣中務權大
輔平教時左近大夫將監平義政○按平義政四月廿七日止引付頭
番引付頭○按番引付頭藤原連下八人引付衆○按藤原連下八人左近大夫將監
平時村左近大夫將監平公時彈正少弼兼左馬權助平業時武
藏守平宜時左近大夫將監平顯時備中守藤原行有下野守藤
原景綱山城守藤原光政信濃守藤原行實左衛門尉藤原行清
左兵衛尉藤原顯盛左衛門尉藤原基賴左衛門尉藤原長經民
部大夫三善政康立番允三善倫經
太田康有記云建治三年八月廿九日評定衆自山內殿被
召之間馳來之處召御前被仰云武藏守可爲一番引付
頭武藏前司可爲二番頭越後守可爲三番頭早以此
旨可觸仰彼人々云々九月四日依召參山內殿之處
以平金吾被召御前任仰以安富民部三郎入道島田
七郎齋藤七郎兵衛尉長田新左衛門尉○按長田新左衛門尉已上政富來十郎○按政富來十郎行之

飯田三郎左衛門入道註入引付衆了○按政所公人とは即政所の寄人ないへり
 新式目云弘安七五一召文問狀事引付頭人可下奉書一引付評定事二方令寄合之時一方者廿ヶ條可申沙汰一引付衆并奉行事右引付衆殊尊清潔可勵參奉行入爲廉直致忠勤者尤可致賞翫挿奸心現私曲者永不
 可召仕仍引付忠否奉行曲直頭人不憚予人不及緩息遲々可註申也引付外奉行入政所問注所執事可申沙汰○按弘安七五に引付外奉行入といへるは政所問注所執事の寄人ないへり
 新編式目追加云鎌倉中諸堂修理并寄進所領事弘安七五方引付可申沙汰之由先日被仰下之處無沙汰云々修理事者頭人加見知嚴密可注申小破所爲別當之沙汰可修理之由可相觸所領事急速可申沙汰次法花堂事爲五番引付頭人之奉行修造發功間於五番可有沙汰次新釋迦堂事同前大慈寺可爲二番引付
 又云近國諸社修理御祈禱所御寄進所領等於引付可申沙汰事弘安七一番伊豆宇都宮二番三嶋社熱田六所宮二番鶴岡香取四番諏方上下五番箱根日光右寺社奉行入可尋下有子細者守此旨可賦引付也既有沙汰之分者本引付可申沙汰
 新式目云諸人訴訟問狀事正應三九訴狀爲非據名不可賦

之由可被仰問注所凡即時可成御教書之旨可被仰五方引付奉行一歟
 新編式目追加云神社佛寺訴訟事正應三九早速可有沙汰之由可被仰五方引付一歟
 又云充給惣領跡混領庶子分正應三九惣領主有罪科之時以別人令改補之處庶子等稱不給御下文無尋決知行實否頃年被付惣領之條甚爲不便之儀歟各別領知證據分明者縱雖不帶安堵御下文於本引付重有其沙汰可返付之由被仰下之後三方引付奉行人被結改畢然者雖非本引付於奉行入現在之方可申沙汰但無奉行人事於三番分者頭人依無相違猶於本引付以他奉行入可糾明於三番者不被改頭人至四番五番者止其方々畢彼三方者自問注所可賦出引付方也
 北條記云永仁元年六月引付頭時村一道鑿二師時三十月止引付置執奏時村道鑿師時惠日宗宣道隆宗秀等也三年十月廿四日始五方引付於重事者停直聽斷○按弘安元年にいたるまで元年五番なり
 又云宗宣守永仁元年七月爲小侍奉行同十月止引付執奏諸人訴訟同四年正月爲四番引付頭同十月爲寄

合衆同五年七月十日爲六波羅南方乾元元年二月十八日爲一番引付頭同八月爲官途奉行
 又云乾元元年二月十八日引付頭宗宣一久時二宗泰三照時四道雄五九月十一日引付頭宗宣一久時二宗泰三宗方四時家五照時六道雄七道嚴八
 又云道嚴源清入道弘安元年二月加評定衆正安元年正月六日加奏事人數乾元元年九月十一日爲八番引付頭嘉元元年四月十四日卒
 又云嘉元元年四月十一日引付頭宗宣一久時二宗泰三宗方四時家五照時六時高七道雄八二年九月廿五日引付頭宗宣一久時二宗泰三宗方四照時五時高六道雄七十二月七日引付頭宗宣一久時二宗泰三照時四時高五三年八月廿二日引付頭久時一照時二基時三時高四道雄五
 又云德治二年正月廿八日引付頭照時一國時二基時三時高四維貞五顯實六道雄七
 又云延慶二年三月十五日引付頭照時一國時二貞顯三基時四齊時五維貞六顯實七三年二月十八日引付頭照時一國時二基時三齊時四維貞五顯實六
 又云應長元年十月廿五日引付頭國時一基時二齊時三維貞四顯實五

又云元應元年閏七月十三日引付頭守時一顯實二貞宣三貞宣四時顯五○按弘安七五に引付頭守時一顯實二貞宣三貞宣四時顯五とありて五番なり故に弘安七五に於ては太平記云青砥左衛門報光寺時最勝園寺時二代ノ相州ニ仕ヘテ引付ノ人數ニ列リケル青砥左衛門ト云者アリ(中略)或時德宗領ニ沙汰出來テ地下ノ公文ト相摸守ト訴陳ニ番フコトアリ理非懸隔シテ公文カ申處道理ナリケレトモ奉行頭人評定衆皆德宗領ニ憚テ公文ヲ負シケルヲ青砥左衛門只一人權門ニモ不恐理ノ當ル處ヲ具ニ申立テ遂ニ相摸守ヲ負シケル公文其恩ヲ報セントヤ思ケン錢ヲ三百貫俵ニ裏ンテ後ノ山ヨリ潛カニ青砥左衛門カ坪ノ内ヘン入レタリケル青砥左衛門大ニ怒リ沙汰ノ理非ヲ申ツルハ相摸殿ヲ思ヒ奉ル故ナリ若引出物ヲ取ヘクハ相摸殿ヨリコソシ給フヘケレトテ一錢ヲモ遂ニ用ス田舎マテ持送セテ返シケル○按青砥左衛門引付衆たること評定傳に見えず思ふに寄人にまれの家にありて青砥氏なごは其筋ならは正しく引付衆なるべきいはれなきことなり
 尊卑分脈云佐々木清高使左衛門尉從五位下叙留元弘二五九於江州馬場自害關東引付○按以上二十條は鎌倉將軍の所司なり

庭訓往來云御沙汰既嚴密所被執行也更非停滯豫儀之
政道訴訟若有悠悠緩怠之儀者御在洛之費也可被用
意活持之計略先被遣舉狀代者公所之出仕諸亭之經廻
可申圖師也奉行人賄賂衆中屬託上衆秘計口入頭人內
奏最負伺機嫌可申之讓狀謀實越境相論未分甲乙之
次第禮代相傳之重書等者於引付方可被遂御沙汰
頭人上衆聞閣右筆奉行人等爲終日御評定難有窮屈
更無御休息被勘判就問注所賦_{問重}執筆書與問狀
奉書於訴人之時及兩度無音仰使節被下召符就
違背散狀者直被下知于訴人一令召進之時被封下
訴狀番三問答訴陳於御前遂對決任離雄其非奉
行人令取捨事書於引付窺御評定異見所令成敗
也問注所者永代沾券安階年紀放券奴婢雜人券契和與狀負
累證文等謀實糾明之管領宰人右筆奉行人等評判也奉行
人得差符方與奪當參仁者成書下下國之時者下奉書
而無音之時下使節召文調訴陳狀相對當所執事管領
奉行人等可致問答被露沙汰就探題之異見所加下
知也侍所者謀叛殺害山海兩賦強竊二盜放火及傷打擲踈
躡勾引路次狼籍鬪爭喧嘩等也管領執事奉行人檢斷之所
司代賦訴狀於右筆之時以小舍人或下部等召出犯人

於侍所記錄申詞依言色辨嫌疑糾明犯否之時所犯
已無所遁者則召籠之或及推問拷問訊等尋搜之隨
事輕重其人是非可被行之次寺社訴訟者就本所舉達
被是非之越訴覆勘者依探題管領與奪被執行之奏
事於庭中家務恩賞方式不可勝計也
○按本文に奉行人賄賂
貼衆中屬託上衆秘計
口入頭人内奏最負伺機嫌可申之讓狀謀實越境相論未分甲乙之
次第禮代相傳之重書等者於引付方可被遂御沙汰頭人上衆聞閣右筆奉行人等爲終日御評定難有窮屈更無御休息被勘判就問注所賦問重執筆書與問狀奉書於訴人之時及兩度無音仰使節被下召符就違背散狀者直被下知于訴人一令召進之時被封下訴狀番三問答訴陳於御前遂對決任離雄其非奉行人令取捨事書於引付窺御評定異見所令成敗也問注所者永代沾券安階年紀放券奴婢雜人券契和與狀負累證文等謀實糾明之管領宰人右筆奉行人等評判也奉行人得差符方與奪當參仁者成書下下國之時者下奉書而無音之時下使節召文調訴陳狀相對當所執事管領奉行人等可致問答被露沙汰就探題之異見所加下知也侍所者謀叛殺害山海兩賦強竊二盜放火及傷打擲踈躡勾引路次狼籍鬪爭喧嘩等也管領執事奉行人檢斷之所司代賦訴狀於右筆之時以小舍人或下部等召出犯人
彌太郎堀原七郎入道行_{合奉}二番三河前司_{親常陸前司}知伊賀左
衛門二郎藤原藤部大夫入道肥前法橋丹後四郎豊前孫五郎
合奉三番山城左衛門大夫行伊達左近藏人朝武石二郎左衛門
尉_{親安威左衛門尉}下山修理亮飯尾次郎齋藤五郎_{合奉}諸奉
行政所執事山城左衛門大夫評定奉行信濃入道寺社奉行安
威左衛門入道藤原藤部大夫入道安堵奉行肥前法橋飯尾左
衛門二郎<sub>○按此引付諸奉行は建武一統のさき鎮守府におかれしころ
道三河前司山城左衛門大夫伊達左近藏人等は評定衆の内にて
引付所人をつらねたるなり故に當の始につらねし見ゆ</sub>
東寺文書云東寺領攝津國垂水庄雜草祐實謹弁申欲早被

非捐朝倉彌太郎重方謀訴當庄下司公文兩職間事右當庄者
嵯峨天皇御宇弘仁三年贈四品布勢内親王家御寄附之地五
百余歲之間本所一圓之寺領下司公文職等寺家進止之條
無相違之處去建武五年號采女播磨局代孫子朝倉孫太
郎重方下司公文職事於三番御引付方爲門真彈正忠入
道奉行致訴訟之間相尋子細於彼局之處不存知之
由采女播磨局和字狀如此云々

委細之旨趣無據糾明歟任先例尋問當知行之實否
於有證人等者須成賜紛失安堵御下文至同年已來
分者中舊規於事書在所_{恩賞方安堵}可有其沙汰焉次
不知行地事於內談方且相尋當時之領主糾明證據可
是非子細同前一方內談_{武州}奉行人門真左衛門
清和源氏系國清島山修理大夫阿波守右京大夫評定奉
行云々引付頭人關東執事康安二卒
又云賴春細川源九郎讚岐守引付頭人侍所觀應三閏二廿
於四條大宮討死顯氏同小四郎兵部少輔陸奥守引付頭人
又云滿義吉良左兵衛佐左京大夫引付頭人
尊卑分脈云國兼山縣九郎大炊助曆應康永頃引付一番手奉
行

建武式目追加云一寺社并本所領以下押領盡事<sub>歷應三四十
五御沙汰</sub>近
年武家被管人甲乙之輩令違背下知御教書剩對子守護
使并使節等及合戰狼籍之由有其聞_{粹超}常籍然者
別而可有嚴密之沙汰奉行人令隨身文書直令披露
者可被裁_{判罪名}之旨可觸_仰五方引付焉一雖給
御下文不知行下地_{盡事}仁政_{仁政}歟之
由前々內談訖可爲引付行事之間向後不可有其沙
汰也又云本所寺社領事方々施行停滯頭人并奉行緩息空
經廿日者任本條宜經直訴嚴密遵行之可申
左右之由差日限可仰本引付方但有日數已前諸
方難章亦及濫訴者暫可被_開被_訴訟也
又云文書紛失盡訴<sub>貞和二閏九
廿七評定</sub>可爲內談方所務之由
先日雖有其沙汰於建武三年已前分者無事書之間

太平記云<sub>比叡山
高上杉ノ人々將軍ノ御前ニ參シテ評定シ
ケルトコロニ北小路ノ玄惠法印出來レリ(中略)内外ノ理
致明カニ盡言被申タリケレハ將軍左兵衛督ヲ奉始高
上杉頭人評定衆ニ至ルマテサテハ山門ナクテハ天下ヲ治
ルコト有マンカケリト信仰シテ云々
園太曆云文和元年五月一日傳聞自今日歟武家執_三行雜
務引付高駿河入道_{大高伊豫守}重成爲_三兩頭人行_之云</sub>

御評定着坐次第云文和三年五月廿日寶篋院殿御自筆御記云評定始又三方内談初也

後恩味記云貞治二年八月廿四日庚申畑莊事今日奉行人依田左近大夫時朝披露之可成奉行之由治定云々爲悦了引付頭人尾張將監義高大夫入道(高経)孫當時執事也

花營三代記云應安元年十二月十九日禪律内談始行於御前管領佐々木大夫判官入道三月八日一方内談左武衛始行四月三日一方内談今川與六月十五日内談山名左京大夫入道并子息中務少輔始行之於御所三年四月十一日一方内談始行左兵衛六月十七日一方内談始行細川兵衛十八日一方内談始行山名同日一方内談始行今川與廿日一方内談始行仁木兵衛

九月二日一方内談頭人今川與州禪門(虫使)被仰吉見右馬頭入道之處領狀云々禪律方頭人事被仰赤松律師坊之處同前按本文に管領佐々木云々あるは禪律方頭人のことなり執權をいふにあらず

又云永和元年十一月廿六日細川兵部大輔可爲頭人之由被仰下之同日五方引付侍所兼文施行清和源氏系圖云直頼澁川太郎中務大輔引付頭人又云宣義桃井右馬權頭引付頭人

今川了俊書札禮云此間われく向て書札の禮に進上恐惶と遊はし候無勿體候昔はむかし今はいまにて候之間

文安年中御番帳云奉行來松田治部齋藤諏訪中澤清飯尾布施茨木雜賀○按ここに奉行來とあるは引付衆及び政所寄人なりす(いへ)施茨木雜賀も此内茨木雜賀の兩家は引付衆には補せられざる也康富記云寶徳元年四月廿九日室町殿征夷大將軍并禁色等宣下也(中略)其後有御判始被行吉書儀吉書儀管領著殿上被行之頭人波多野二階堂問注所野攝津掃部頭等也

政所賦銘引付云政所内評定始着到寛正二年正月廿六日伊勢守諏訪信濃守松田丹後守飯尾加賀守飯尾左衛門大夫治部河内守飯尾兵衛大夫清式部丞齋藤大藏丞齋藤五郎兵衛尉清四郎左衛門尉諏訪左近將監種基○按種基は齋藤四郎右衛門尉なり此時の相觸折紙書儀相觸之諏訪信濃守松田丹後守飯尾加賀守殿此三人依爲引付衆明後日廿六午尅政所内評定始被執行可レ有參勤之由候齋藤三郎兵衛入道奉依(勲)樂(先)參勤飯尾左衛門大夫殿奉治部河内守殿奉齋藤四郎右衛門尉殿奉清式部丞殿奉齋藤大藏丞殿奉齋藤五郎兵衛尉殿奉清四郎左衛門尉殿奉諏訪左近將監殿奉飯尾大當年始而爲寄人

當日相定之間兼日不加之仍申遣折紙書儀今日午尅政所内評定始被執行可レ有參勤之由候恐々謹言一一一飯尾兵衛大夫殿政所代諱○按伊勢守に評定衆にて政所執事なり飯尾兵衛大夫殿政所代諱 助信濃守松田丹後守飯尾加賀守三人は評定衆にて引付頭人なり其他十人は政所寄人なり引付衆は其數あはれるからに政所執事より使者を以て一人ここにこれを通しなへての寄人へは政所の

堅辭退申度候へ共但我等かとは既九州の管領時分に候則將軍家の身を被分位に被居候之間式躰は公方に向申候ての御禮かど心得申候間辭退所なく候今も我々當職上表申候者自他等輩之儀たるへく候間相互に恐々謹言たるへく候今も京都にても大方の一方之引付の頭人に成ぬれば其かかりの上衆達まして評定衆奉行人等皆々恐惶可

書にて候間六波羅の頭人九州探題には恐惶の御禮不可有子細候是公方を恐と申あるへく候間更に私之御禮に預申候とは思ましく候○按ここに上衆といふは其かかりの頭人尊卑分脈云滿經細川陸奥守從四位下引付頭人滿經子持經中務大輔陸奥守引付頭人

又云義範改義一色兵部少輔頭人義範子義直修理大夫左京大夫頭人中原氏系圖云能直攝津掃部頭從四下評定衆引付衆權頭能直男能秀掃部頭從五上左馬助評定衆權頭地方頭始伊勢家記云應永廿八年正月十一日御評定始管領頭人有出仕御所様有御對面頭人四人攝津左馬助波多野入道問注所二階堂卅二年正月十一日御評定始管領頭人出仕頭人三人出仕攝津左馬助滿親波多野因幡入道元昌問注所刑部少輔康雄

公人に圖文をもたしめてめくらしつくるならひなりさみゆ文明御評定の賦銘引付にも於引付衆一者以て使者相觸之といふ文あり齋藤親基記云寛正六年八月十六日寅刻大水出溢山城半國放生川如大海(中略)評定衆少々同右筆方玄良國通種基親基爲衡元俊等自十四日罷越云々十二月卅日飯大夫之種前任一方内談衆御免仍御祝方梳飯方方上表則御祝方被仰引付貞有梳飯方被仰引付元運○按ここに右氏衆とあるは引付衆とあるなり

又云文正元年十一月十五日總州飯尾辭三式評定衆一同爲引付衆一方内談之旨屬玄良被申請奉書希代事也政所賦銘引付云寄人松田丹後守秀興文明六十二年治部河内守國通清和泉守貞秀入道飯尾美濃守貞有下十四人以上衆文明六正廿六着坐分也此内六人今日所加也例各被遣頭人御奉先著文明十一年清和泉守貞秀布施下野守英基執布施但馬入道秀清備中守齋藤大藏丞基齋藤上野介秀基引清式部大夫元長下十四人常徳院殿江州御動座在陣衆着到云右筆奉行衆齋藤大藏入道元茂飯尾隼人佑中澤備前守齋藤民部大輔清筑後守松田九郎左衛門尉飯尾美濃守同四郎左衛門尉御評定同加賀守清房同松田丹後守齋藤中務大輔飯尾左衛門大夫布施右衛門大夫飯尾大藏左衛門尉飯尾肥前守爲修同大藏大

輔政訪信濃守○按ここに右奉奉行衆といふも

常照恩草云番文之事是は五方引付の番文なりそれには土岐佐々木伊勢大和をも被入候。又攝津二階堂波多野町野など事も番文に入候正頭權頭とて二人は一段賞賚也第一を正頭といふなり至近代は正頭と申かたは吉良殿石橋殿山名殿一色殿細川奥州などなり畠山匠作被召加しことも在之云々次に權頭には攝津二階堂伊勢波多野佐々木加賀などにて候つる。○按正頭は實足利家の第一に正頭の人を書て其次に權頭を書候て其外は位階次第にもしるし候や又は舊來新來の差別も可之之此外右筆輩數多かき加へ候此番文と申すこと昔は其時代之公人奉行一代に必申沙汰仕て人数を注したることなり近代は無沙汰云々古は天下の諸公事を此五方の頭人令存知評定をなし理非を分申定畢應永年中まではさやうのことも有之其後五方の人數計は公人奉行も書立て候得共不及其沙汰なりはてしなり

大館常與記云天文七年九月廿日御内談衆昨日は無來臨今日來入荒禮部攝州豆州海備州本常州也九年二月十七日御沙汰始也仍御内談衆も毎年御太刀金進上也然間御太刀金御申次州へ進入候て如惣次預御披露は可畏

義昭將軍諸役附云奉行衆政訪信濃守晴長飯尾加賀守盛就飯尾右馬助秀通諏方神兵衛尉俊卿松田九郎左衛門尉賴長二階堂山城守晴泰波多野彦五郎通秀大館上總介氏虎一色七郎勝貴竹田梅松軒香波宮内大輔國任後飯坂田○按ここに奉行衆と云は引付衆をもち政所寄人をもすへて云るなり此内二階堂波多野兩家は世々評定衆の家なれども此時すでに評定衆の稱謂たるなりしは奉行衆の内につらなりしに少ゆ又一色竹田書卷などはも政所職候の家にては無しを此時更に加稱せられたるへし永祿六年諸役附にのせたる奉行衆は飯尾國助中津松田拾部布庵等の諸姓にて何れも貴家の奉行なり候て思ふに武家漸く衰弊すといへども光義院殿の代まではなほ自づから貴家の者なれて補せられしに少ゆ然るを義昭將軍の時となりては人数もかたすなりければ其すぢならぬも加へられしなるへし以上廿四條京將都軍家の所司なり喜連川判鑑云永和四年八月廿七日長井掃部頭入道道廣頭人ニ補シ始テ行レ之

鎌倉大草紙云應永五年十一月四日氏滿四十二歳にて御遊去也(中畧)若君滿兼公從四位下左兵衛督御補任にて鎌倉に備り給ふ管領は上杉中務禪助承之引付頭人二階堂野州入道清春一方頭人長井掃部助入道道供禪律奉行町野信濃守入道淨善越訴之奉行二階堂山城宮内入道行康等也上杉系圖云能俊宅間左衛門佐引付一番頭人號二妙山又名道高應永八年十月晦日死

喜連川判鑑云應永二十四年正月五日佐竹義憲越後軍ヲ起シ滿隆持仲禪秀ト合戰禪秀敗北シテ鎌倉ニ引退ク同十日滿隆持仲禪秀於雪下自害同十七日鎌倉へ還御淨妙

職名部五下

入存候由申之使者松下平兵衛也依不叶行歩如之此自余のかたより各へ折紙在之如此也日向伊藤一官事内々彈正大弼雖望申今度大膳大夫所望之由申候各御存分可有御申伊藤被官一條殿參候書狀爲御披見被出之候これ普通之儀に候不苦申事候於元造存意候恐々謹言三月四日御内談衆中御中攝津守元造列如仰大膳大夫事四職大夫之内普通候哉但伊藤家には無其例候得共しゆんきよの例をもつて望申候尤も宜爲御衆議候大弼よりは大膳可然哉と令存候如此こと書申之十年十一月十二日恩老御内談衆御免事佐方へ以書狀申之也十四日宮内卿御局より佐かたへ文今朝拜見申候仍恩老連々御内談衆儀預御免候は、可忝存候以外老もう仕候耳も不聞候旁以御詔言候由申上候其段佐かたへの恩札を被備上覽候處申段尤とは被思召候へとも時分からと申旁以先此間のことくにて可然候御座敷などへ不罷出候共其分尤可然被思召候由上意候由被仰也御懇之上意之段は千々萬々忝奉存候然とも重而御詔言可申上候分也廿四日晴光方より御内談衆爲恩老代參勤候へとも今日より斟酌仕候由以書狀申之

寺ニ入御上杉安房守憲基管領職如元佐竹左馬助義憲ニ軍功ノ賞被行評定ノ頭人ニ補セラル東亂記云鎌倉合戦上杉安房守數萬ノ軍勢ヲ引卒シ同四日上州ヲ打立同月十九日ニ分陪川原ニ着玉ハ御旗本ノ人々御内外様ノ侍奉行頭人ニ至ルマテ公方ヲ拾置申憲實ノ勢ヘソ馳加ハル

鎌倉年中行事記云正月朔日ノ椀飯ハ管領ヨリ參ル椀飯率行直垂ニテ出仕是ハ右筆勤之御酒式三獻此御祝ニハ宿老中皆御荷用ヲ被申其後公方様大間へ御飯アリテ内之御椀飯始也仍御袋様上臈中臈下臈如朝皆々御參御荷用之方々ハ上古ハ引付之衆御椀飯御荷用ヲモ御免アリ近年被破之廿三日鶴岡御社參御幣ノ役并御劔ノ役一方ハ以御使ニ被仰出次ニ評定御教書拜領ノ方ハ右筆マカリ出日限ヲモ申又當日時節ヲモ申也引付衆以下ハ皆以短冊被觸之

又云引付之衆トハ評定衆ノ下司ヲ云フ也○按ここに下司と記おはせざるなり副職又は佐職とも稱すへし下司といひてはよく其意を盡下れることくはきこゆればなり以上七條は鎌倉公方家の所司なり按引付衆は評定衆補助の職にして訴訟はさらなり其余の公事なへてうけたまはり沙汰せる重職なれば評定衆にさしつきて諸奉行の職を帯せるならひなりこれを公

家の官職に比するに参議もしくは左右辨官の職掌に當りりも引付といへるは記録の名より以てし名目なりすへて引付といふ記録にさま／＼あり政所にては訴訟の始末を注記しその訟を沙汰せる奉行人の姓名を傍書したる記録をなつて賦銘引付といふ鎌倉殿の時の引付は政所賦銘引付といふ長祿以來申次郎に改業拜領の次第をいひし記をも引付といへり所に申次の次に近年被由承候へ共業様御引付には節期衆走衆前に其他何事にもあれ後證となすへきことを記録せしものをはしか云しとみゆ當世御家人たるはるもの其餘敷をしるせし簿を引付と稱せるも亦其一なり引付の名は武家にかきりたるにあらす神祇佛寺にても先例又は會館などの始末を記せし文を引引は導引の意にてこの手引となすへきいはれあり序引なきいふも付は著識の義にして當世物を記したるを書付といへるに同じさてこの輩は政所に祇候して訴訟以下の公務を沙汰するを本務とし文官の宰たるか故に記録所祇候の意を以て引付衆と稱せるなり諸職の記録の内政所の引付より上なるもいまた引付を置れさりしほどは此衆を政所寄人といへり建長元年に至りて始めて引付三番をおかれしとき評定衆の内北條政村同朝直同資時三人を頭人に兼補せしめ寄人の内五人をも引付衆とせりこのさまにも引付衆に補せられざるやから元

を奉行する同四年に二番をまして五番となし頭二人衆四人を加置せらる同五年引付衆二階堂行方同恭二人を以て頭人の關に補す凡引付衆たるもの頭を稱せるは此二人の外絶えてあることなし足利殿のさまにも評定衆ならずして頭人に補せられしことなき又同六年に引付衆を加増せられて十四人となる是より後は十人にくたることなし弘長二年四五の貳番を止め更に三番となさる文永三年にいたつて引付の沙汰を止められしかは頭人はなへての評定衆となり引付衆は寄人に還れり同六年引付の沙汰を復されて更に頭五人衆十余人を補せらる正應三年にいたりて更に二番を止め三番とせられたりしか永仁元年又引付の執務をことめ特に執奏の職を設けて訴訟裁判の沙汰をいたさしむ同三年又引付を復して五番をおかる其職掌に於ても亦初めに異なるとなしすてにして乾元元年更に其員を増加せられ八番となるそれより後嘉元徳治應長文保の際しは／＼増減ありあるひは五番六番となりあるひは七番八番にいたることあり數年の間すへて一定あることなし思ふに此ころ北條家衰弊の時いたりて政事漸く類廢し法制規摸するところなかりしゆゑなるへししかるに元應元年ふたたび五番に復せらしより元弘に及ぶま

て十余年の間亦此制を改めさりしなり足利家の代となりても全く其法に習ひしと見えて等持院殿政務の始建武年中引付を置れし時頃て五番を設頭五人を補せられて引付衆十余人を五方に分隸し各寄人數人を副られたり建武式目追加なる應永三年の條目に五方引付とあり又花管三代記又永元元年の所にも五方引付とあり五方ありて各頭人の名をのせ替座次第に文和三年五月廿日評定始又三方内談始と見ゆ貞和は應永と應安との間なりさらば貞和の條しはし／＼三番になされしこと聞ゆれど五方内談始必一日に限れる事ならされは當時五方ありながら其日は三方の内談始なりしとみゆ何れにも前後なく五方とありは五番ありしこと疑ふべきにあらす内談始とは引付の沙汰始といふなり此ころにいたりてつねには引付衆を内談衆ともいひあるひは此衆を寄人とをなへて右筆衆奉行衆とも稱せり又ともに政所寄人ともよはれしなりこれは鎌倉殿のときいまた引付をおかれさりしほどはいつれも政所寄人にてありければおのすからその稱呼ののこれるなるへし凡この頭人は鎌倉の世には北條一家の内評定衆たるものをもてなさるるを常例とすされどもその關に補せらるべき人なき時には他姓の人もまた補せられしかと一番より三番にいたりて三方は必北條一家にかきりて他姓を補せざるならひなり他姓にて三番の頭人となりしは安足利殿にいたりても吉良石橋山名一色細川畠山を始め一家の輩をもてこれに補せらる但こゝにいふ細川畠山は支流の筋にて管領の

家にはあらす此外今川仁木吉見等も補せられしなり何れも一門なればなるへしこれを正頭と稱す又他姓には攝津二階堂以下伊勢波多野佐々木加賀等の族評定衆たるもの亦頭人に兼補せらる此輩をは權頭といふ正頭よりは一しな下れるものなり但權には權頭をいひたすへす又鎌倉の時は正權の分別ありし事所見なしといへども初めは此北條家と他姓とを分ちてまひひしことありしにや知らず衆を引付頭といひ中頃より内談頭人なども稱せしかいつとなく頭人とのみよひて引付の頭と聞ゆることくなりこれには政所一局の稱呼外へ及ぼせしのみにはあらず政府の重職たる故なるへし此内に地方頭人神宮頭人禪律頭人など職掌さま／＼あり其よしは各條に辨せり初め鎌倉殿の時評定衆に關あれば必引付の衆より轉補せるならひなりしか足利家にいたりては兩衆のやからやうやく定まりて各其職を世々にせるさまなりしかとたしかに議定せられしことにもあらされどま轉補せられし類もありしなり又此衆を内談衆とも稱せる故は評定衆は政所の長官なれば評定の席にて政務を裁判し引付衆は次官なるを以て政所内評定の時に事務を評議せる由縁にて内談衆とも稱せしなり内評定をつねには内談といひし故なり鎌倉殿の時は内談衆といへる所所見なし談方といふこと見えたりは鎌倉の世また引付衆と寄人とを右

筆衆といへるは頭人の指揮に従ひ執筆の役をつとむるよしのつかさなればなるへし 右筆衆を合せみるへし凡執筆 にはあれど鎌倉殿にては引付衆のこゝを全く右筆衆と稱せしこゝ えすこれに引付衆の番こゝにおのつから右筆といふをわかれたれば 足利家には別に右筆といふがなければはこゝ此衆なへて右 筆衆といひし見ゆ次なる引付右筆衆をも合せみるへし 中頃より 此衆を中老とよはるることのあるは評定衆を宿老といふにひかへし稱呼と見えたり 尚宿老中老の條をも合みるへし

○引付右筆又稱引付執筆

吾妻鏡云康元元年正月十六日戊申越前兵庫助政宗卒年五

二番引付右筆

又云文永二年六月十一日丁丑評定衆被_ニ新加_一(中略)又引

付新衆左近大夫將監平義政彈正少弼平業時左近大夫將監

平公時已上備中守藤原行有前對馬守源氏信左衛門尉藤原

行實已上高水右近三郎三番是壹岐五郎左衛門尉爲忠辭退之

替所_ニ被_ニ召加_一也

太田康有記云建治三年九月六日一番引付注文進_ニ武州_一五

番執筆合奉行交名付_ニ城務_一當所新參寄人等與_ニ書下_一了按

已上三條は鎌倉將

軍家の所司なり

花營三代記云應安元年三月八日一方内談左武衛始行右筆安

威左衛門入道二年四月廿二日一方内談左武衛始_ニ行之_一右

筆安左入

又云康曆元年八月廿五日政所内評定始一方左兵衛佐入道奉行入道津持部頭二年三月廿九日一方左兵衛入道奉行佐々木大

宗吾大草紙云兩判のとき表巻には等輩の時は右筆の人位

高くと日の下に名をかくへし一方上衆ならば表巻には

上衆の名を書へし假は奉行と評定衆のとき表巻には評定

衆の名を書へきなり自余准_レ之 按上衆とは位階上首の人をいへ

評するさきのことをいへるなり上首のことは

既に引付の條なる庭訓往來の所にも註せり

按引付右筆は五方引付の番ことに置るよつかさにて政

所寄人の帯せる所職なり人数は大かた二三人もあり 政務裁評

の席に祇候してむねと書記をつかさどるか故に右筆と

も執筆ともいへり其等級は引付衆より一きは下りたる

者なるかなへての寄人の内にては頭たる者も鎌倉

殿のよには此定めなりしかと足利家に至りては別に右

筆をおかれずして奉行人の内より時に臨みて執筆の役

に従事せしとみゆ當時引付右筆といひしことのものに

みえざるのみならず其頃つねの辭に引付衆と政所寄人

とをなへて右筆衆と稱せしをも思合せてささるへし

應安康曆の政奉行入道藤原頼朝等右筆をつかさめしこゝ花營三代記に見

えて既に本文に引たりこれら何れも臨時の所役なりしと見ゆ

192
55

192
55

Handwritten notes and sketches on the right page:

Four small bird-like symbols in a horizontal line at the top.

Below them, a larger sketch of a bird in flight, possibly a hawk or eagle, with wings spread.

Handwritten text in cursive script, appearing to be a name or title, possibly "C. ...".

Below this, another sketch of a bird in flight, similar to the one above.

Handwritten text in cursive script, possibly "C. ...".

At the bottom, a wavy line representing a horizon or ground, with a small sketch of a bird or object above it.

Below the wavy line, more handwritten text in cursive script, possibly "C. ...".



